

# 西周式土器成立の背景（上）

西江清高

はじめに

- 一 渭河流域出土の鬲の系統
  - 二 西周前期の土器
  - 三 A類鬲を主体とする土器群（土器群A）の変遷
  - 四 B類鬲を主体とする土器群（土器群B）の変遷（以上本冊）
  - 五 C類鬲を主体とする土器群（土器群C）の変遷
  - 六 土器群の分布と相互関係
  - 七 西周式土器の系譜
- おわりに

西周式土器成立の背景（上）

## はじめに

西周式土器とは、西周王朝の中心地豊鎬遺跡に認められる一つの土器様式のことである。この土器様式は、西周王朝の成立と同時に出現したのではなく、克殷後一定の期間を経て、西周前期のある段階からようやく確立されたものであった。当然、西周初葉期あるいはそれ以前に遡る成立への長い過程があったと考えられる。ある歴史的過程の中から一つの新しい土器様式が生まれてくるとき、しばしばその成立が既成の単系的な土器系統の発展によるのではなく、複数の相異なる土器の系統がそこにかかわっている状況を予想することができる。西周式土器の成立もまたそのような背景をもつと考えるならば、成立にかかわった先行する土器の諸系統あるいは諸文化はどのようなものであるのか、またそもそもどのような考古学的な先行文化が設定できるのであろうか。本稿は、西周式土器の成立に関連をもったであろう土器の諸系統を、西周王朝以前の関中地方の状況に遡って検討し、この視点から王朝成立前後の「周」の動向の文化史的な側面を探ることを課題としている。

一九五〇年代に本格的に始まる西周の都城豊、鎬周辺の調査<sup>①</sup>によって、現在では、土器、青銅器を柱とした西周時代の考古学的な編年はようやくその基本的な枠組みが確立されつつある。西周時代の周王朝の文化的様相が知られるにともなうて、当然、考古学的にそれに先行する時期の文化に対しても関心が高まり、特に七〇年代以降、扶風、岐山兩県一帯で王朝以前からの周の拠点であった周原に關係する諸遺跡の調査が進展すると、克殷以前に遡る周の文化を、早周文化<sup>②</sup>あるいは先周文化<sup>③</sup>と呼称し、これをめぐって多くの議論が生まれた。

先周文化、あるいは早周文化をめぐる研究動向の全般については、李峰氏により的確に整理された論述があり、本稿では割愛する。その李氏のまとめからも明らかのように、議論の一つの焦点は、克殷前後の関中地方に広く見られる代表的な土器である鬲の中に、一般に高領袋足鬲と呼ばれるものと、聯裆鬲（癩裆鬲）と呼ばれるものがあり、この両者の関係をどのように認識するかという点に集まっている。すなわち、ごく粗略に言えば、この2種の鬲が、本来西周以前に並存した、別の集団に関係する、異なる伝統に属する土器であるとする第一の立場と、高領袋足鬲は西周王朝以前に遡る鬲で、聯裆鬲は大部分が基本的に王朝期に年代の下がる鬲であるとし、先周時期における両者の並行の構図を考えない第二の立場がある。ただし、後者において、2種の鬲に系譜的な前後のつながりがあると考えられているわけではない。さらに、2種の鬲は異なる形式に属し、西周以前に並行しているが、これらはいずれも同じく周文化の伝統に属する2形式の土器であると考え第三の立場がある。したがって、第三の立場からは、2種の鬲の消長や相互関係は、あくまで「周」文化の内的な展開として評価される。<sup>①</sup>

筆者は結論から言うと、右の第一の立場に近い考えをもっており、2種の鬲は単に鬲の形式が相違するだけではなく、それぞれの鬲を土器組成の一部としてもつ異なる土器の伝統を形成していたと理解する。しかもここに、これら2種の鬲のほかに、近年しだいに資料が増加しつつある第三種の鬲として、関中地方における殷系の鬲にも注目し、それを含む関中地方在地の殷系の土器群が、他の2種の鬲に代表される二つの土器群と並行し、三者が相互に関連しつつ先周時期の土器群が展開したという構図を描こうと考えている。

本稿は、まず型式学的検討の主たる対象となる関中地方に行われた鬲の諸系統を、従来必ずしも十分に議論されていない製作技法の側面からその分類の根拠を確認しておく（第一節）。つぎに、西周期の土器について、筆者が考え

る編年の枠組みを提示しておく。これによって、筆者が西周式土器と呼ぶものの内容を明らかにするとともに、とくに西周前期の早い段階の型式的設定を行ない、王朝以前と以後の土器がおおよそどの段階で分離されるのかを示す(第二節)。これをうけて、王朝以前すなわち先周時期に遡って、聯襠鬲(本稿でA類鬲と称する)、高領袋足鬲(B類鬲)、殷系鬲(C類鬲)をそれぞれの土器組成の主體的土器とする、関中地方に展開した3系統の土器群を、土器群別に編年的に捉える(第三、四、五節)。この作業を通じてこれらの土器群が、西周以前に異なる系統に属する異なる伝統を形成していたことを明らかにする。そして、各土器群および関連する青銅器の分布的動向から、克殷前後の時期に至る関中地方の文化的動向を探り(第六節)、さらに、そのような動向の中で成立した西周式土器が、設定された西周以前の諸土器群とどのような系譜的關係をもったのかをまとめておきたい(第七節)。

- 1 中国科学院考古研究所『灋西發掘報告』文物出版社、一九六二年。
- 2 徐錫台「早周文化的特点及其渊源的探索」『文物』一九七九年一〇期。
- 3 鄒衡「論先周文化」『夏商周考古學論文集』文物出版社、一九八〇年。
- 4 李峰「先周文化的內涵及其淵源探討」『考古學報』一九九一年三期。
- 5 鄒衡氏註3論文、および、同「再論先周文化」(『周秦漢唐考古與文化國際學術會議論文集』西北大學學報編輯部、一九八八年所収)に代表される。
- 6 張長壽・梁星彭「関中先周青銅文化的類型與周文化的淵源」『考古學報』一九八九年一期などに代表される。
- 7 胡謙盈「試談先周文化及相關問題」(『中國考古學研究二』科學出版社、一九八六年所収)、および李峰氏註4論文など

に代表される。また、2種の鬲が、墓の副葬品と生活址の実用土器の違いによる可能性を指摘した飯島武次「先周文化陶器の研究—劉家遺跡出土陶器の検討—」『考古学雑誌』七四—一も、この立場に近い研究方向を示していると言えよう。

## 一 渭河流域出土の鬲の系統

関中地方に行われた陶鬲の製作技法について詳しい観察所見を残した研究に、宝鷄鬪鷄台遺跡の資料をあつかった蘇秉琦氏のそれがある。<sup>(1)</sup> 現在までにこの蘇氏の研究以外に依るべき十分な研究報告がないのは残念であるが、ここでは筆者の若干の観察所見を交えて、いまだ初歩的な域を出ないが、製作技法の相違から知られる鬲の系統についてまとめしておく。

蘇秉琦氏は、宝鷄鬪鷄台遺跡出土の多系統のしかもさまざまな時期の陶鬲を観察し、考えられるその製作技法から、鬲を4類に分類している。この分類は現在からみても基本的に妥当なものであるが、いくらか捕足的な説明が必要であり、また、4類の名称についても、現在の中国で通行しているそれとの間に混乱が生じることが考えられ、本稿で改めて整理しておく。

蘇秉琦氏の分類名を改称し、氏の提示した分類概念図をつくりなおしたものが図1である。以下に鬲をもつとも特徴づけている中空の三足部分の製作法に着目しつつ、関中地方で出土する鬲を、A、B、C、Dの4類に分類する。

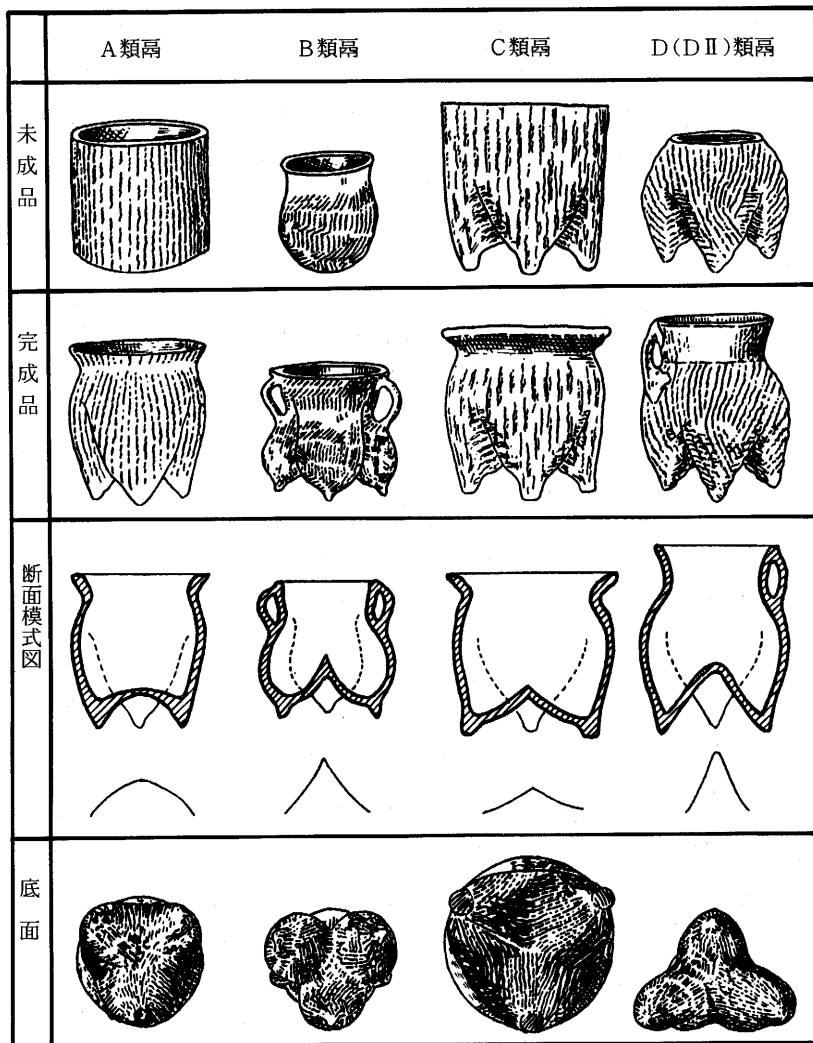
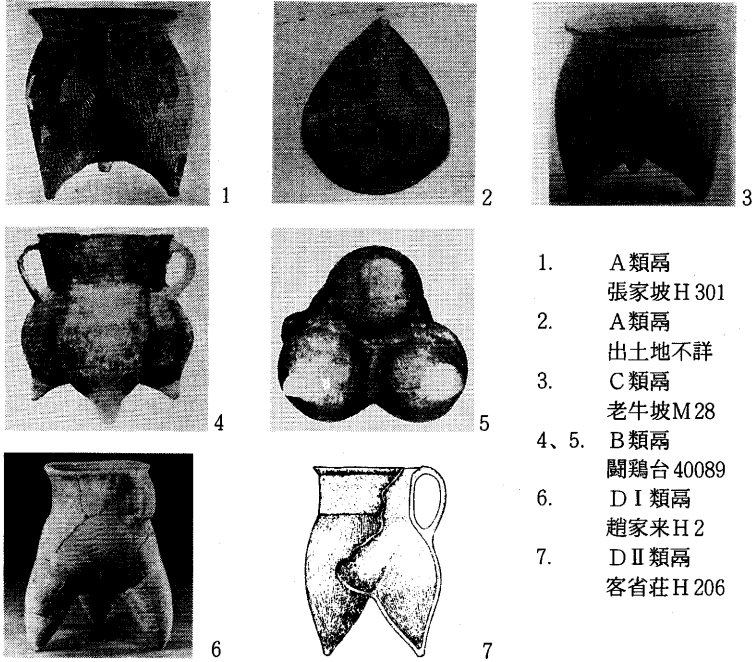


図1 鬲各系統の特徴 (蘇秉琦氏註1③111頁の図を改変)

(1) A類鬲

蘇秉琦氏が折足類と称したもので、今日、中国の研究者の多くが聯襠鬲と呼ぶものである。<sup>②</sup> A類鬲の製作は、まず粘土紐積み上げと、叩きの技法によって、底のない円筒状のものをつくり鬲の原形としたと考えられる。<sup>④</sup> この叩きの過程で縄状の叩き目である縄紋が付せられる。この円筒の乾燥が進まないうちに、円筒の下部を三方向から押しよすようにして、器壁の底部を「人」形に合わせて底を閉じる。こうすると中空三足の原形ができあがる。その襠部（三足の股の部分）をさらに上に押し上げ、かつ三足に適度な太さと丸みをもたせるように整え、三足の合わせ目の余分な粘土を取り去る。そして三足の合わせ目の器の内外から薄く粘土を塗り込み、亀裂の残らないように調整して三足部分を完成させる。このうち（あるいは三足部分の成形の前であるかも知れない）、口頸部の成形にはいる。口頸部は、まず原形の円筒の上部が内傾するように、手指で周囲から圧迫を加えるか、あるいは叩きの技法によって変形を加えてすぼまる肩部をつくり、口縁部は逆に外反するように広げる。このとき一般に口縁部に回転を利用した横なでの調整が加わり、口縁部外面に付せられていた縄紋が擦り消されることが多い。ここで一部の例では三足の先端部にさらに円錐状または円柱状の足尖（脚の先端部分）が加えられ、最後に粘土を塗り重ねた部分や、手による変形を加えた部分を中心に再度縄紋を施して全体が仕上げられたと考えられる。<sup>⑤</sup>

こうして成形されたA類鬲の外見上の特徴は、①器全体の印象として原形の円筒状の特色を残していることが多い（特に早い段階のA類鬲）。②襠部の側視形が弧状を呈する。③胴下部の三足間の器壁が、三足成形時に三方向から押した結果として、内側にくぼんだ状態になっていることが多い（図2-1）。④A類鬲の三足は、円筒からの貼合わせであるため、三足底部の張り合わせ部分に「人」形の稜線状の貼合わせ線が残り（図2-2）、逆に鬲足の内面の



1. A 類高  
張家坡H 301
2. A 類高  
出土地不詳
3. C 類高  
老牛坡M 28
- 4、5. B 類高  
鬪鷄台 40089
6. D I 類高  
趙家來H 2
7. D II 類高  
客省莊H 206

図2 高の各系統

その部分には浅い凹状ないしV字状に通る溝が残る。

単に外見上、弧状の楯部を呈する高は上述以外の技法によつても製作可能と考えられ、現にそうした高も存在する。しかし特に③と、④を仔細に観察することでA類高と他の高とは明解に区別される。

(2) B類高

蘇氏のいう袋足類に相当し、今日よく高領(乳状)袋足高と呼ばれるものである(図2—4・5)。B類高は口頸部と三足部が分割して成形される。三足は、さらに一つ一つが型づくりによつてつくられる。型は、一端が半球状に近い土製の容器状のものを内型として用いたと考えられる。当然、3本の足の形状や大きさは、一般に同一の型でつくったこと



を示すように、きわめて類似した大きさと形状に仕上がっている。<sup>(10)</sup> 縄紋は内型から足の原形を作る段階で叩き目として付せられたと考えられる。成形された3本の空足は、その袋状の原形の口部を互いに圧着させて接合する。その結果、B類鬲の内部から見た三足の接合面は、垂直に立ち上がった形状（隔壁状）に仕上がる、外部からみると三足間の襠は鋭角的に切れ上がる。このように接合された三足の上に、粘土紐積み上げまたは型づくりによって別につくった口頸部をのせ、接合する。ついで口頸部と三足、および三足間の接合部分に亀裂のないよう器面調整をして、三足接合部の外面にはさらに粘土を貼り重ねて強化する。この貼り重ねた粘土の上を、しばしば円棒状の工具で刺突してそこに蜂の巣状の凹点紋を残しながらしつかりと圧着させている。口頸部と三足部の接合部は、これをかくすように沈線を装飾風にくぐらして仕上げられることが多い（特に遅い段階のB類鬲）。口縁部はある種の回転調整が加えられ、B類鬲の最も遅い段階の例では口縁端部外面の縄紋が擦り消されることがある。そして、口縁端面はしばしばある種の工具ですり切ったように水平、平坦に仕上げられる。次に足尖部を袋状三足の先端に、また多くのものは環状の把手や小さな板状突起の把手（鶏冠耳）を口頸部に取り付けて、最後に三足と足尖部の接合部分などに再度縄紋を施して仕上げられている。<sup>(11)</sup>

### (3) C類鬲

蘇氏の分類にいう矮足類がこれに当たる。<sup>(12)</sup> 殷墟出土の大部分の鬲をはじめ殷系の鬲と考えられるものは基本的にこれと同じ製作法の鬲に属するが、渭水流域の殷並行期から、西周期にかけても相当量のこの系統の鬲が存在し、本稿でC類鬲と称するのはこの関中地方に分布する殷系鬲のことである（図2—3）。西周期に下がって、本稿にいう西

周式土器にも含まれるこの系統の鬲（これまで通常西周の分襠鬲と呼ばれた）に関しては、今日まで一般に殷系の系譜を引く鬲とは認識されておらず、本稿でその考え方を提唱するところでもある。

しかしながら、このC類鬲の成形法あるいは殷系鬲一般の製作技法に関して、いまだに正確なことが知られているとは言えない。宝鶏出土の数点の例を手にした蘇氏の観察によれば、この類の鬲は三足部、口頸部ともに器の内面に縄紋などの痕跡はなく、平滑であり、口頸部の内外面に回転による横な調整が見られ、口縁外面の元来の縄紋が擦り消されている。また器のいずれの部分にもA、B類のように器壁を接合したような痕跡が認められない。蘇氏はこのことからこの種の鬲は一つの型（内型）から一度に原形をつくり、外面に縄紋を施したあと、口頸部は回転を利用した手びねりで行ったと推測した。

一方、李済氏に殷墟出土の鬲の成形法についての考察がある<sup>13</sup>。李氏は、殷墟出土の鬲の多くが、一個の「外型」によつて一度に三足部を成形していた可能性を指摘し、このほかに、一部のは丸底の土器から手びねりで鬲形に成形したものや、三足を別々に型おこして成形したとみられる例もあると述べた。筆者は、自身の観察から殷墟出土の鬲あるいはC類鬲の内面に一般には凹凸がなく、手指、当て具の痕跡も顕著でないと見ており、このことから蘇氏の言う表面が平滑な単一の「内型」で一度に成形したという推定が一応有力であると考えている<sup>14</sup>。しかしすべてがこれに当てはまるとは言い切れず、李氏の指摘にも注意すべき問題が残り、殷系の鬲全般にかかわる今後の重要な研究課題である<sup>15</sup>。

C類鬲の器形上の特徴は、その襠部の側視形が底部の中心点を境に左右に鈍角に折れた曲線を描き、三足底面のなす側視線がA類鬲のように「一」状ではなく、両辺が反り返った「八」状を呈することである（図1）。三足のつな

がりは、器の内面から見ると稜線をなして折れるように明確であり、A類鬲がなだらかにつながるのとは区別されるが、一方、B類のように隔壁をなして立ち上がることはない。口縁部は外反し、一部のものはその端部が肥厚して端面が幅のある平坦な帯状を呈したり、L字状に立ち上がる形状をなす。これも殷系鬲に特有のもので、C類鬲に広く見られる特徴である。

#### (4) 客省莊第二期文化の鬲

客省莊第二期文化に見られる鬲には、三足を別々に型づくりしたのち接合するものと、単一の型で三足を一度に型づくりしたと考えられる2種がある。かりに前者をD I類<sup>16</sup>、後者をD II類と呼ぶ(図2-6・7)。客省莊第二期文化の中でもD I類がやや早く現われ、D II類が遅く現われると考えられる<sup>18</sup>。

D I類は、本来三足器としてより古い伝統がある甗の製作法と同じと考えられ、このような鬲を製作したときのものともみられる袋足の内型が出土している<sup>19</sup>。

D II類は、蘇秉琦氏の言う聯襠鬲に相当する<sup>20</sup>。三足部の内面には手指や当て具の圧痕がない比較的平滑なものが多いが、同時に内面に型から転写されて残った反転繩紋、あるいは反転籃紋を見ることが多く<sup>21</sup>(図2-7)、三足部は型づくりで成形されたことがわかる<sup>22</sup>。その場合、三足内面に残る繩紋痕が、三足のつながりの部分でも連続している例が観察されること、そして、蘇氏が述べるようにB類鬲のように三足を接合処理したような痕跡が認められないことから、D II類の三足部は、D I類とは異なり、三足を一つの内型から一度につくったことが考えられる。その内型として、既成の鬲がそのまま転用された場合もあったのではないかと推測される。三足部がつくられると、D II類で

は別づくりの口頸部をのせ、さらに一部のみは環状の把手を片側に取り付けて（単把鬲）成形を終える。

D II類鬲の器形上の特徴は、A、C類に比較して三足がやや深めで瘦せた円錐状を呈し、襠部の側視形は鋭角的に折れた曲線を描くが、三足の接点は、小さく弧状をなして滑らかにつながり、B類鬲のように器内で隔壁状になることはない。

\*

以上に述べた関中地方に見られるA、B、C類鬲ならびに龍山文化期のD類鬲の4系統の鬲は、それぞれが別の伝統をもつ土器群の系統に属していることが以下の各章で示される。A、B、C各類の鬲は、関中地方における客省莊第二期文化以降の土器群の諸系統の変遷と、その相互関係を考える上で、まさに指標的な役割をはたす。

1 ①蘇秉琦『鬲鴉台溝東区墓葬』北平、一九四八年。および同報告に付録として所収された②「瓦鬲的研究」と、後者の基礎となった③「陝西省宝鷄縣鬲鴉台發掘所得瓦鬲的研究」がある。この三篇はのちに①、③が抄録、②が全文掲載の形で、『蘇秉琦考古學論述選集』文物出版社、一九八四年に再録された。以後はこの再録書の頁数を引用する。

2 蘇秉琦氏註②、および③一二四—一二三二頁。

3 鄒衡氏前掲「論先周文化」、三〇〇頁。

4 このような原形の円筒自体が発見されたことはない。蘇氏はこのような円筒が、内型を使った型づくりによってつくられたと想定するが、円筒状の器形そのものは、粘土紐積み上げを基本にする殷、周期の水道管の製作や、のちの瓦の製作に通じるところがある。A類鬲の成形法に関して最近では、中国社会科学院考古研究所豊鎬工作队「一九八四—八五年豊西西周遺址、墓葬發掘報告」『考古』一九八七年一期、二四頁にやはり円筒状の原形からつくるとする認識がある。

5 A類鬲のすばまる口頸部(肩部)の内面にしばしば手指で押したときの圧痕がのこる。例えば註1「陝西省宝鷄縣鬲台発掘所得瓦鬲的研究」、一二七頁、No.20。

6 塗り重ねた粘土が剝落した場合、その地肌に来来の縄紋が現われる。このことから円筒の原形の段階から縄紋が付せられていたと考えられる。註1「陝西省宝鷄縣鬲台発掘所得瓦鬲的研究」、一三〇頁、No.41など。

7 鬲の三側面にくぼみができているところから、中国の研究者はこのA類鬲のことを俗に癩襠鬲とも呼ぶ。

8 華北各地で出土する各時代の鬲のなかには、襠部が弧状を呈する鬲が間々見られ、しばしば聯襠鬲とも呼ばれる。そのなかにはA類鬲とは異なる技法によると考えられるものも多いが、一般に公表された実測図のみからはその製作技法を確認できない場合が多い。本稿に言うA類鬲とは、蘇氏の観察などに基づいてその製作技法の伝統と系統を確認しうる、関中地方に分布するグループをさしている。

9 註1「瓦鬲的研究」、また「陝西省宝鷄縣鬲台発掘所得瓦鬲的研究」、一一六—一二二頁。

10 B類鬲の製作に使われた「型」そのものは発見されていないが、同一個体の三足の形状が相近いことは、型づくり法によつたことを示唆していよう。また鬲足内面は先のA類に比較して一般に平滑で、手指や当て具の圧痕などは見られず、手指の圧痕あるいはなで痕は、三足部と口頸部の接合部の内面などによく見られる。平滑な内面は平滑な型の外面によると考えられ、この点からも三足部の型づくりによる成形が考えられる。ただし筆者は、一九八七年二月と、八八年一月に扶風県の周原博物館の御厚意で、劉家遺跡出土のB類鬲を実見することができたが、このとき、数点の鬲足の内面に、元来は内型の外面についていた縄紋が、反転して付せられた縄紋痕を認めた。後述するように、龍山文化期の鬲にはしばしばこうした反転縄紋のあることが知られているが、B類鬲においても、一部の内型に縄紋が付せられていたことが知られる。

11 把手など付加部分が剝落した場合に、その地肌に再び元来の縄紋が現われる。

- 12 註1「陝西省寶鷄縣關鷄台發掘所得瓦鬲的研究」、一三二—一三三頁。
- 13 李濟『小屯』第三本、殷墟器物・甲篇、陶器（上）、中央研究院歷史語言研究所、一九五六年、一〇七—一〇八頁。
- 14 本稿に言うC類鬲相當の鬲が、一つの内型から一度に成形されるという認識は、註4豊鎬工作隊報告、二七頁にも見られる。
- 15 陝西華鼎南沙村上層（北京大學考古教研室華鼎報告編寫組「華鼎、渭南古代遺址調查與試掘」『考古學報』一九八〇年三期）の土器は、二里岡上層期に屬するものである。出土遺物のなかに、灰坑H10から出土した鬲の内型と稱される棒状の土製品2点がある。これが鬲の内型とすると、ここの殷系鬲は三足が別々に型づくりされたことを意味するが、この2本の内型とされるものは、あまりに細くかつ小型であり、その形状は、同じ灰坑から出土している鬲足をつくる内型としてはとうてい適さない。ただ、これに似た形状のやはり鬲足の内型と稱されているものが、殷墟期相當の河北邢台南大郭村上層でも出土しており注意すべきであろう（唐雲明「邢台南大郭村商代遺址探掘簡報」『文物參考資料』一九五七年三期）。
- 16 中国社会科学院考古研究所『武功發掘報告』文物出版社、一九八八年に言う客省莊第二期文化陶鬲IⅢ式（同書一二二頁）。
- 17 註16報告の客省莊第二期文化陶鬲IV式（同書一二三頁）。
- 18 註16報告一五四頁参照。なお、龍山文化期の鬲全般については別に検討する必要がある。小川誠「竜山文化の性格——鬲・鬲をめぐる考察——」『紀尾井史学』第八号などを参照。
- 19 客省莊第二期文化に屬する遺物のなかに、一本の鬲足状をした内型とされる土製品（前掲『禮西發掘報告』図版三六一—四）が出土している、また山西の丁村曲舌頭溝の龍山文化（陶寺類型）遺跡でも同じような土製品が出土している。實際に鬲の成形に使われたとすると、三足別々につくられたことを証明している。

20 註1「瓦鬲的研究」、一四〇—一四四頁。

- 21 前掲「澧西発掘報告」、五六頁に、客省莊第二期文化の高足内面に反転繩紋や籃紋をもつもの各1点が紹介されている。同様の例が、註16報告、図九八—三の趙家来遺跡出土鬲にも見られる。また近隣の龍山文化の鬲の中にも同様の状況が見られる。例えば中原龍山文化三里橋類型に属する河南招不寨遺跡 (J. G. Andersson, *Prehistoric Sites in Honan*, *BMFEA* 19, 1947, pp. 80-81, K. 5521, K5901, K5971) 山西垣曲龍王崖遺跡 (中国社会科学院考古研究所山西工作队「山西垣曲龍王崖遺址の兩次発掘」『考古』一九八六年二期、一〇一頁) などが知られる。さらに二里頭並行期に下がる山西汾陽出土の土器群のうち、明らかに龍山期以来のDII類の系譜を引く例で、やはり三足の内面に反転繩紋を残す例(晋中考古隊「山西汾陽孝義兩県考古調査和杏花村遺址の発掘」『文物』一九八九年四期、図七一—一三)も知られる。
- 22 前註21 Andersson 報告にみる仰韶村発見のDII類近似の高のなかに、三足部外面の敷力所に、内型の外面に粘土塊を押し当て、パッチワーク状に貼り付けたときのものと考えられる成形痕が認められる。Prehistoric Sites in Honan, p. 31, K. 5971.

## 二 西周前期の土器

文王時に造宮が始まり、西周末年まで続いた周都豊、鎬の所在地とされる澧西、澧東地区の発掘調査を通じて、西周期の周王朝中心地における土器変遷がしだいに明らかにされている。西周の都城豊、鎬で展開した土器群は、王朝成立後にその土器群の器種構成や、器形的、紋様的特徴の継承において、しだいに一つの様式的伝統を確立させるようになる。それを本稿では西周式土器と呼ぶ。

本節では西周王朝以前の土器を把握する基本的前提として、この早期の西周式土器ないしその成立過程でもある西周前期相当の土器の内容を、これまでに提出されている西周文化の編年研究を再整理することで検討しておきたい。

(1) 西周期の土器編年の枠組み

西周期の土器を中心にした編年案として重要なものに、一九五五～五七年の長安県澧西地区張家坡、客省莊の発掘成果をまとめた『澧西』<sup>①</sup>と、一九六七年の張家坡の発掘成果をまとめた報告「67張」<sup>②</sup>がある。前者は生活址の発掘成果を含むが、両報告とも調査の主たる対象は墓であり、副葬土器についての編年の枠組みを示している。

『澧西』は西周前期から後期に至る墓を五期に分け、これに生活址の早期と晩期を加えている。生活址早期の包含層は、墓域と重なるが、住居址、灰坑などの遺構や遺物包含層が、墓を切ったり、墓の上面を覆蓋したりという層位的現象は一切見られず、逆に『澧西』第一期墓の一部が生活址早期の一部を切る現象が確認されている。<sup>③</sup>この層位状況から、『澧西』生活址早期の年代は、『澧西』第一期墓並行の時期ないしそれ以前に遡ると推定され、その中には克殷直前の時期をも含むと考えられた。

一方、『澧西』の墓の編年において、第一期墓と第二期墓の先後関係は、土器の型式的先後関係として説明されるが、同時に両期に伴出した青銅器の年代観によってもその土器の先後関係が補足されている。すなわち『澧西』第一期墓にともなう青銅器には、報告者が指摘するように一般に成王期、康王期の作器と考えられてきた青銅器に類似するものが含まれ、他方、『澧西』第二期墓の土器は、長安普度村長由墓<sup>④</sup>や、普度村2号墓<sup>⑤</sup>の土器に近いが、その長由墓に共伴した青銅器は、銘文内容からも穆王期頃のもの考えられている。



『澧西』では、各時期の年代的枠組みとして王名を用いて、第一期墓と同時ないし先行する『澧西』生活址早期は、上限が克殷前の文王による豊邑造宮の時点に遡り、下限は成王、康王期より下がることはない<sup>6</sup>と推測し、第一期墓は成王、康王期の前後、第二期墓は穆王期の前後と考えている。この第二期墓とそれ以降を西周中期とし、それ以前を西周前期（早期）とする枠組みは今日一般的であり、本稿もこれに従う。

「67張」は、西周墓を6期に分ける。層位的な証拠は示されていない。その第一期墓（M89のみ）は、『澧西』にはなかった異種の陶鬲（本稿のB類鬲）を副葬した例で、報文はこれを『澧西』生活址早期の時期に並行すると推定する。これに続く第二期、第三期墓は、それぞれ『澧西』の第一期、第二期墓に相当すると報告した<sup>7</sup>。「67張」第一期墓は、その年代が、豊鎬遺跡の最早期に当たるとはB類鬲が『澧西』生活址早期にのみともなうことから容易に推測されるが、そもそもB類鬲は「67張」第二期以降の典型的な西周式土器の主體的鬲とは直接つながらない別の系統の土器に属し、したがって、豊鎬遺跡で成立する西周式土器の流れの起点としての評価はできない。

「67張」第二、第三期のうち、土器、青銅器を比較して、第三期が『澧西』の第二期に相当することは問題ない。しかし「67張」第二期の土器には、『澧西』の第一期墓に並行する段階に加えて、それより早い『澧西』生活址早期に遡るとみられる段階も一部含まれる。また青銅器においても、「67張」二期には、『澧西』第一期には見られなかった、觚、爵などの酒器を主体とする殷墟IVの殷系青銅器のそれに直接結び付く一群が含まれ、その年代は西周初葉ないし克殷前後に遡ることが考えられるのである。

『澧西』と「67張」の比較から筆者は、『澧西』の第一期墓として報告されていた墓の多くは、実は西周前期のうち比較的遅い段階に該当しており、これに対し、同じく西周前期として捉えられながら、「67張」第二期墓の様相は、

「澧西」第一期相当の内容を含むと同時に、より早い、西周初葉期の前後に遡る内容をも含むと考える。このことは、西周前期に当たる「67張」第二期が、前後2段階に分離できることを示唆する。

豊鎬遺跡の土器を中心にした編年的研究とは別に、近年の発掘資料を軸とした、青銅器に対する型式学的研究が進められている。殷、周時代の青銅器の型式変遷の全体像を体系的に示した林巳奈夫氏の研究<sup>5)</sup>では、西周時代の青銅器を、前、中、後（I、II、III）の3期に分け、各期はまた可能な場合に、前後2段階（A、B）に細分し、一器一器の器影とともにその時期別を明らかにしている（以下「林編年」と呼ぶ）。これと対照すると、「67張」第二期の土器に共伴した青銅器は、ほぼ林編年のIA、IBを併せた範囲、すなわち西周前期の全期間を含み、一方、「澧西」第一期の土器にともなう青銅器は、おおよそ前期後半のIBの範囲におさまり、これより早いものは含まれない。つまり青銅器に関する林編年を参照することからも、「67張」第二期の土器は、前後2期に細分できる可能性があると言える。

一方、一九八〇年に「67張」が公表されて以降、豊鎬遺跡の比較的小規模な調査報告が毎年のように公表されており、この中で西周前期墓の発掘例の増加が目立つ。李峰氏による西周青銅器編年の試みは、それら張家坡の新出資料を多く含み、かつ共伴した土器についても指摘を含むもので、西周前期の土器の編年を考える上で参照すべき点が多い<sup>6)</sup>。李編年は青銅器の器種別の形態的変遷と墓における器種の組合せの変化を根拠に、西周墓を全6期に分ける。その第四期が穆王期頃と考えられる長由墓を含む前後の時期で、これに先行する第一〜三期がほぼ「67張」第二期に相当し、また林氏のIA、IBを併せた時期に相当する。李氏の編年で特に注目されるのは、最近澧西でその例が増加している、殷墟IVに近い般的な青銅器の形態的特徴と組合せをもつ一群、特に觚、爵を伴出した墓を捉えて、これ

を李編年の西周第一期に加えている点である。このような青銅器を、豊鎬遺跡における最早の段階に位置づける考えを本稿でも採用する。

一方、李氏の第三期は、その年代が昭王期前後とされ、西周前期の最も遅い段階を捉えたものと認識されている。第三期とされる青銅器のなかには、年代観に異論のあるものも若干含まれ、必ずしも確立された一時期とはいいい難いように思うが、しかし西周前期から中期への移行を示す時期についての李氏の認識は有効である。

最近の青銅器編年案として、以上のほか盧連成、胡智生両氏による研究がある<sup>1)</sup>。盧・胡編年の方法は、基本的に李編年と同じで、青銅器の形態変遷と器種の組合せを軸に、青銅器を伴出した墓一三六基を単位として、5期に区分し、その一期を克殷前の先周時期に、二期を克殷後から昭王晚期まで、三期をほぼ穆王期（一部共王期）とする。すなわちその二期が一般にいう西周前期に相当する。盧・胡編年では、この二期を、さらに早、中、晩の3段階に細分する。

盧・胡両氏の編年において、西周前期を3段階に分ける点では李氏の編年と同じであるが、李編年の西周前期第一期墓の例のうち、67張54号墓、77客1号墓、56丁家溝墓、61張106号墓、63馬王村1号墓などが、盧・胡編年では克殷前（先周時期）の一期墓に入れられていることは、両者の相違点である。盧・胡編年は、李編年の西周一期や林編年のIAの中から、さらにその最早段階の一群の青銅器を抽出する手がかりを求めた研究として注目される。ただし、現在の資料では、そのような豊鎬の最早段階の比較的短い時間幅の青銅器を、「克殷前」に年代を限定する根拠は必ずしも明確とは言えない。

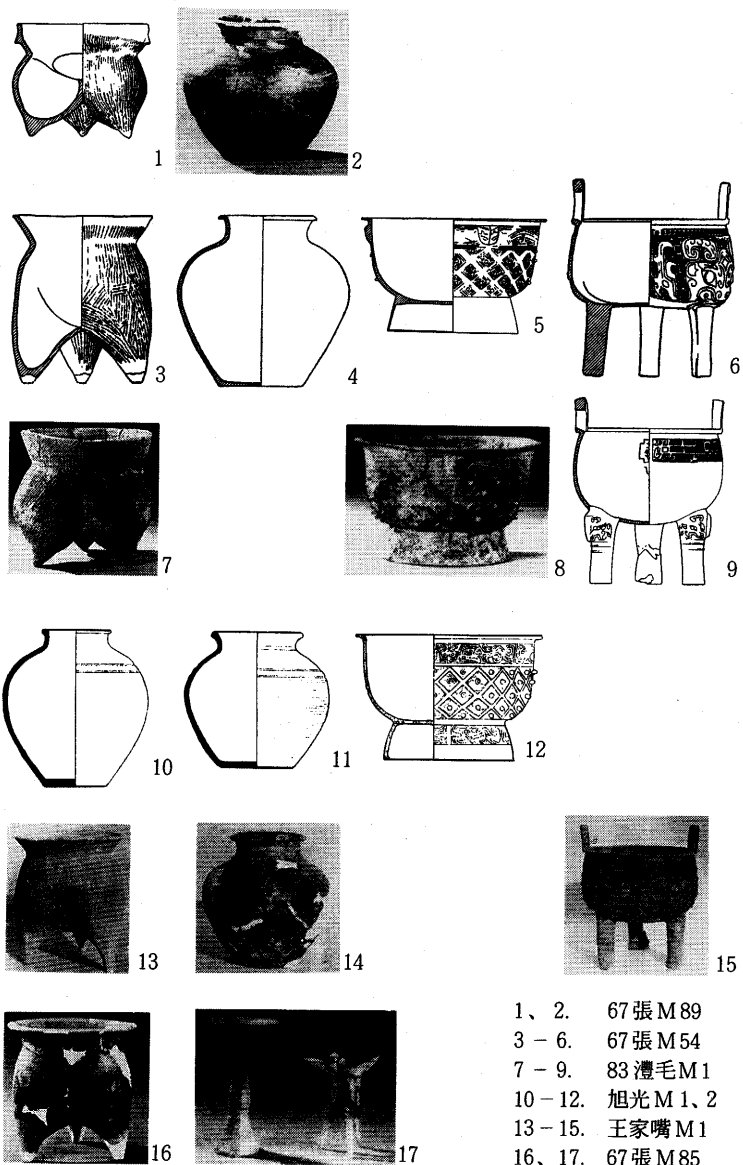
克殷前後の関中地方の青銅器は、形態的特徴においても、器種の構成においてもきわめて不安定で、のちの西周式青銅器と呼びうる安定した組成が未確立であったと考えられる。このような段階の青銅器を、克殷前、後というよう

に政治史的な側面から分離することは本来難しいことであり、むしろのちに西周式青銅器が成立する過渡的段階としての、克殷の前後にまたがる文化的な一段階を設定することが、現有の資料を整合的に編年する方法であると考えられる。

豊鎬遺跡の最早段階、ないし西周王朝成立前後の段階は、本稿が行なう作業において基本的な認識になるものであり、以下にこの段階についていまい少し詳しく検討しておく。

関中地方の青銅器の中に、同地域に独自の形態を示しながら、その紋様、器形上の特徴の一部に殷墟IV相当の要素を有し、従ってその年代は殷墟IV並行ないしその後と推定される在地的な一連の青銅器がある。武者章氏のいう斜方格乳釘夔龍紋殷（以下、方格乳釘紋簋）やこれにしばしば共伴する斜方格夔龍紋鼎（以下、方格乳釘紋鼎）などはこの例である<sup>12)</sup>。一方、在地的要素が希薄でむしろ殷墟IVのそれにきわめて近い形態を示す觚、爵など、直接の殷系の青銅器が存在している<sup>13)</sup>。

在地的な青銅器の場合、直接殷墟の青銅器との年代的な比較はできず、若干の要素の類似から殷墟IVに近いことを知りうるにとどまる。このような一群の青銅器は、殷墟IVに並行するのかそれよりやや遅れるものなのかは一般には断言できない。一方、觚、爵に代表される殷墟IVの青銅器に直接的な類似を示す殷系青銅器の一群については、克殷直後に殷中心地域から移入された要素（おそらく技術者集団とともに）と理解して、克殷直後に年代をおくことも一つの考えであり、事実そのような動向のあったことは疑いないが、それとは別に、すでに克殷以前から移入されていた部分があることも否定できない。なぜならば、文王による豊邑造宮以前から、豊鎬地区の近隣にはその文王が討伐したと文献に見える崇など殷とかかわりが深い集団が存在しており、その崇との関係も推測されている西安東郊の在



- 1、2. 67張 M89
- 3-6. 67張 M54
- 7-9. 83禮毛 M1
- 10-12. 旭光 M1、2
- 13-15. 王家嘴 M1
- 16、17. 67張 M85

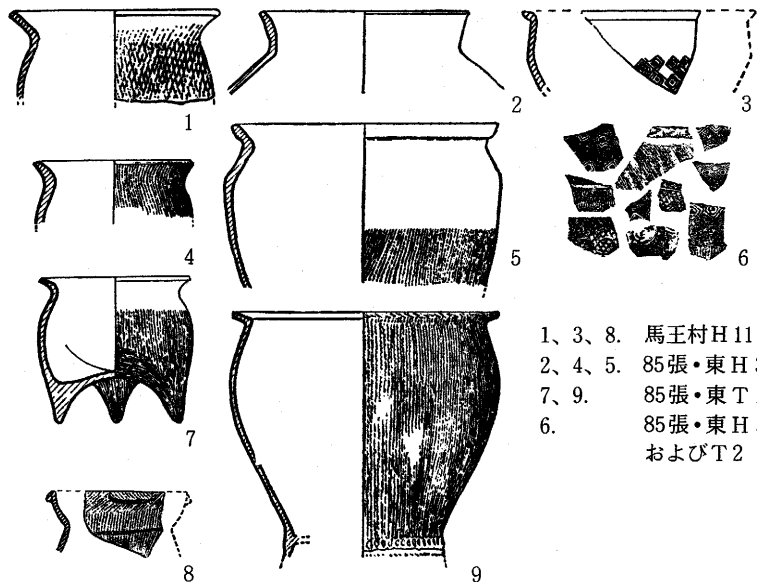
図3 西周Iaの墓出土の土器、青銅器

地の殷系土器（後述の土器群C）を主体とする老牛坡遺跡（特に袁家崖墓<sup>14</sup>）では、殷墟IV前半相当の殷文化中心地域に直結する青銅器（觚、爵）や土器も出土している。克殷以前の豊邑造営前後に遡って、周が、そうした殷に直結する青銅器を、老牛坡遺跡などに代表される関中地方東部に展開した殷系文化を継承する集団から移入したことは十分に考えうることなのである。

以上のように殷末葉、西周初葉の時期に、器形、紋様において、あるいは器種の組合せにおいて、関中地方の青銅器には在来的な系統と、克殷直前と克殷直後の二段階で移入された殷に直結する青銅器の系統が混在する状況があったと考えられる。やがて西周前期も後半になると西周式青銅器と呼びうる固定化した組成をもつ青銅器群が現われてくるが、それに先行する西周式青銅器の成立過程の一段階として、殷墟IVに一部並行し西周前期の前半に至る時期、すなわち克殷の前後にまたがるある時間幅を一時期にまとめるのが本稿の考えである。

先述したように「67張」二期は、「澧西」一期に並行する後半部分と、それに先行する前半部分に分けられる。本稿は、「67張」二期前半と「67張」一期（M89のみ）をまとめて西周Iとし、「67張」二期の後半を西周IIとする。西周Iはまた、「67張」一期の内容を軸にまとめられる早い段階と、それに続く遅い段階とに細分でき、それぞれ西周Ia、Ibとする。以下に豊鎬遺跡の最早段階であり、先周時期の終わりであるとともに西周期の始まりでもある西周Iaの設定について述べる。

「67張」一期の墓、①67張M89（図3-1-2）は、B類鬲を伴出するが、これは豊鎬遺跡では少数が知られる土器である。他では「澧西」生活址早期で若干見られる事実から考えても豊鎬遺跡最早段階の墓と考えられる。しかし、B類鬲の存在は、他のA類鬲をともなうすべての墓に先行する根拠にはならない。むしろ注意すべきは、共伴した肩



- 1、3、8. 馬王村 H 11  
 2、4、5. 85張・東 H 3  
 7、9. 85張・東 T 2  
 6. 85張・東 H 3  
 および T 2

図4 西周 Ia 生活址の土器 (1-9は1/9)

部に2条の沈線をめぐらせた黒色磨研の円肩罐である。類似する円肩罐は、②67張 M 54 (図3-3~6)にも出土する<sup>(15)</sup>。この M 54には先述の方格乳釘紋篋が共伴する。同形式の青銅篋は豊鎬遺跡では、③83澧毛 M 1 (図3-7~9)からも出土しているが、同墓からはまた B 類高が出土している。円肩罐—B 類高—方格乳釘紋篋の相關係からみて、以上①から③の3墓は年代的に近いと考えられる。豊鎬遺跡以外の例で見ると、④宝鶏下馬宮旭光 M 1で、方格乳釘紋篋、平行沈線をもつ円肩罐 (灰陶)、B 類高が同墓共伴した例があり、隣接する M 2でも沈線をもつ円肩罐 (灰陶) がともなう (図3-10~12)。さらに、⑤岐山王家嘴 M 1 (図3-13~15)では、方格乳釘紋鼎、黒色磨研円肩罐、A 類高が出土している<sup>(16)</sup>。方格乳釘紋鼎と方格乳釘紋篋は紋様の一致からも同時期のものであり、伴出した A 類高は、先の②67張 M 54の A 類高に近い特徴をもつことが認められる。一方、青銅器として殷墟 IV に近い觚、爵の組合せをもつ例とし

表1 西周前期(豊鎬地区)編年のおおよその対応関係

	「澧西」	「67張」	林	李	盧・胡	西江
西周前期	生活址早期	一期	IA	一期	二期早	Ia
				二期	二期	二期中
	一期	二期	IB	二期	二期中	Ia
				三期	二期晚	Ib
中期	二期	三期	IIA	四期	三期	III

豊邑  
造宮

克殷

穆王期

て、⑥67張M85<sup>19</sup>(図3-16・17)をあげるならば、同墓では②、⑤墓出土例に近い特徴をもつA類鬲が出土しており、年代も並行すると判断される。

以上のことから、①から⑥の各墓が年代的に近いことが確かめられる。これらが標準的な西周Iaの墓の例である。また生活址(図4)でいうと、西周Iaの墓のA類鬲と共通した特徴をもつ鬲は、⑦85張・東H3、⑧85張・東T2、⑨長安馬王村H11<sup>22</sup>などに含まれる。同時に、⑦、⑨ではB類鬲片が出土していて、この状況は①、③墓に時期的に近いことの傍証となる。これらの生活址もほぼ西周Iaの範囲に入る標準的な単位と考えられる。

西周Iaの生活址は、「澧西」生活址早期の最早段階に該当するものであり、「澧西」の認識にしたがえば、文王の豊邑造宮時に遡ること



にならう。また西周 I a の墓は、前記したように「67張」の一期に近いものとして設定したが、その年代は「67張」にしたがえばやはり克殷直前に遡ると考えられる。共伴した青銅器は、殷墟 IV に関連する特徴、ないし直結する特徴をもち、全体として形態差の小さい一群の青銅器である。克殷前後にまたがる比較的短い期間の青銅器と考えられる。

土器を中心にした「澧西」、「67張」の編年を併せて整理しなおし、これに右に述べた克殷前後の時期の認識を加え、さらに青銅器を中心にした林編年、李編年、盧・胡編年の分期の枠組みを対照しながら、西周前期を筆者なりに細分した結果が表 1 と、表 2、表 3 である。その枠組みをまとめると、

① 長安普度村長由墓が標準となる一時期（およそ穆王期と考えられる）を捉え、その時期を西周中期の始まりとし、それ以前を西周前期と考える。西周前期を I、II 期に分け、中期の長由墓の時期を III 期とする。

② 西周 I は「67張」の一期十二期の前半、西周 II は「67張」二期の後半（「澧西」一期）にあたる。作業仮説的ではあるが、西周 I をさらに I a、I b に、西周 II は II a、II b に細分する。西周 I a については先述した認識による。各期の区分は、土器の器種構成、器形、紋様の変化で分離されなければならないが、それはのちに簡述する。

③ I、II 期の区分は、青銅器の編年で言えば、ほぼ林編年の I A、I B に対応する。同時に I 期は、李編年の一期十二期の一部、II 期は李氏の二期の一部十三期に対応。また I 期は盧・胡編年の一期の一部十二期の早段十中段の一部、II 期は盧・胡氏の二期中段の一部十晩段にほぼ対応する（表 1 参照）。

④ I 期の年代は克殷の前後にまたがるもので、「澧西」以来の方法で、かりに王名をもつて年代の目安とすれば文王末期、武王期、成王期を含む。II 期は、康王、昭王期前後、III 期が穆王期前後と考えられよう。特に、I 期のうち

表 2 豊鎬遺跡における墓単位の分期(学=『考古学報』考=『考古』文=『文物』澧西=澧西発掘報告 考與文=『考古與文物』文寶=『文物資料叢刊』, 以下の表も同様)

時期	遺構	土				器			青銅					器		季	虚	出典			
		A類隔	C類隔	簋A	簋B	卣肩斝	折肩斝	その他	觚	爵	斝	鼎	簋	その他	尊				卣		
西周 Ia	67張54	1				1					1	1	1	1	1	1	1	I	I	学80-4	
	67張85	1				1					1	1	1	1	1	1	1	I	I	学80-4	
	67張87										2	1	1	1	1	1	1	I	II早	学80-4	
	67張91		1								1	1	1	1	1	1	1	I	II中	学80-4	
	84禮15	1									1	1	1	1	1	1	1	I	II早	考87-1	
	84禮18	1									3	2						I	I	考87-1	
	77咨1	1																I	I	考81-1	
	79張2	2																I	I	考86-3	
	61張106																		I	I	考84-9
	63馬王村																		I	I	考84-9
83禮毛3		1																I	I	考84-9	
83禮毛1																		I	I	考84-9	
67張89																		I	I	学80-4	
56纒果丁家溝																		I	I	学56-11	
71涇陽高家溝																		II早	文72-7		
西周 Ib	67張2		2															I	II晚	学80-4	
	67張28	1																I	II晚	学80-4	
西周 I	67張82																	I	II晚	学80-4	
	67張16	1	1															I	II晚	学80-4	
	84禮3	1	1															I	II晚	考87-1	
	84禮12	1	1															I	II晚	考87-1	
84禮37		1															I	II晚	考87-1		





57 客 69	2		1	1	1	1	豆											西 禮西
57 客 132	1			1			豆											西 禮西
57 客 139	1,1(仿)		1			2	瓶 仿銅器 4											西 禮西
57 客 147			1		1													西 禮西
57 張 222	2																	西 禮西
57 張 448		1	1	1		1												西 禮西
61 張 403	1		1	1		1	壺											西 禮西
55 張 2					2	2	豆											西 禮西
84 普 3	1					4												西 禮西
84 普 4	2		1	2		3												西 禮西
84 普 9			2			2	豆, 瓶, 盤											西 禮西
84 普 14	1					2												西 禮西
84 普 17	2(仿)				2	4	豆											西 禮西
84 普 20	1(仿)		2			2	豆											西 禮西
84 普 35	2(仿)				1	3	豆											西 禮西
84 普 38	2(仿)				1	2	豆											西 禮西
84 普 39	2(仿)		2			1	豆											西 禮西
84 普 40	2,1(仿)																	西 禮西

西周式土器成立の背景 (上)



Ia期は、文王の豊邑造宮前後から成王期前半頃に考えられ、克殷前の殷墟IV後半に並行する時期を含むと考えられている。

## (2) 西周前期の土器の組成

豊鎬遺跡における西周I期からII期の標準的な墓出土の土器を、主な器種別に配したのが図5である。各期の標準的一括遺物を含む墓、灰坑などの単位を表2、表3にまとめた。表中には参考に豊鎬遺跡以外の一部の遺跡についても併記した。

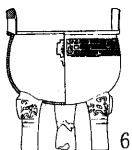
西周I期 副葬土器の器種の組合せは、〈鬲〉〈甬・罐〉〈甬・罐・簋〉の3種が主となり、これに有耳壺、尊、盆などが加わることがある。殷墟出土の副葬土器に一般的な仿銅土器の一種である陶觚、陶爵はまったく見られず、また豆を欠いている。殷と周の土器の組成が本来的に異なることはこの点にきわめてはつきりと表われている。

鬲には西周以前から続くA類鬲、B類鬲、C類鬲の3系統が見られる。このうち、B類鬲はごくわずかである。A類鬲は、西周全期間を通じて鬲の主体となる。A類鬲の中にも多様な形態が並行し、諸形式に分離できるが、本稿では行わない。I期のA類鬲に共通した特徴は、①口縁外面の擦り消しが十分でなく、しばしば縄紋が残される場合がある。②のちの鬲のように肩部が強く屈曲する器形は少なく、全体は円筒状に近いが、少なくとも肩の印象を与える。③襠が比較的高いものが多い。④一般に、器幅に対し、器高がまさる細高傾向の器形が多い。⑤肩部に緒状の突起をつけた仿銅陶鬲の類は現われていない。

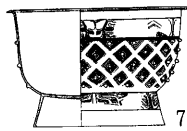
西周期のC類鬲は、従来一般に分襠鬲と称されて、A類鬲と並んで西周前期に多く見られる鬲であることが「禮



5



6



7

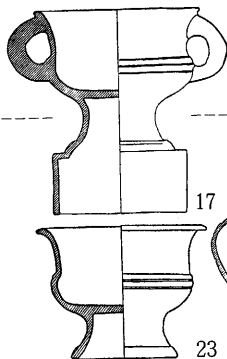


11



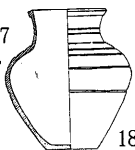
12

簋 A



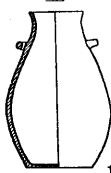
17

罍形器

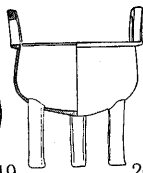


18

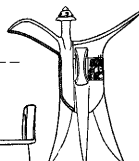
壺



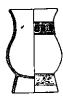
19



20



21



22

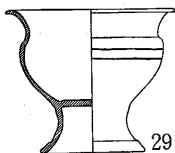
甗



30



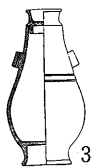
31



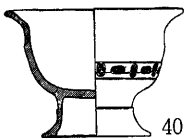
29



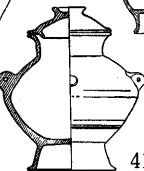
37



38



40



41

- 29. 67張 M72
- 30. 67張 M50
- 32、36、37. 79張 M 4
- 33、35. 67張 M71
- 34、38. 60張 M101
- 39. 79張 M 3
- 40. 67張 M 1
- 41. 67張 M17

遺跡)〔6は1/20, 写真図版は不詳, その他1/10〕

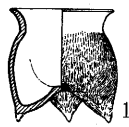


C類鬲

A類鬲

折肩罐

円肩罐



I a

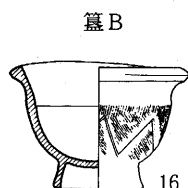
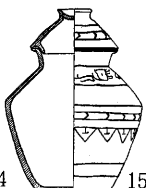
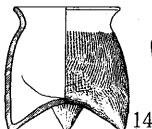
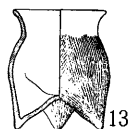
8

9

3

4

10



鬲B

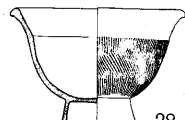
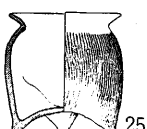
13

14

15

16

I b



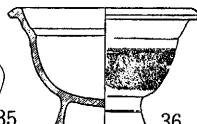
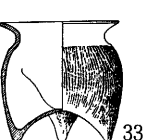
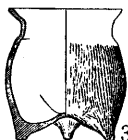
24

25

26

27

28



32

33

34

35

36

1, 3. 83 澧毛M 3

2, 4. 79 張M 2

5, 8. 67 張M 87

6, 7. 83 澧毛M 1

9, 11, 12. 67 張M 85

10. 67 張M 89

13, 14, 21, 22. 67 張M 16

15, 17, 18, 20. 67 張M 82

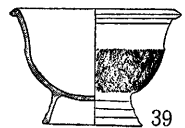
16. 84 澧M 3

19. 84 澧M 37

23. 67 張M 2

24, 27, 31. 57 張M 178

25, 26, 28. 67 張M 33



39

II

図5 西周前期の土器(豊鎬)

西」以来知られている。その系譜を、西周以前の関中地方の殷系土器群（後述する土器群C）のC類鬲の系譜に求めるのが筆者の考えである。かつて関中地方に殷系土器群の遺跡がほとんど知られていなかった時期に、鄒衡氏<sup>24</sup>や盧連成氏<sup>25</sup>は西周の分檔鬲を先周時期の高領袋足鬲（本稿のB類鬲）から変化した鬲と考えたこともある。しかし、西周IにおいてB類鬲とC類鬲が分離して並行することからも両者を一つの系統で捉えることには問題があり。そもそも両者の製作技法は大きく異なっている。西周のいわゆる分檔鬲は製作技法の基本から、本稿のC類鬲すなわち殷系の鬲の範疇に含まれると考えられる。

ところで西周期のC類鬲には、西周I、IIに多く見られ、III期に激減する円錐状の足尖と細高の器形に特徴のあるタイプと、西周III前後から資料が増加し、器幅と器高が1対1に近づいた器形で、円柱状の足尖をもつタイプがある。前者を西周C類鬲のI形式、後者をII形式と分類する（図5中のC類鬲はすべてI形式）。

罐は器形から折肩罐、円肩罐などに大別されるが、多くの小形式を含む。I期のうち、特にIa期に特徴的に現われるものに、肩部の位置が高く、2本の平行沈線を持ち、黒色磨研のものが多く先述したタイプが含まれる。これは共伴した青銅器の例から判断してもこのIa期相当の比較的短期間行われたもので、時期の指標となる重要な土器である。

簋は、西周の全期間を通じて簋A、簋Bの2類に大別される。これらの簋は第七節に述べるように、もともと殷系の土器と考えられ、殷墟IVの中に類似した器形を多く指摘できる。簋Aは殷墟においてそうであるように、本来仿銅陶器としての性格が強く、そのことは豊鎬遺跡で出土する把手と方形台座をつけた例（図5-17）によく示されている。このような台座付の簋は、西周初葉に盛行した青銅簋の形態を模倣したものと考えられる。

I期には生活址の土器が知られる。『濶西』の生活址早期はほぼ本稿のI a、I b期にまたがる年代が考えられるが、これに近い組成を示すいくつかの灰坑などの出土土器をまとめて、西周I期相当の生活址の土器の様相が知られる。馬王村H 11は、西周前期相当の銅簋の陶范を出土した灰坑H 10に切られており、西周I a墓に近い土器をとまなう点からも、西周I aに位置づけられる単位である。<sup>(26)</sup>同坑出土の鬲には、少数のB類鬲が含まれる。A類鬲は、口縁外面に縄紋を残し、盆の外面に重菱紋、方格乳釘紋、簋Bの外面に殷墟IVの簋に典型的に見られる3条の沈線による三角劃紋が見られる。85張家坡・東H 2下層は、副葬土器と対照して西周I b頃の一括土器と考えられる。生活址出土の土器の器種は、鬲、罐の多い点では副葬土器と同じであるが、仿銅土器、黒色磨研円肩罐を欠き、簋が少ない。一方、少量ながら豆が見られ、盆、甗が広く見られる。豆と盆は西周II以降にしないで墓の中にも持ち込まれるようになる。

盆などに、方格乳釘紋、重菱紋などの印紋が多く見られる点(二三頁、図4参照)は、I期特にI a期の重要な指標でもある。II期以降はこうした印紋は急に減少する。

A類鬲を主体とする生活址出土の鬲には、副葬土器と一致する比較的小型のもののほか、かなり大型の鬲が含まれる。この種の大型の鬲は西周の各期を通じて墓の鬲とは別の系譜をもつことが考えられるが、関連資料が少ない。

なお西周前期を通じて、生活址の土器にC類鬲は基本的に見られない。

西周II期 墓では〈鬲・罐・簋〉の3点のセット的性格がさらに強まる。II bの段階からは、のちIII期以降に盛行する豆や、高い圈足付の甗が出現してくる。鬲ではI期に少数見られたB類鬲はまったく姿を消し、A類鬲は多形式を含むが、一般にI期の細高傾向の器形から、しだいに器幅、器高比が1対1に近づき、楯のやや低い器形に変化する。

る。またこうしたA類鬲の中に、II b期には器側に鑿状の突起を付けた仿銅土器の鬲も少数現われてくる。これはIII期以降に盛行する。

簋Aは、いくつかの小形式に別れるが、一般に口縁が大きく外反し、高く裾広がり圏足をもつ。II b期になると、S字形の連続スタンプ紋をもつIII期以降に常見される特色も現われてくる。簋Bでは、I期のような殷墟出土のそれに通じる三角劃紋をもつ例が希になり、口縁部が折稜を呈して大きく開いた形態が一般的になる。

罐は、Iaに特徴的だった黒色磨研のものではなくなり、器形的にはそれを継承している円肩罐が存在するが、すべて一般の灰陶に変わる。

折肩罐、円肩罐ともI期に比べて最大幅の位置がしだいに低くなる傾向があり、これは先周時期↓西周I↓西周II↓西周IIIに継承される一般的傾向とみなされる。

II期の生活址出土の土器は、今のところ漕東H4など少数の一括遺物があげられるのみである。

西周III期 長由墓出土遺物を軸とする比較的捉えやすい一時期であり、ここから西周中期に入る。副葬土器は、やはり〈鬲・罐・簋〉のセットを基本とするが、これに豆を加える場合が多くなる。また一部の副葬品の豊富な墓では、有蓋甕、圏足付の甗などを複数個副葬することが目立っている。また、鼎、盤、壺などの仿銅土器が見られ、鬲では鑿状の突起をもつ仿銅陶鬲が非常に多くなる。

鬲は西周I、II以来のC類鬲の西周I形式がこの時期に入って激減する。かわって、同じC類鬲のうち、西周前期にほとんど見られない円柱状の足尖をもつ西周C類鬲II形式が、III期前後から増加する。他はすべてA類鬲に限られる。

生活址の土器では、I、II期に少なかつた豆が増加し、印紋が著しく減少する。また篋Aや仿銅陶鬲などが生活址にもともなう。さらに盆は西周中期以降、胴部が屈曲した器形で、西周前期のように縄紋を施さない形態が一般化する。このような盆はIII期頃から一部の墓にもともなうようになる。C類鬲の円柱状足尖をもつII形式は生活址でも出土する。

I期からIII期にかけての器種の構成についてまとめると、①I、II期で墓の主な鬲は、A類鬲とC類鬲の2系統であるが、生活址ではC類鬲は基本的に出土しない。C類鬲の円柱状足尖をもつ西周II形式がIII期前後から墓、生活址で増加する。②墓、生活址とも、B類鬲はI期に少数見られるが、II期以降、西周の土器から消えている。B類鬲は「西周式土器」を構成する土器とはならないと考えてよい。③篋は、A、Bとも墓ではIaでは少数にとどまるか、または存在しない可能性があり、Ibから確実に現われ、II、III期できわめて普遍的になる。生活址でもほぼ同様の変化がある。④生活址では豆がI期から存在するが、墓ではIIb期頃からようやく現われ、III期に増加する。

以上から、墓では、A類鬲、C類鬲、篋A、篋B、円肩罐、折肩罐という器種の構成がIb以降に定着しはじめ、IIからIII期へとさらに固定化する。これに次ぐ位置を占める壺、尊、甌などもやはりIbに出現してしだいに一般化する。仿銅陶鬲と豆はIIb以降に現われる。一方、Iaに少数存在したB類鬲は遅くともII期以降、少なくとも豊鎬遺跡では姿を消す。生活址の土器も、ほぼ西周IIから、固定化した様相が現われ、墓の土器とおなじような段階を踏んでいる。

このように西周期の土器の組成は、ほぼ西周Ia、Ibの間で、いくつかの器種が出現し、また消えていくなかで、Ib期にほぼまとまり、つづく西周II頃から定着した様相が見られるようになる。これが「西周式土器」の成立した

段階である。西周Ⅰ期、特にⅠa期は、先周時期から西周期への過渡的段階であり、西周式土器の未成立の段階と考えることができる。

なお、青銅器について付言すれば、Ⅰa期は先述のように、関中地方在来の流れと、殷文化中心地域に直結する流れが並行する。後者を代表する青銅器は、觚、爵、罍の酒器のセットであるが、遅くともⅡ以降になると、このうちの觚が基本的に欠落し、爵、罍、簋を中心に、卣、尊などを加えた器種の構成が固定的になる。形態的にも、鼎を例にとれば、Ⅰa期では方格乳釘紋鼎と鬲鼎が形式的に定着している他は、在来的な形態や、新たに移入された殷に直結する形態が混在して型的組列が見いだせない。しかし、Ⅱ以降は鼎の形式は定着した少数に限定され、以降の西周期を通じて変化していく諸形式が現われてくる。西周式青銅器とかりに呼ぶものがあるとするれば、それは西周Ⅰaという未成立の段階を経て、西周Ⅱにはつきりと見えてくるものと言えよう。

以上に確認した西周前期の西周式土器の組成をめぐって、それと先行する先周時期の土器群の諸系統との関係について、第七節で論ずる。

- 1 前掲『澧西発掘報告』。
- 2 中国社会科学院考古研究所澧西発掘隊「一九六七年長安張家坡西周墓葬的発掘」『考古学報』一九八〇年四期。
- 3 註1『澧西』、七三頁。
- 4 陝西省文物管理委員会「長安普度村西周墓的発掘」『考古学報』一九五七年一期。
- 5 石興邦「長安普度村西周墓葬発掘記」『考古学報』第8冊。

6 註1「澧西」、七四頁。

7 註2報告、四八七頁。

8 林巳奈夫「殷周時代青銅器の研究―殷周青銅器綜覽一」吉川弘文館、一九八四年、同「殷周時代青銅器紋様の研究―殷周青銅器綜覽二」吉川弘文館、一九八六年。

9 李峰「黃河流域西周墓葬出土青銅禮器的分期與年代」『考古學報』一九八八年四期。

10 李編年で三期とする扶風雲塘M10、M13、M20、劉家豐姬墓、齊鎮M2などの青銅器には、林編年でいえば西周中期のII期に相当する青銅器が複数伴出しており、筆者としてもその年代決定を保留すべき未確定要素が多い墓と考える。雲塘M10については、その年代の下限を示す同墓を切っていた灰坑H21の年代が、伴出遺物からみて雲塘の報告者の言うように昭王、穆王期のもではなく、西周後期の前段にまで下がると考えるべきである。

11 盧連成・胡智生「陝西地区西周墓葬和窖藏出土的青銅禮器」(盧連成・胡智生『宝鷄強國墓地』文物出版社、一九八八年所収)。

12 武者章氏の研究(武者章「先周青銅器試探」『東洋文化研究所紀要』一〇九)にあるように、氏の言う斜方格乳釘夔龍紋殷やこれに共伴する斜方格夔龍紋鼎などは、器形、紋様の要素からみて、年代として確かに殷墟IVに近いが、器そのものはけっして殷墟など殷文化中心地域の青銅器には見ない関中地方独自の形式に属する。

13 豊鎬遺跡の殷末周初頃と考えられる段階の青銅器の組合せを見ると、〈觚・爵〉ないし〈觚・爵・斝〉といった酒器の類を主体とするものと、〈鼎・簋〉を主体とするもの、そして両者を共有するものの3種あることに気づく。この様相は、豊鎬以外の同時期の関中地方の青銅器にもほぼ共通する状況とみられる。酒器の組合せが、殷の青銅器の流れを受けていることは明らかであるが、関中地方に現われた酒器の組合せは、觚をともなうものと、觚を除く爵、斝のみのものがある。爵、斝のみの組合せは殷墟には基本的に見られず、觚をともなう組合せがより殷墟の一般例に近いと言え、時期的には殷

墟IVに近い豊鎬遺跡の青銅器の最早段階におくことができる。一方、鼎、簋を主体とする組合せはもともと殷文化中心地域では基本的に欠落し、関中地方の特色を示す青銅器の組合せと考えられる。関中地方では、はっきりと西周期を遡ることがわかる殷代並行期の青銅器において、すでに鼎と簋はもつとも頻繁に見られる器種であり、しかもその器形、紋様が殷文化中心地域のそれから逸脱した、本稿で関中型とよぶ殷系青銅器の地方型の鼎や簋が出現していた。このような殷並行期の関中型の青銅器として遅い段階に出現した顕著な例が、方格乳釘紋簋や方格乳釘紋鼎である。これらの青銅器は、克殷後に、旧殷文化中心地域から直接移入されたことが予想される青銅器製作の影響をいまだ受けていない段階の青銅器と理解でき、その意味で先周時期の最後の段階の青銅器と言え、また豊鎬遺跡における最早段階の青銅器でもある。

以上のように、豊鎬遺跡の最早段階の青銅器には、殷墟の青銅器の形態や組合せを継承した流れと、殷並行期の関中地方の在来的な青銅器を継承した流れが並行している。前者は、殷墟の様相に近いために西周青銅器の最早段階とみなされ、後者はある意味で逆に、殷墟の青銅器から一定の距離をおいているために、克殷前後に始まる殷系の青銅器製作技術の影響が直接に現われていない段階とみなされるのである。この二つの流れがやがて一つの組成にまとまったものが西周式青銅器と呼びうるものの成立した状態と考えられる。そして、この二つの流れがなお並行的で、器種の構成にも青銅器の形態にも統一的なまとまりが見られない西周式青銅器成立への過渡的な段階が、筆者の考える豊鎬遺跡の最早段階であり、西周期の青銅器の最早段階である。

14 鞏啓明「西安袁家崖発現商代晚期墓葬」『文物資料叢刊』五。

15 この円肩罐が黒色磨研であるかどうかは説明がない。しかし少なくとも、M89の円肩罐とM54の円肩罐は、「67張」で形式細分されたうちの同じ罐I式に属する。

16 中国社会科学院考古研究所豊鎬発掘隊「長安灃西早周墓葬発掘記略」『考古』一九八四年九期。

17 王桂枝「宝鷄下馬宮旭光西周墓清理簡報」『文博』一九八五年二期。



- 18 巨万倉「陝西岐山王家嘴、衙里西周墓葬發掘簡報」『文博』一九八五年五期。  
 註2報告。
- 19 中国社会科学院考古研究所豐鎬工作隊「一九八四年—八五年滢西西周遺址、墓葬發掘報告」『考古』一九八七年一期。  
 註20報告。
- 20 中国科学院考古研究所滢西發掘隊「陝西長安鄠県調査與試掘簡報」『考古』一九六二年六期、三〇七頁。および徐錫台  
 「早周文化的特点及其淵源的探索」『文物』一九七九年一〇期。
- 21 鄒衡氏前掲「論先周文化」、二九九—三〇〇頁。
- 22 盧連成「扶風劉家先周墓地剖析——論先周文化」『考古與文物』一九八五年二期、四六頁。
- 23 註24盧連成論文、四六頁にも指摘するように、西周のいわゆる分檔鬲は、一般に三足を「二次模製」、すなわち一度の  
 型づくりで製作したものと考えられる。これは明らかに本稿のC類鬲に属する特徴であり、三足を別々に型づくりするB  
 類鬲とは異なる。
- 24 註22に同じ。

### 三 A類鬲を主体とする土器群（土器群A）の変遷

A類鬲は、西周以前の関中地方で、ある特定の組成をもつ土器の伝統を構成した一器種であった。この土器の伝統を土器群Aと呼ぶ。

土器群Aを主体とする遺跡は、第六節で詳述するように、その早い段階のものが関中地方中部の漆水河下流域に集

中して知られ、やや遅れて、関中地方西部の広い範囲に分布するようになる。そして、西周期直前の頃から東方の豊鎬地区に移入されて西周式土器の基礎となる。この過程で、関中西部の宝鶏地区では在来の土器群Bとの共存的な遺跡が多く形成される。土器群A、B共存遺跡については、第四節であつかう。

土器群Aを主体とする遺跡として、本格的に発掘された遺跡は武功鄭家坡、扶風北呂遺跡に限られ、その両者の内容についてもなお正式な報告はない。しかし、鄭家坡遺跡についてその発掘簡報は、遺跡の層位的観察と土器の形態的变化から、出土遺物を3期に分期している。簡報の説明は比較的簡單で、層位や土器の分類内容について、十分に追跡確認できるものではなかったが、のちに鄭家坡近隣の漆水河流域諸遺跡の分布調査がなされ、その整理にさいして鄭家坡遺跡の3期分期が適用されて、分期の内容が大略再確認された。これにより、鄭家坡発掘簡報の3期分期がほぼ妥当な認識であることが示されたと言える。本稿では、この鄭家坡3期分期の内容を再整理、微修正し、他の遺跡の土器を補充する形で土器群Aの組成とその変遷を考えることにする。

本来、土器群の編年案を組み立てるには、後節で土器群B、Cについて試みるように、まず諸遺跡の層位的単位あるいは遺物の共時的な単位を確認し、一方で主体的な土器の器種を形式・型式に分類して、その変遷の段階を示し、これらを整合的に捉えて土器群全体としての時期を設定していくべきである。土器群Aでは、残念ながら土器の器種別の形式・型式の段階を説明できるだけの十分な資料が入手できていないとは言えず、その手順どおりの作業は行なえない現状である。しかし、鄭家坡の3期分期の内容を補完し、より正確に把握するためにも、また今後の本格的な型式学的研究の手がかりを得ておくためにも、少なくとも属、盆など主要な器種を断片的であれ取り上げて、初歩的な形式・型式分類の指針を述べることにする。

(1) 土器群 A を主体とする主な遺跡

● 武功鄭家坡遺跡

【遺跡と層位】

鄭家坡遺跡は武功県城東〇・五 km の漆水河東岸の台地上に所在する。一九八一年から八三年にかけて生活址が発掘され、簡報が出された。<sup>1)</sup>一九八六年には主として墓域を対象とした発掘が行われたが、報告は出ていない。<sup>2)</sup>遺跡は南北約 3 km、東西約 〇・五 km に広がる。生活址は西側縁辺が漆水河に面する断崖面で、その他は壕溝が取り囲む構成になっていると推定され、壕溝の南側部分が検出されている。墓域はこの壕溝の東南外側に発見された。先周時期から西周前、中期にかけて比較的長期間続いた集落遺跡と考えられている。

生活址に関する簡報では、層序を「西周層」と「先周層」に大別し、その先周層をさらに、それに属する数例の灰坑の切り合い関係を例として、早、中、晩の 3 期に分ける認識を示す。そしてこのような層位的根拠と、伴出した土器の形態的变化の観察から、出土遺物を 3 期に分けて紹介する。層位的根拠の説明が十分とは言えない憾みはあるが、報告者が層位的根拠に配慮を示している限り、ここではその 3 期の区分に基本的にしたがう。ただし、後述する理由から簡報の中期と晩期の内容の境界に若干の修正を加え、また各期の表記は鄭家坡 I、II、III とする。

【分期と土器】

鄭家坡 I 鄭家坡発掘簡報の早期。灰坑 H 2、H 5、H 9 が標準的単位である。土器の器種として、A 類鬲、B 類鬲 (H 35)<sup>3)</sup>、盆、折肩罐、尊などがある。B 類鬲は 1 点またはごく少数である。紅褐色系の土器が主で灰色系は少な

西周式土器成立の背景 (上)

い。紋様は、粗く「散乱」した麦粒状と表現される縄紋が中心で、整然と施紋された縄紋は少ない。印紋では方格紋が多く、鄭家坡Ⅱ以降に多い方格乳釘紋や重菱紋の類はわずかである。A類鬲には後述するⅠ、Ⅱ、Ⅲ形式の3系統がすでに並行して現われている。またそのⅢ形式のプロトタイプとも言えるA・C折衷形式の鬲が出土している。

鄭家坡Ⅱ 鄭家坡簡報の中期。灰坑H 4、H 10、H 11、H 12、H 13、H 14、H 15、H 21、H 27。器種は、A類鬲、B類鬲（H 14・29）、甗、折肩罐、盆、鉢、簋、盤など。B類鬲はごく少数である。灰色系土器が早期より増え、また印紋の種類が増加するという認識は、この段階の傾向として重要である。印紋にはⅠ期以来の方格紋のほか、方格乳釘紋、重菱紋、重菱乳釘紋、重圈紋、雲雷紋などがある。A類鬲ではⅠ、Ⅱ、Ⅲ形式が継続する。

鄭家坡Ⅲ 鄭家坡簡報の中期の一部と晩期を合わせる。Ⅲ 1とⅢ 2の2段階に細分する。簡報は同じ灰坑H 19の出土土器を中期と晩期に振り分けて紹介するが、その振り分けの層位的根拠は不明で、かりに灰坑内に層位が分離されているにしてもこの灰坑の出土土器には全体として強い共通性が認められる。その共通した特徴として、例えば盆や鉢などの土器の胴上部が内傾気味に湾曲する傾向が指摘できるが、この点は他の中期の土器とはかなり明確に相違した特徴である。そこで本稿では、H 19の土器すべてを中期の土器から分離し、簡報の晩期の段階と一括して、鄭家坡Ⅲを設定する。ただし、H 19をその鄭家坡Ⅲのうちの前半段階としてⅢ 1とする。H 19を標準とするⅢ 1には、器種として、A類鬲、円肩罐、盆、鉢、盤が知られる。印紋は、重菱紋が盆、鉢、円肩罐に付せられる。一方、簡報の晩期をまとめたⅢ 2には、H 3、H 34、H 16がある。紹介されている土器は少なく、器種はA類鬲と小型の盆が知られるのみである。全体の様相は判然としないが、A類鬲、盆などは、豊鎬遺跡の西周Ⅰa段階とほぼ重なるものと考えられる。

墓 鄭家坡Ⅰ～Ⅲは同遺跡の生活址部分から得られた分期であるが、このほか同遺跡では墓が発掘されている。正式な報告はないが、報道によれば、墓の副葬土器の器種構成は、〈鬲Ⅰ〉〈鬲Ⅰ・罐Ⅰ〉〈鬲Ⅰ・簋Ⅰ・豆Ⅱ〉などである。その時期は、「鄭家坡早期の晩段から西周中期」にわたると言われる。生活址に見ない、いわゆる飯腹豆の系統が見られる点に注意される。<sup>(4)</sup> また鬲は基本的にA類鬲に限られ、B類鬲は、含まれないかごく少数である。<sup>(5)</sup>

#### 【年代】

報告者は、鄭家坡Ⅰを二里頭文化晩期から二里岡下層時期、鄭家坡Ⅱを「太王遷岐」前後、本稿に言う鄭家坡Ⅲ<sub>2</sub>をほぼ「文王作豊」時期とする。年代については研究者に異論が多く、張長寿・梁星彭両氏は、そもそも鄭家坡の全体が土器相からみて豊鎬遺跡の西周早期に近いとして、その上限を文王作豊時の範圍とする。<sup>(6)</sup> 鄭衡氏は、後述する益家堡遺跡の層位的根拠から、鄭家坡の上限年代を殷の祖甲期（殷墟Ⅱ頃）以降とする。<sup>(7)</sup> さらに、李峰氏は土器の比較から本稿の鄭家坡Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの時間幅は大きくないと評価し、年代の上限を「古公遷岐」より早くはないと考える。<sup>(8)</sup> 王占奎氏もほぼ同様の考えを示している。<sup>(9)</sup>

筆者は、まず鄭家坡Ⅲ<sub>2</sub>を、A類鬲の形態と報告者の所見から、西周Ⅰaの豊鎬遺跡生活址に近い時期と考える。一方、鄭家坡Ⅲ<sub>1</sub>のH19の土器は、その重菱紋の盛行が豊鎬の西周Ⅰaに近いことを示す一方で、後述するように出土した盆の胴上部が屈折する西周Ⅰaの一般的な特徴はなく、鄭家坡Ⅱの盆との中間的形態を示す。Ⅲ<sub>1</sub>は西周Ⅰaの直前段階、すなわち殷墟Ⅳ前半の前後と考えておく。

一方、鄭家坡Ⅰは、報告者の考えよりかなり遅く、逆に鄭衡、李峰、王占奎の各氏よりやや早い殷墟Ⅰ、Ⅱ期相当と考える。その主な根拠は、①鄭家坡遺跡でかつて墓出土と考えられる一群の青銅器（鼎、甗、杯）（図6-12～14）

が収集されているが、これらの青銅器の年代はその器形、紋様からほぼ殷墟Ⅰ、Ⅱ前後と考えられ、鄭家坡遺跡の上限年代がそこまで上がることを示唆する。また、張天恩氏によれば、同遺跡の灰坑H35から本稿に言うB類鬲のⅠ段階のものが出土していると言われる。B類鬲のⅠ段階は、後述するように殷墟Ⅰ、Ⅱまたはそれ以前に遡る可能性のある土器と考えられる。②鄭家坡ⅠのA・C折衷形式の鬲は、肥厚した口縁端部に波状の貼付紋裝飾ないし刻み目を施しているが、この種のA・C折衷形式は後述するC類鬲の中では、土器群CのⅡ期、すなわち殷墟Ⅰ、Ⅱ相当に位置づけられる。③H2・3のA類鬲Ⅰ形式が注目される。鄭家坡の簡報では客省莊二期文化の鬲と関係があるとする1点である。筆者は後述する関連資料からみて、器形上A類鬲Ⅰ形式は客省莊二期文化の遅い段階の鬲（第一節のDⅡ類）と関連するもので、特に鬲H2・3はそうした古形式にある程度近づく段階の土器とも理解される。④報告の鄭家坡早期の<sup>14</sup>C年代としてBP3380±60という数値が知られる。これは大まかに言って殷墟Ⅰ、Ⅱに近いという判断が成り立つ。⑤盆や罐の胴部の印紋は、Ⅰ、Ⅱ期で方格紋が、Ⅲ期で重菱紋が盛行するが、方格紋は、関中地方の殷系土器群である土器群Cの北村遺跡（二里岡期から殷墟Ⅰ、Ⅱ）などでも常見され、その流れを汲むことが考えられる。一方、重菱紋は豊鎬遺跡の西周Ⅰa生活址においても多く見られる特徴である。印紋の種類の変化に鄭家坡ⅠからⅢの年代の上下限幅が示唆される。

以上のことから、鄭家坡Ⅰを殷墟Ⅰ、Ⅱ、鄭家坡Ⅲ1、Ⅲ2をそれぞれ殷墟Ⅳ前半、西周Ⅰa前後相当と考える。したがって、鄭家坡ⅠとⅢの中間の鄭家坡Ⅱについては、ほぼ殷墟Ⅲ期前後と推定することができよう。

#### ●漆水河流域の諸遺跡

土器群Aを主体にする遺跡が集中する武功県内の漆水流域とその近接地域では、一九七九年と八〇年に、社会科

学院考古研究所が分布調査を行ない、黄家河遺跡などを発見しているが、その後一九八三年に、宝鷄市考古隊は鄭家坡遺跡の発掘と並行して再度この地域の分布調査を行ない、二七箇所の「先周遺跡」を発見したと報告している。報告者はそれらの遺跡で表採された土器を、鄭家坡遺跡の早期、中期、晩期に対応させて、3時期に区分している。この作業を通じて多数の遺跡が、鄭家坡3期のうちのいずれかの1期に属するとして振り分けられている。この結果はすなわち、鄭家坡に較べて継続時間の短い遺跡の場合に、その包含する土器が、鄭家坡遺跡の3期のいずれかの時期に振り分けができたことを意味し、鄭家坡の3期分期が時間差を示す段階として漆水河流域の土器群Aに対し有効であることを間接的に証明したのである。

この分布調査の結果として、報告者がまとめている鄭家坡3期に対応する土器変化の内容は比較的明確で、特に次の諸点は重要である。①早期（鄭家坡I相当）では灰色系土器が少なく紅褐色系土器が多いのに対して、中期（鄭家坡II+III 1相当）では灰色系が増加し、晩期（鄭家坡III 2相当）では灰色系が圧倒的になる。②各期とも縄紋が紋様の主体であるが、鄭家坡早期では「散乱」した麻点状の縄目が多く、鄭家坡中期以降しだいに規則的で浅く細い縄目になる傾向にある。③印紋は、鄭家坡早期で方格紋が多く、鄭家坡中期では方格乳釘紋、重菱紋など、その種類が増加する。鄭家坡晩期以降になると印紋は減少傾向になる。④早期では鬲、甗などの口縁端部に「鋸齒状紋」を付す例が多い。

漆水河流域では、右の分布調査のほか、武功黄家河遺跡<sup>12</sup>と澠西莊遺跡<sup>13</sup>の調査が行われている。黄家河では、その生活址の中に、紅褐色系土器が多く印紋が盛行する一括土器と、灰色系土器が多く印紋が少ない一括土器が含まれ、層位的状況からも前者が後者より早いと考えられる。また同遺跡の第一期墓はその状況から後者に年代的に近い。以

上から黄家河遺跡は2期に分期できる。《黄家河Ⅰ》H3、H5。年代は鄭家坡Ⅲ1に近い。《黄家河Ⅱ》H6、H7および黄家河一期墓32基。豊鎬の西周Ⅰa、Ⅰbと並行する。一九八二年に出土した青銅器（鼎、簋、壘など）は、殷墟Ⅳ後半ないし西周Ⅰa相当とみられ、黄家河Ⅱの墓にもなった青銅器であろう。<sup>14</sup>

《滸西荘》では、H1とH27が同時期の良好な一括遺物として一つ分期の単位にまとめられる。伴出したA類鬲などは豊鎬遺跡の西周Ⅰaに近いが、西周Ⅰb以降の西周式土器はまったく含まない。西周Ⅰaないしわずかに早い時期の土器と考えられる。

●扶風北呂遺跡

北呂遺跡は、扶風県南部、渭河の北約四kmの「原」南端の傾斜地に位置する。<sup>15</sup>一九七七年から八一年にかけて、二八三基の墓が発掘された。墓の切り合い関係はなく、その他の層位的情報もない。報告者は、主として出土遺物を根拠に6期に分け、一、二期は先周時期、三期以降は西周前期から中期頃に入ると考える。三期以降は既知の西周の土器や青銅器に依拠する分期中で、十分な分期の根拠がある。一方、土器には一期↓六期を通じてきわめて連続的な変化が読み取れ、したがって一、二期（以下Ⅰ、Ⅱ）を三期（以下Ⅲ）以前、すなわち西周以前とする報告者の主張は基本的に同意できる。《北呂Ⅰ》M7、M12、M21、Y1がある。土器の鼎、盆などは鄭家坡Ⅲ1に近い。《北呂Ⅱ》M6、M91がある。A類鬲などは、ほぼ豊鎬の西周Ⅰaに並行する。《北呂Ⅲ》M140、M251。土器、青銅器とも西周Ⅱ前後。

北呂の先周期から西周期の墓の副葬土器は、基本特徴から言えばA類鬲を主体とする「西周式土器」に一致する内容をもち、ところが、北呂のA類鬲では、肩部が張り出し、足尖部が顕著に高い特徴（報告のA型、B型）が北呂Ⅰ



から西周期に入る北呂Ⅲ以降にも継続されている。この特徴は同時期の豊鎬地区の「西周式土器」にけっして一般的ではなく、北呂独自の特徴と言える。さらに、土器の器種の構成を見ると、同遺跡と、豊鎬のそれに一定の差がある。すなわち、北呂の副葬土器の組合せを追ってみると、北呂の先周時期から西周期にかけての二〇四基のその内訳は、〈鬲1〉87、〈鬲1・罐1〉68、〈鬲1〉9、〈鬲2・罐1・尊1または簋1〉3、〈鬲2・罐1〉3、〈鬲2〉1、〈鬲2・尊1〉1、〈鬲1・尊1・簋2〉1、〈鬲1・尊1・盂1〉1となる。鬲は基本的にA類鬲である。これを豊鎬遺跡の西周期の墓の「西周式土器」の器種と比較すると、A類鬲と折肩罐、円肩罐が主体的であることは共通するが、豊鎬の西周式土器の他の重要な器種であるC類鬲、簋、壺、尊（仿銅）、甗、疊形器、豆、碗、釉陶、および有蓋土器、各種の仿銅土器など豊鎬遺跡の西周式土器中に頻見する多くの器種が欠落またはきわめて少数にとどまる状況が指摘できる。しかもこれらのうち碗など一部を除くと、他の器種はいずれも、後章で明らかにするように、豊鎬遺跡の西周式土器の一部となつていて一連の股系土器ばかりであることが注目される。同じ器種間の形態においても、器種の構成においても、西周王朝の都城豊鎬の「西周式土器」と、北呂遺跡の西周期の土器は、土器群Aの流れを基本にする点では共通するが、その他の面で大きな差異の生じていたことが指摘できる。

#### ● 乾県大伯溝

漆水河、涇河の中間地帯に位置する乾県周辺は、先周時期の渭水流域を考える上できわめて重要な地域であるが、考古学的にはほとんど空白になつていて、ただ、一九五九年の分布調査の過程で、乾県大伯溝において、A類鬲1点が採集されている<sup>(16)</sup>。形態は明らかに西周Iaより年代の上がる土器である。

(2) 土器群Aの変遷

土器群Aの編年に当たっては、右に示した鄭家坡遺跡の3期分期を軸とするが、ここでは単に紹介されている各時期の土器を羅列するのではなく、以下に可能な範囲で一部の器種を形式・型式に分類し、その変遷を見ることで、3期分期の内容の妥当性を確認したい。この作業は、鄭家坡一遺跡の分期内容を土器群A全体の變遷の時期として一般化するためにも、また今後の本格的な型式学的検討への手がかりとしても不可欠である。

(A) A類鬲の変遷

1. 分類

本稿での土器の分類は、形態的特徴の持続的な一群(系統)を形式とし、(I、II・・)で表記する。その下位に小形式が設定される場合、(a、b・・)を付加する。一方、形式内での時系列的な差とみられる形態の変化を型式として分類し、(1、2・・)を付加して表記する。

A類鬲の形態は多様で、多くの形式(系統)が並行している。しかし、利用できる資料は量的に十分ではなく、ここでは主要な形式の若干を取り上げるにとどめ、また形式内の時間差を反映した型式の細分は示さない。また、以下の鬲資料は、鄭家坡出土資料をはじめ生活址出土のものが大部分で、これと北呂遺跡や豊鎬遺跡の若干の墓から出土した例を同じ枠であつかつた。生活址と墓の土器を分離して検討することは今後の課題とする。

I形式 円筒状の別づくりの高い口頸部をもち、高い襠部、細目の三足を呈する。鄭家坡IからIIまでその系譜がつづく。鄭家坡IのH2(図6-1)についてその報告者が指摘しているように、この形式の鬲あるいは客省莊第二期文化の遅い段階の鬲と関連する可能性がある。なおその灰坑H2では以下のII形式、III形式が共伴する。

II形式 円筒状の長胴に特徴のある形式。鄭家坡IからIIに例がある。本来、A類鬲の成形法を考えると、こうした円筒に近い形態のものこそA類鬲早期の段階を代表すると言える。襠部は低く、三足の先端はやや内傾する。口縁は外に湾曲ないし屈折して外反する。

III形式 口頸部が大きく外反し、丸く張りのある肩部をなす形式。襠部は低い。口縁端部はさらに屈折外反し、その端部直下に粘土帯を重ねる場合が多い。鄭家坡IのH2の例(図6-7)では、口縁端部に波状の刻みがめぐる。鄭家坡IからIIIまでつづき、豊鎬の西周Ia生活址にも例(図6-39)がある。西周I以降に現われる高い外反口縁部をもつ西周期のA類鬲諸形式の早期の例として注意される。

A・C折衷形式 III形式のプロトタイプとも考えられる鬲。図6-3のように口縁端部を肥厚させて、折り返し状に帯状をなし、そこに刻みをめぐらせた鬲がある。このような口縁部は本来後節で述べるC類鬲の特徴であり、三足部はA類鬲の聯襠鬲の特徴を示す。C類鬲とA類鬲の折衷形式であり、後節でC類鬲の中に位置づける。口縁の形態、口縁端部の刻みは、図6-7、鄭家坡IのIII形式に影響している。

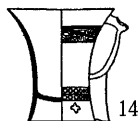
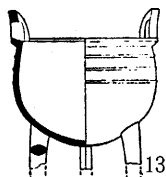
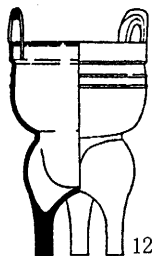
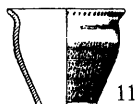
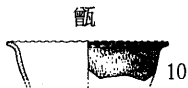
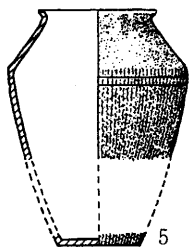
IV形式 I形式に後続する形式とみられる。口縁端部は水平に近く外反する。

V形式 円筒状の胴部をもつ形式で、II形式の後続形式とみられる。II形式に比較して胴部が短く、襠部が高い。西周式土器のA類鬲に近づいた形式である。

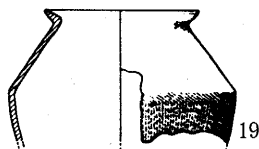
VI形式 比較的高い口頸部と高い襠部をもつ。鄭家坡I、II以来の諸形式を受けて、西周Ia相当の濬西莊H1の例(図6-45)などを経て、三三頁の図5-25のような西周式土器のA類鬲の一般的な例につながるとみられる。

VII形式 II↓V形式とつづく円筒状胴部をもつ流れをくみ、肩部がやや張り出した形式。胴部は深目で三足先端が

折肩罐

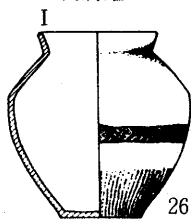
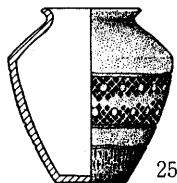


I



- |        |           |        |         |
|--------|-----------|--------|---------|
| 1、2、   | 鄭家坡H 2    | 15、16. | 鄭家坡H 12 |
| 4、7.   | 鄭家坡       | 17.    | 南店子     |
| 3.     | 鄭家坡       | 18.    | 鄭家坡H 10 |
| 5.     | 鄭家坡H 5    | 19.    | 北陽      |
| 6、8.   | 鄭家坡H 9    | 20.    | 鄭家坡H 15 |
| 9.     | 鄭家坡T 4 G② | 21、22. | 鄭家坡H 4  |
| 10.    | 小湾        | 23.    | 鄭家坡H 11 |
| 11.    | 徐東激       | 24.    | 鄭家坡H 13 |
| 12-14. | 鄭家坡       | 25.    | 鄭家坡H 14 |
|        |           | 26.    | 南廟      |

圓肩罐



II

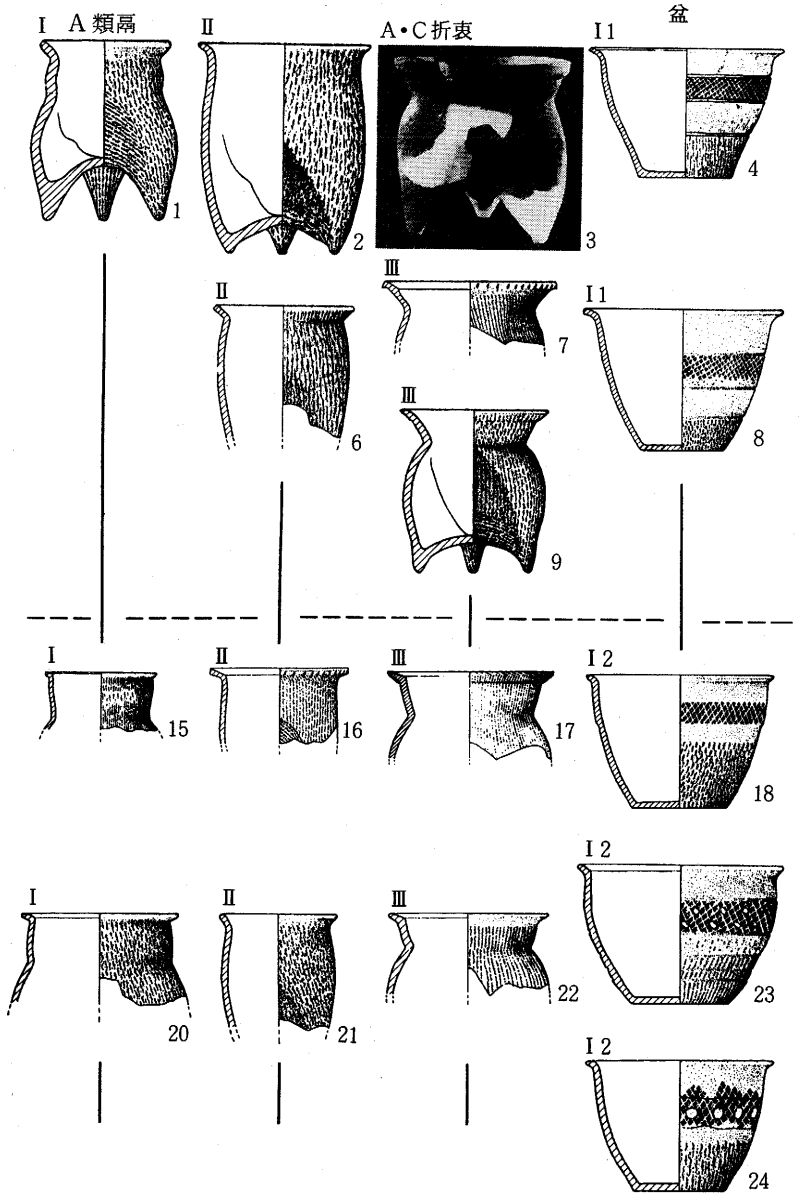
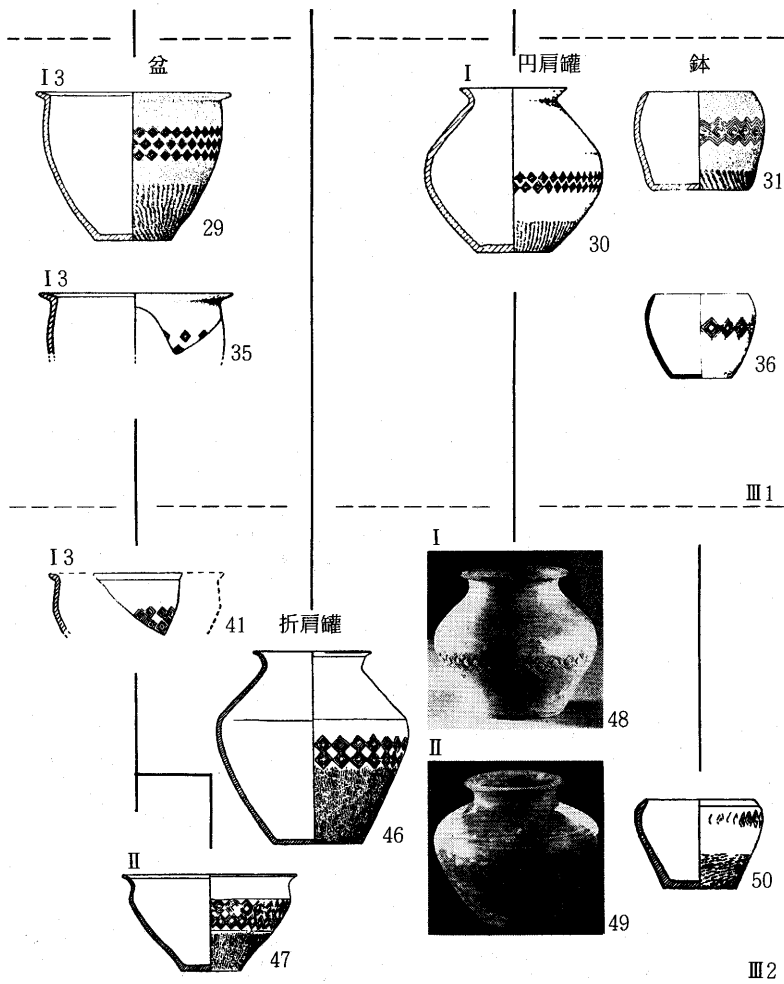
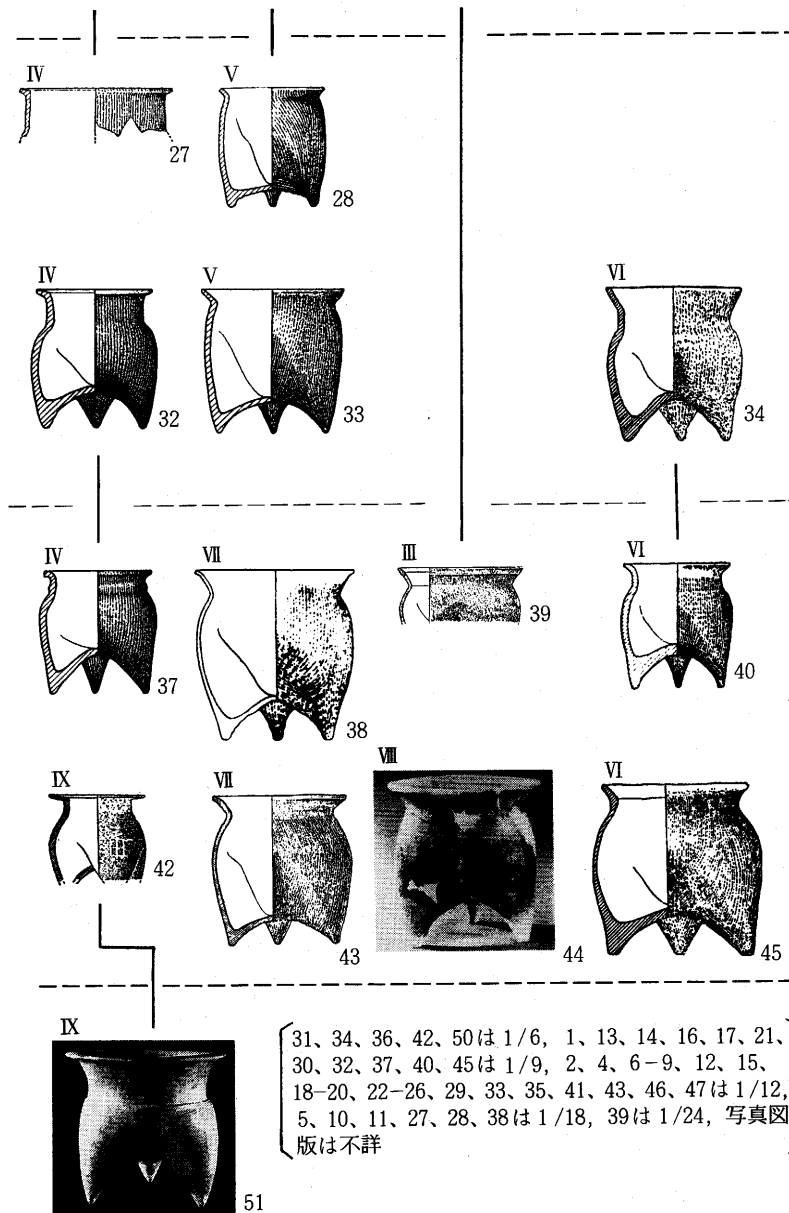


図 6(1) 土器群Aの変遷(1)



- |        |        |          |        |          |
|--------|--------|----------|--------|----------|
| 27、    | 36.    | 龐家堡      | 44.    | 67張M 85  |
| 29-31. | 37.    | 北呂M 91   | 45-47. | 澹西莊H 1   |
| 28.    | 38.    | 徐東灣      | 48.    | 黃家河M 36  |
| 32.    | 39.    | 張家坡T 315 | 49.    | 北呂M 6    |
| 33.    | 40.    | 北呂M7     | 50.    | 澹西莊H 27  |
| 34.    | 41、42. | 馬王村H 11  | 51.    | 84澧M 315 |
| 35.    | 43.    | 張家坡H301  |        |          |



31、34、36、42、50は 1/6、1、13、14、16、17、21、  
 30、32、37、40、45は 1/9、2、4、6-9、12、15、  
 18-20、22-26、29、33、35、41、43、46、47は 1/12、  
 5、10、11、27、28、38は 1/18、39は 1/24、写真図  
 版は不詳

やや内傾する特徴がある。豊鎬西周 I a 生活址の例が含まれる。

VIII 形式 大きく外反した口縁部は III 形式の流れを受けたとも理解できる。三足先端は VII 形式のように内傾せず、足尖が高い。この系譜を引く A 類鬲も西周式土器中につづく。

IX 形式 IV 形式に関連する形式とみられるが、口縁端部がさらに幅広に外反し、口頸部の縄紋が擦り消され、三足部に横方向の縄紋が付せられる顕著な特徴をもつ。この形式は、西周 I a 馬王村 H 11 などに早い例があり、西周 I b 前後の A 類鬲の中にもその系譜が続く（図 6—51 など）。また IX 形式に類似する口頸部と横方向の縄紋をもつ同時期の B 類鬲（B 類鬲 VI 形式）（七五頁、図 8—36・37 参照）が存在しており、A 類鬲と B 類鬲が接点をもつ形式として注意される。

## 2. 変遷

I、II、III 形式は鄭家坡 I、II で並行し、一部は鄭家坡 III に継続する。I ↓ IV 形式、II ↓ V 形式という後続形式への移行が見られ、IV、V および VI 形式の登場が A 類鬲の新しい段階を示す。さらに VII、VIII、IX 形式などはその直後に位置するとみられ、これらの形式は、前節で豊鎬遺跡の最早段階とした西周 I a の単位からも出土する。IV ↓ IX 形式が直接にその後の西周式土器の A 類鬲につながる形式であることは明らかである。

A 類鬲の全般に共通して見られる変化として、鄭家坡 I ↓ III にかけて、一般的に各形式とも器高が次第に低くなる傾向がある。また、三足の先端が鄭家坡 I から III、西周 I a では常にやや内傾するか、または直に近いものが大部分であるが、西周 I a 以降の西周式土器の A 類鬲ではしだいに外に開く傾向が一般化する。また足尖が西周 I a を挟む前後から一般に低く変化する傾向がある。さらに、口縁部外面は鄭家坡 I から III 1 段階では諸形式で口縁部を含む全



体に縄紋を残すが、西周 Ia から以降の A 類鬲では口縁部の縄紋を擦り消すものが急増する。こうした足尖と、口縁部の処理は、西周 Ia という段階を過渡期として、先周時期の A 類鬲と西周期の A 類鬲の段階を区別する一般的な指標の一つと言える。

(B) その他の器種の変遷

### 1. 盆

盆は、土器群 A では基本的に生活址にともなう。その数量は鬲の普遍性に遠く及ばないが、器形と紋様の変化はむしろ一系列の中で比較的明確に捉えられ、土器群 A の時期の設定に一つの指標となる器種である。

I 形式とそこから派生した II 形式に分けられる。

I 形式 平底で深い胴部をもつ。胴中部以下、底部にかけて縄紋を施し、胴上部に印紋帯をもつ。I 1 ↓ I 3 の 3 形式に細分する。I 1 は器壁が斜直で、口縁が外反する。印紋として方格紋が施され、方格紋帯の上下を平行沈線で区画する。I 2 は胴部にやや外への張り出しが認められ、丸みが生じている。口縁は屈折して外反する。胴上部の印紋は方格紋のほか、方格乳釘紋が見られ、印紋帯の上下の沈線は顕著ではなくなる。I 3 は胴部がさらに丸く張り出し、胴上部はむしろやや内傾する。口縁は屈折して外反する。印紋は重菱紋が大部分になる。

II 形式 I 3 から分岐したとみられる形式で、胴上部から口縁部が S 字形に屈曲外反する。胴上部には重菱紋をもつものが多い。胴下部の縄紋を擦り消し、磨研する例もある。ほかに、胴部全体に縄紋を施し、沈線を数条めぐらす例も知られる。また、胴部が浅いものと深いものがある。II 形式は、I 3 と紋様において共通性が大きく時期の重なる形式である。II 形式の後続形式は、西周期に入って、なぜか西周 I、II で知られる例が少ないが、むしろ西周 III 前

後から生活址と墓に共通する主要な器種の一つとして再登場してくる。

盆 I 1 は主として鄭家坡 I、I 2 は鄭家坡 II、I 3 は鄭家坡 III 1 と西周 I a、II は北呂 I や西周 I a 段階の遺跡にともなう。

## 2. 折肩罐

土器群 A の指標となる器種の一つであるが、鄭家坡 I、II、III にもなう資料の時間的な変化は顕著でない。やや張り出し気味の斜直の胴部が屈折内傾して肩部をつくる。肩部の外表面は磨研されて平坦である。その肩部に外反する口縁がつく。胴部は、全体に縄紋が付せられるものと、方格乳釘紋や重菱紋帯を割り付けるもの、さらに肩部同様胴部も磨研されるものなど各種がある。折肩罐は西周 I 以降の西周式土器において、その肩部の位置（最大幅の位置）をしだいに低く変化させながら、墓、生活址に共通して継続される（三三頁、図 5—26・34）。

## 3. 円肩罐

胴中部が張り出し、重菱紋をめぐらす I 形式と、胴上部に最大幅があり、肩部にしばしば 2 条の平行沈線をめぐらせた II 形式がある。I 形式は生活址、II 形式は墓に出土例がある。II 形式の早い段階は黒色磨研のものが、第二節に詳述したように西周 I a の標準的土器ともなり、関中地方の同時期の墓に広くともなう。II 形式の遅い段階は、やがて西周 I b から II にかけて、すべて灰陶に変わり、西周式土器の中に継続されていく（三三頁、図 5—27・35）。

## 4. 鉢

碗と称されることも多い器種。斜直の外傾した胴部下部和、強く内に湾曲した口縁部をもつ。また一般に、胴部に重菱紋など印紋帯をもつ。鄭家坡 III 1 と西周 I a 段階の遺跡にともなう。

## 5. 尊

広口で、胴上部が屈折内傾し、口縁部が大きく外に湾曲する。北呂Ⅰや西周Ⅰaの遺跡にともなう。また後述する土器群Cの老牛坡遺跡（袁家崖墓）に混入した土器群Aの尊がある。同墓には殷墟Ⅳ前半相当の殷墟の土器に直結する土器が相伴しており、尊の年代を示唆する。

## 6. 紋様

器種を横断して共通した時期的傾向を示す紋様の変化をまとめておく。鄭家坡Ⅰ～Ⅲ各段階の土器を通じて縄紋が主体的であるが、鄭家坡Ⅰでは「散乱」した粗い粒子状の縄目におおきな特徴がある。鄭家坡Ⅱ、Ⅲでは列の整った細目の縄紋が主流になり、この傾向は西周期の土器へとつながる。一方、盆、折肩罐、鉢の胴部に頻繁に見られる印紋は、段階区分の指標となる。鄭家坡Ⅰでは方格紋が主、Ⅱに方格紋のほか方格乳釘紋と重菱紋が出現、Ⅲで重菱紋が主体となる。ただし鄭家坡Ⅲに入ると印紋は減少傾向となり、西周Ⅱに入ると、西周式土器の中では激減するようである。また、鄭家坡ⅠのA・C折衷形式の鬲や、甗や甑（図6-10・11）の口縁端部に、波状の刻みをめぐらせた裝飾が頻見される。これは、後述する土器群BのⅠ期や土器群CのⅠ期にも現われる特徴で、関中地方の土器群で、殷墟Ⅰ、Ⅱ並行期ないしそれ以前の土器に共通に盛行した特徴である。

## 7. 器種の構成

土器の器種構成は、各段階ごとに顕著な差はないようである。変化ははつきり捉えられない。各段階を通して、墓の副葬土器はA類鬲と折肩罐が主体で、盆や豆（鄭家坡の墓地）などがともなうこともある。生活址では、A類鬲、甗、甑、盆、簋、豆、鉢、折肩罐、円肩罐がある。鉢、円肩罐は鄭家坡Ⅲに限定的である。なお、豆は生活址にもともなうが、

遺構が確認された資料は報告されていない。生活址にともなうとみられる豆は、盤の部分が浅い皿状の器形で、一方、墓出土のそれは、殷系のいわゆる仮腹豆の系統を含むとみられ、これらは系統が違ふようである。資料の増加を待つて再考したい。

(3) 土器群Aの時期の設定と年代

以上に述べた各器種の分類によって、鄭家坡I↓II↓III1↓III2・(西周Ia)↓(西周Ib以降)という段階的移行が、土器の形式・型式の推移として確認できたと考える。段階の指標となる形式・型式の動きとして、特に、A類鬲におけるIV↓VI形式の出現は鄭家坡III1の段階を示し、VII↓IX形式の登場は西周Ia相当の段階を示す。さらに西周Iaを挟んで西周式土器のA類鬲への移行も明解であった。また盆I1↓I2↓I3形式は鄭家坡I、II、IIIの段階に対応し、円肩罐II形式のうち特に黒色磨研の土器は西周Iaを代表し、後続のII形式は西周式土器中に継続する。

(A) 時期の設定

鄭家坡I、II、III1、III2段階を、土器群Aの「時期」の指標とする。各時期に属する遺跡、ないし遺跡内の分期単位は、ほぼ以下のように整理できる。ここで初出する遺跡の多くは、宝鷄市考古隊の漆水河流域における分布調査<sup>(17)</sup>で知られた遺跡である(\*印)。

I期 鄭家坡I、北店子\*、小灣\*、岸底\*、東坡\*、徐東灣\*、橋東\*(以上武功県)、乾泉周城\*

表4 土器群Aをともなう主要遺跡の分期対照表(\*印は土器群B共存遺跡。四節で詳述。)

殷墟	西周時期	鄭家坡	北呂	黄家河	澗西莊	漆水河流域諸遺跡	岐山賀家村*	鳳翔西村*	宝鷄鬪鷄台*	土器群A時期
I		I				先周早期				I
II		II				先周中期				II
III		III 1	I	I (H3, 5)		先周晚期	II		II	III 1
IV		Ia	III 2	II	II (H6, 7)		H27		I	III
		Ib		II		H1				
		II		III			IV	II	IV	↓ 継続, 北呂 II, III段階以降に代表される。
								V		

西周式土器成立の背景(上)

II期 鄭家坡II、南廟\*、北陽\*、漳家堡\*、徐東灣\*、南店子\*、坎家底\*、于家底\*、南夏家\*、坡底\* (以上武功県)

III期 III 1 鄭家坡III 1、黄家河I (以上武功県)、扶風北呂I

III 2 鄭家坡III 2、黄家河II、澗西莊、趙家来 (以上武功県)、扶風北呂II

III 徐東灣\*、龍渠村\*、文家台\*、南廟\*、漳家堡\* (以上武功県)

漆水河流域を中心とした地域のほか、周原遺跡や、宝鷄地区では、III期から土器群Bと共存した遺跡が広く形成される。代表的な遺跡に岐山賀家村II、鳳翔西村I、宝鷄紙坊頭I、鬪鷄台II (以上土器群AのIII 1並行)、岐山賀家村III、鳳翔西村I、宝鷄紙坊頭II、鬪鷄台III (以上III 2並行) などがある。さらに豊鎬遺跡の最早段階である西周I aは、その中心的土器が、土器群AのIII

2期に一致する。<sup>19)</sup> その西周I aの土器は関中地方の周辺部、甘肅靈台姚家河、<sup>20)</sup> 淳化史家塬、<sup>21)</sup> 涇陽高家堡などにも達する。(表4参照)

(B) 土器群Aの年代(殷文化中心地域編年との対比)

I期 遺跡の項で述べたように、この時期を代表する鄭家坡Iは殷墟I、II並行と考えられるいくつかの根拠がある。この年代観はそのままI期の年代となる。

II期 II期自身の内容に今のところ年代の決め手はない。しかし、鄭家坡遺跡について考察したように、この時期を代表する鄭家坡IIは、前後する鄭家坡IとIIIの間の年代をとって、ほぼ殷墟III前後並行と考えられる。

III期 豊鎬遺跡の西周I aに一致する遅い段階と、先行するII期に接近した早い段階を包含しており、前者をIII 2、後者をIII 1とした。III 2はしたがって西周I a並行、III 1はその直前と考えられる。III 1にあたる北呂Iの墓M 21出土の尊は、土器群Cの老牛坡遺跡(袁家崖墓)出土の尊に近い。袁家崖墓は、殷墟IV前半頃の殷系土器を数点共伴している。さらに同じ北呂M 21出土の1点のB類鬲は、これまた後述するB類鬲の段階から殷墟IV前半頃の土器とみられる。以上から、III 1は殷墟IV前半頃と考えられる。

(4) 土器群Aの系譜

土器群Aの始源を考えると、まず第一に注目されるのは、関中地方における先行文化である客省莊第二期文化の存在であろう。土器群Aの土器のうち、A類鬲の一部や折肩罐などは客省莊第二期文化中の類似した土器と無関係ではないと言える。A類鬲に関しては次のことが指摘できる。武功趙家来遺跡の客省莊第二期文化は、その層位と土器

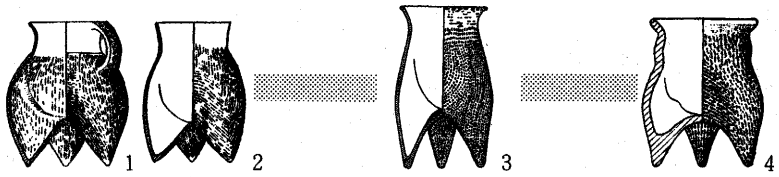


図7 客省莊第二期文化のDⅡ類甬とA類Ⅰ形式

1. 趙家来T102◎B 2. 趙家来H4 3. 馬王村 4. 鄭家坡H2

相から、早、晩に分期できる可能性が示唆され、同遺跡の甬についてもこれに対応する比較的明確な早晩の変化が指摘されている。その遅い時期に第一節で述べたDⅡ類甬が現われているが、その中に客省莊第二期文化の甬としては少数の、把手をもたない甬が現われている。このような甬に近似し、かつ弧状の楯と高い口頸部、および円筒状に近づいた器身を呈する甬が、かつて長安馬王村で発見されたことがある。この甬は、もし今後類似資料が増加するならば、土器群Aの甬Ⅰ形式の最早の1例とした鄭家坡H2・3などと、客省莊第二期文化の遅い段階の甬との中間的段階の甬として注目したい(図7)。鄭家坡H2・3の甬は、三足部に円筒状の別づくり口頸部をのせる形態にも特徴があるが、この作り方も、客省莊第二期文化の甬にしばしば見られる特徴である。

しかし総じて言えば、現在知られている客省莊第二期文化と土器群Aの間には、土器の形式においても、<sup>14</sup>Cで知られる時間においてもなお大きな隔りがある。両者間の土器の継承関係を説明するには、そこになお未知の段階が介在することを予想しつつ、今後の調査を待たなければならない。

他方、盆、豆(仮腹豆の系統)、尊などの器種は先行する客省莊第二期文化にまったく類似例がなく、関中地方に在来的でないとするれば類似の土器が盛行した殷系の土器に系譜もとめることが妥当である。その場合殷系の土器は、関中地方に波及し在地化した殷系の土器群である土器群Cを媒介として土器A群に移入されたとみることができるとする。また、I

期の鬲、甗、甗の口縁端部に見られる波状の刻みの裝飾は、やはり土器群Cで盛行した要素と考えられる。同じように、I、II期で盛行した印紋の方格紋は、土器群Cに盛行したそれを継承したことが考えられる。一方、印紋の中でもII、III期に盛行する重菱紋や方格乳釘紋は、もともと殷系の青銅器の紋様から引用された可能性が高い。

なお、西周Ia期に著しく盛行する方格乳釘紋、方格乳釘紋鼎など在地型（関中型）の青銅器の方格乳釘紋は、逆に先行する土器群Aの土器の印紋から引用されたものと考えられる。この推測が正しいとすれば、方格乳釘紋簋など、武者氏が周の政策的背景のもとに「文王を製作主体者として製作された」と推測した青銅器は、本来土器群Aと緊密に結び付いて出現したことになる。この土器群Aがやがて、西周式土器の主体となっていくこととある意味で符合する状況と言えよう。

このように、土器群Aの主要な組成は、客省莊第二期文化以来の関中地方の在来的土器に、関中地方の殷系土器群である土器群Cを媒介として、二里岡期から殷墟期にかけての殷系の諸要素が移入される中で形成されたとみられる。一方、土器群Aを構成したA類鬲、盆、折肩罐、円肩罐、鉢などの主要器種は、その後、豊鎬遺跡に代表される西周Ia段階を経て、直接的に西周式土器の主要な基礎となっていく。

土器群A主体の遺跡における墓制上の特徴について付言しておく。北呂遺跡など漆水河流域近隣の遺跡における墓は、知られる材料では、先周時期から西周期にかけて一貫して一般に小型の長方形の竪穴土壇墓で、墓口と墓底の大きさはほぼ等しく、いわゆる腰坑は基本的に見られない。これは腰坑が、豊鎬遺跡の西周期の墓でかなり多く含まれる状況とは異なっている。腰坑が殷系文化と関連が深いとする一般的認識から言えば、この現象は、豊鎬遺跡では殷系の墓制が移入されていたのに対して、漆水河流域では、先周時期から西周期にかけて一貫して殷系の墓制を受け入



れなかつたことを意味する。

これに関連した現象は土器の動向にも現われている。すなわち第七節で詳論するように、王朝の中心地豊鎬地区で成立する西周式土器が、土器群Aを基礎にこれに少なからぬ殷末の殷系の土器を吸収して構成されているのに対し、漆水河流域では、北呂遺跡で示したように、西周期以降も豊鎬地区の「西周式土器」の組成に一致することなく、伝統的な土器群Aの基本的組成を保持したとみられるのである。

1 宝鶏市考古工作队「陝西武功鄭家坡先周遺址発掘簡報」『文物』一九八四年第七期。

2 劉軍社「武功県鄭家坡周人墓地」『中国考古学年鑒一九八七』文物出版社、一九八八年参照。

3 張天恩「高領袋足鬲的研究」『文物』一九八九年六期。

4 一九八七年二月に鄭家坡遺跡を訪れ、墓の出土土器を実見することができた。含まれていた豆は生活址の豆とは異なるようで、殷系土器と関係のあるいわゆる仮腹豆に類似するものとおもわれた。

5 前註に同じ。現地での見聞の結果、鄭家坡の墓では、生活址同様A類鬲が中心で、B類鬲はほとんど出土していないことを確認した。

6 前掲張長寿・梁星彭「関中先周青銅文化的類型與周文化的淵源」。

7 前掲鄒衡「再論先周文化」、二七頁。

8 前掲李峰「先周文化的内涵及其淵源探討」、二六七頁。

9 李峰氏註8論文、二六六頁紹介の王論文（論鄭家坡先周遺存和劉家遺存）陝西省考古研究所・西安半坡博物館成立三十周年學術討論会打印稿、一九八八年）、未見。王氏は一九九一年一二月、筆者宛書簡においても同様の考えを述べてい

る。

- 10 中国社会科学院考古研究所陝西武功發掘隊「陝西武功泉新石器時代及西周遺址調查」『考古』一九八三年五期。
- 11 宝鷄市考古工作隊「關中漆水下游先周遺址調查簡報」『考古與文物』一九八九年六期。
- 12 中国社会科学院考古研究所武功發掘隊「一九八二—一九八三年陝西武功黃家河遺址發掘簡報」『考古』一九八八年七期。
- 13 中国社会科学院考古研究所「武功發掘報告——澇西莊與趙家來遺址」文物出版社、一九八八年。
- 14 康樂「武功泉出土商周青銅器」『文博』一九八六年一期。
- 15 扶風縣博物館「扶風北呂周人墓地發掘簡報」『文物』一九八四年七期。
- 16 考古研究所渭水調查發掘隊「陝西渭水流域調查簡報」『考古』一九五九年二期、函版一一二。
- 17 註11報告。
- 18 註13報告。
- 19 本稿の土器群AのIII2と豊鎬遺跡の編年で設定された西周Iaは時間的に同時であるが、同じ概念ではない。西周Iaは西周土器形成の第一段階の土器であり、その内容は土器群Aの流れを主体とするが、他の系統をも含み、土器群Aとは別の動向を示す。
- 20 甘肅省博物館文物隊・靈台縣文化館「甘肅靈台縣兩周墓葬」『考古』一九七六年一期。墓M1からA類鬲(西周Ia)、M2から折肩罐、M5からA類鬲、折肩罐(西周II前後)が出土している。M1には西周Ia相当の銅鼎、銅簋、銅戈が相伴する。
- 21 淳化縣文化館「陝西淳化史家塬出土西周大鼎」『考古與文物』一九八〇年二期。
- 22 葛今「涇陽高家堡早周墓葬發掘記」『文物』一九七二年七期。
- 23 註13報告、一五四頁。

24 蘇秉琦「西安付近古文化遺存的類型和分布」(蘇秉琦考古學論述選集)文物出版社、一九八四年所収)、図三一三。一九五一年の発見とおもわれるこの鬲は、当時、客省莊第二期文化の認識のない時代に、蘇秉琦氏により今の客省莊第二期文化に属する土器群(「文化二」と呼んだ)の一資料として紹介されている。鬲の形態は、客省莊第二期文化とやや距離があるようにも見えるが、口頸部に籃紋が施されており、客省莊第二期文化の範疇に属すると言える。

25 前掲武者章「先周青銅器試探」。

#### 四 B類鬲を主体とする土器群(土器群B)の変遷

B類鬲は、主として西周以前の関中地方で、ある特定の組成をもった土器の伝統を構成した一器種であった。この土器の伝統を土器群Bと呼ぶ。

蘇秉琦氏による宝鶏鬲鬲台遺跡の調査と研究ののち、一九五〇年代に始まる豊鎬遺跡など標準的な西周遺跡の発掘を通じて、本稿にいうB類鬲(高領袋足鬲)は殷末周初前後の遺跡にもなうことはあるものの、基本的に西周期に下がない土器であると考えられ、これを西周王朝以前、客省莊第二期文化以降の関中地方における指標的土器形式とする認識が一般的になった。その後、鬲鬲台のB類鬲を再検討した鄒衡氏は、西周以前と考えられるB類鬲をさらに型的に段階設定する考えを示し、併せて共伴遺物の検討から鬲鬲台のB類鬲の年代を殷墟Ⅲから殷末周初の間にあることを明らかにしたのである。<sup>①</sup>鄒衡氏の研究以後、B類鬲多数を出土した扶風県劉家遺跡の発掘が行われ、その結果、鬲鬲台遺跡以外で初めてのまとまったB類鬲の発掘資料が得られた。<sup>②</sup>劉家遺跡の報告は、同遺跡の墓を副葬土

器の様相から6期（すべてにB類鬲がともなう）に細分し、その継続年代を「二里頭晩期」から「文武の際」と推測したが、その分期には層位的根拠はともなっていないかった。盧運成氏は、劉家遺跡の継続時間は報告が推定するように長くはないと考え、劉家遺跡の主要な内容を占める報告の二期から五期の墓を一つの時期にまとめ、遺跡全体を3期に捉え直す考えを提唱した<sup>3</sup>。盧氏は加えて、宝鷄市近郊で出土した採集資料の中に、その形態からみて劉家、鬪鷄台のそれより年代の遡るB類鬲の一群（氏は石嘴頭晃峪類型と呼ぶ）があることを述べ、B類鬲の変遷として、石嘴頭晃峪類型↓劉家類型↓鬪鷄台類型の3段階を考えた。これとは別に、飯島武次氏は、豊鎬地区で新たに発見されたB類鬲に共伴する青銅器や、その他の遺跡で知られるB類鬲関連の<sup>14</sup>C年代値から、劉家遺跡の三、四、五期のB類鬲を、殷墟III、IV期に並行すると推定した<sup>4</sup>。それは結果的に劉家報告の想定する劉家遺跡の継続年代を大幅に狭める認識につながった。

その後、宝鷄市考古隊の張天恩氏は宝鷄市近郊で近年出土したB類鬲の多数の資料を詳細に分析し、新たに発掘された宝鷄紙坊頭遺跡の層位的関係を考慮しつつ、B類鬲全体を5期に細分する提案をした<sup>5</sup>。その結果は、基本的には盧氏の編年観に沿ったものと言えるが、盧氏のそれを型式学的に深め、かつ一部なりともB類鬲の変遷観にはじめて層位的根拠を与えるものとなった。

張氏の研究は従来になく豊富な資料の観察に基づく慎重な研究であり、本稿のB類鬲分類の一つの土台にもなっている。しかし、筆者は張氏の設定する時期のうち第五期とするものが、さらに細分される可能性があることと、氏の五期より以降、西周期に入ってもなお継続するB類鬲の系譜が存在することを指摘する必要があると考える。また、資料的におお空白の多い、氏の設定する第一期から第四期の間を、より柔軟で大きな幅でまとめ直すことが現状に適

合しているとも考える。

本節では、利用可能な資料がなお十分な量を得ていないにもかかわらず、B類鬲に対して比較的細微な形式・型式分類を行なう。これはあくまで今後増加する資料による分類の厳密化を期待したものである。一方、形式・型式の組列から設定される変遷の段階については、むしろ比較的緩やかな枠組みを指すことにする。また、有耳罐などB類鬲以外の土器にも言及して、本稿で土器群Bと呼ぶ内容の全体的な様相を明らかにし、さらにその内部にある地域的グループの存在を示し、それらの編年的枠組と周囲の他の文化、他の土器群との系譜的關係についても問題点を指摘する。

(1) 土器群Bを出土した主な遺跡

B類鬲を主体とする土器群Bは、後述するように、金河・晁峪グループ、劉家グループ、碾子坡グループの三つの顕著な地域的グループと若干の小グループに分けられる。以下にまず、グループ別にその主要な遺跡の層位状況と、土器の組成、遺跡別の年代の手がかりなどについて検討する。

(A) 金河・晁峪グループ

宝鶏市周辺に、土器群Bの中でも土器の器種組成に一致性が見られる地域的グループが存在する。これを金河・晁峪グループと呼ぶ。このグループの遺跡は宝鶏市周辺の渭河ないしその支流の河岸の台地や傾斜地に分布する。正式な発掘を経た遺跡はなく、表採ないし現地で購入された土器が大半であるため、土器の全体的組成は依然明確ではなく、また土器を出土した遺構の性格も多くは不明である。しかし、しばしば入手された土器の残存状態が良好なこと

から、知られる土器の多くが墓の副葬土器と考えられる。その器種の構成は、B類鬲のほか、各種の有耳罐がともなうことに特色がある。

このグループの土器は、金河遺跡に代表される早い段階と、晁峪遺跡に代表される遅い段階がある。この大まかな早晚の認識は、後述する碾子坡遺跡の層位との対照によっても容易に証明される。

1. 金河遺跡に代表される早い段階

●宝鶏金河<sup>6)</sup>

一九七二年、宝鶏市街の北約5kmの渭河支流金陵河西岸の金河付近で出土し、宝鶏市博物館に収蔵されている土器として、B類鬲2、双耳罐(丸底)1、单耳罐(丸底)1、腹耳罐(丸底)1(図8-5、図9-1-3)が紹介されている。遺構は不明であるが、収蔵されている土器が完形器に近く、このような場合他の遺跡での傾向からみて、いずれも墓の副葬土器である可能性が高い。土器はおおむね紅褐色を呈し、器面の色調にむらが見られる。

●宝鶏石嘴頭I<sup>7)</sup>

宝鶏市南部の渭河南岸にある石嘴頭遺跡で、一九八二年に入手された鬲1点を含め、B類鬲5点が紹介されている。うち4点は金河出土の鬲と近い特徴をもつもので(図8-6)、ほぼ同時期とみられ(石嘴頭I)、他の1点は、かなり時期の下がる(石嘴頭II。後述)鬲である。遺構は確認されていないが、金河と同じ理由で多くが墓からの出土土器である可能性が高い。

●甘肅平涼翟家溝<sup>8)</sup>

一九五二年に、双耳のB類鬲1、单耳罐(丸底)1が発見された。同一墓の一括遺物と考えられている。いずれも

紅褐色の土器で、縄紋を帯びている。器形は、金河、石嘴頭Ⅰに近い。

●その他の金河遺跡に近いB類鬲を出土した遺跡

《宝鶏姪家店》<sup>9</sup>、《郟県》<sup>10</sup>では、金河、石嘴頭Ⅰと劉家（後述）の鬲の中間的な形態のB類鬲が出土している。その他、図、写真は公表されていないが、張天恩氏の記述から知られる金河の鬲に比較的近いB類鬲の出土地点として、《宝鶏興隆》、《涼泉》、《鬪鷄台Ⅰ》、《鳳翔范家寨》、《武功鄭家坡H35》、《武功岸底》などがある<sup>11</sup>。このうち鬪鷄台Ⅰの鬲（鬪鷄台標本1）は、双耳罐（丸底）と共存していると言われ、器種の構成としても金河や平涼翟家溝のそれに近い<sup>12</sup>。

## 2. 晁峪遺跡に代表される遅い段階

●宝鶏晁峪遺跡<sup>13</sup>

宝鶏市街の西20 km、渭河南側3 kmの黒水河の台地上に位置する。張天恩氏は墓地遺跡として紹介している<sup>14</sup>。一九八二年に晁峪文化站が入手したものをはじめ、公表されている土器は、B類鬲5、双耳罐（平底）2、單耳罐（平底）2、腹耳罐（平底）1の4器種である（図8—39・46・47・54、図9—14・17）。B類鬲、有耳罐の形態は、金河遺跡に代表されるそれより明らかに遅い一群のものである。晁峪遺跡は宝鶏市の西方にあり、既知の土器群B発見地点の中で最も西によった地点の一つである。この位置的理由によると考えられる二面の特徴が晁峪の土器に読み取れる、①（後述するように）この遺跡が西周Ⅰ前後に下がる年代をもつとすると、この少し前の時期から宝鶏周辺に東方より土器群Aが波及し、この地域の大部分で土器群A、B共存遺跡が形成されていた中で、宝鶏西部のこの地区では、なお顕著に金河・晁峪グループの早い段階以来の土器群Bの組成を保持していた。②同遺跡には、この遺跡のさらに西

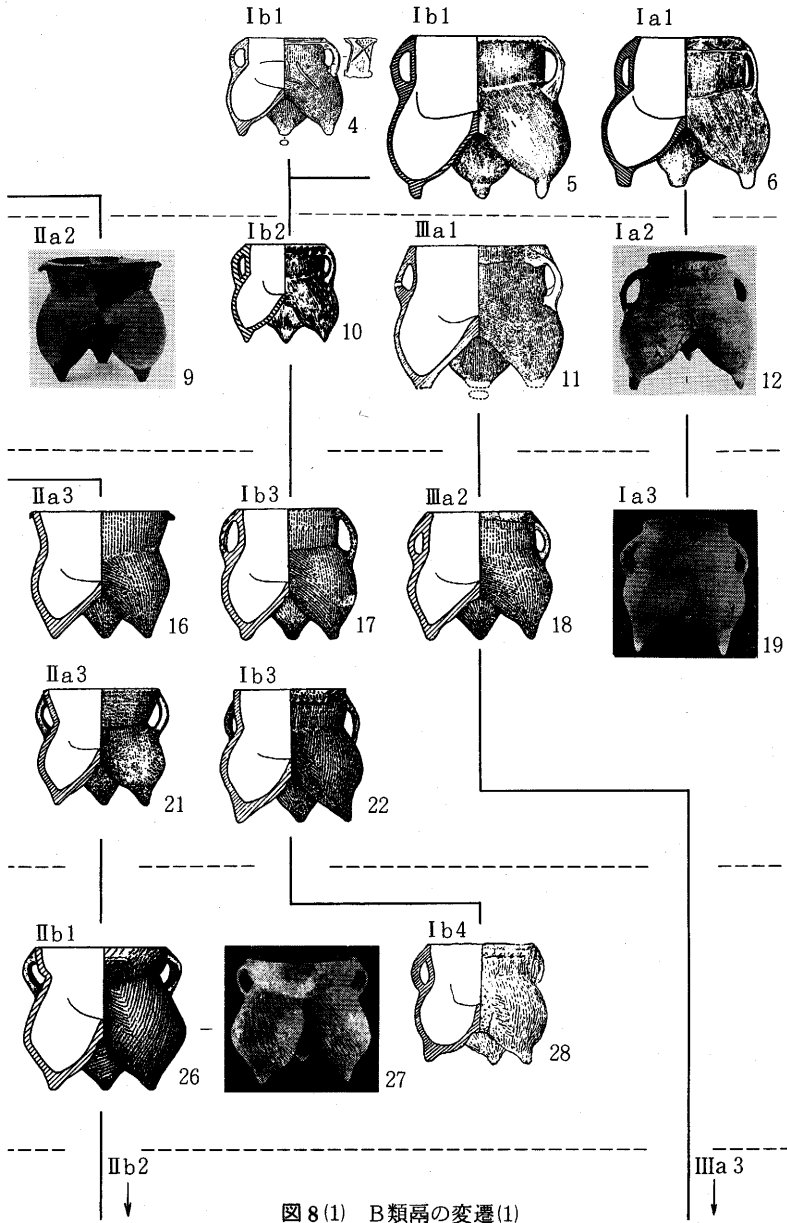
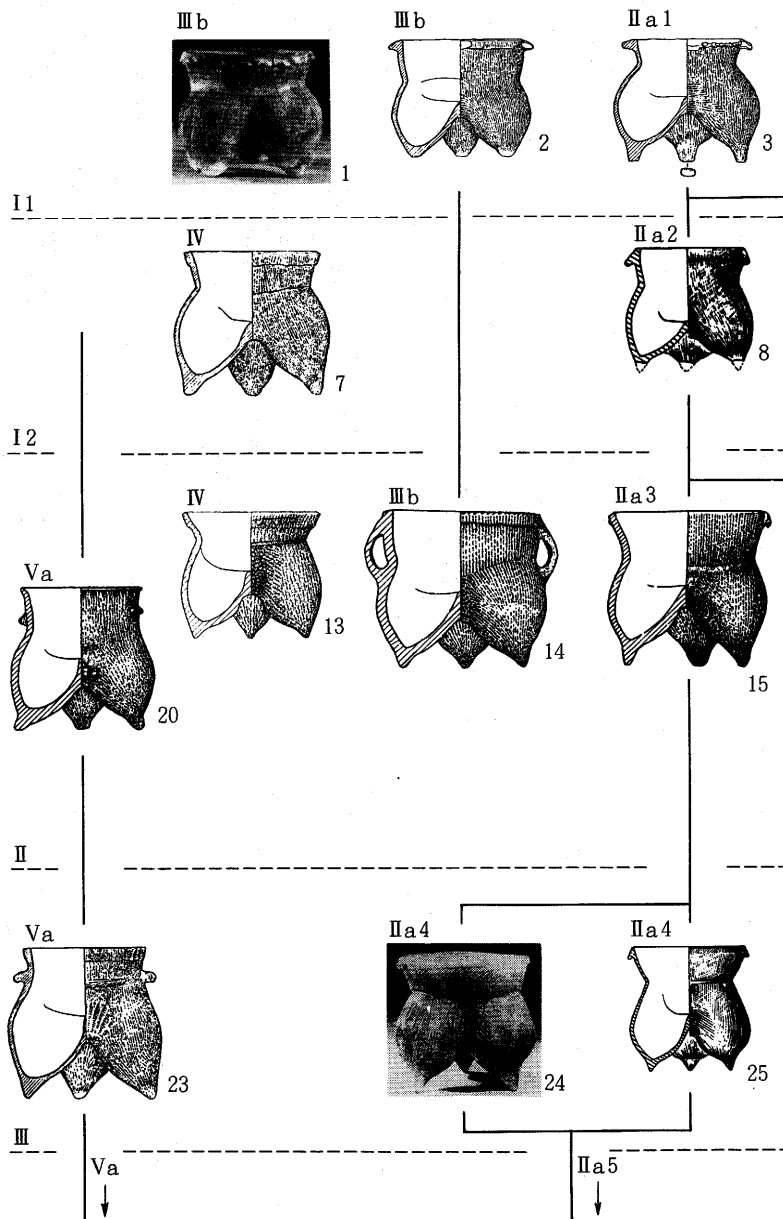
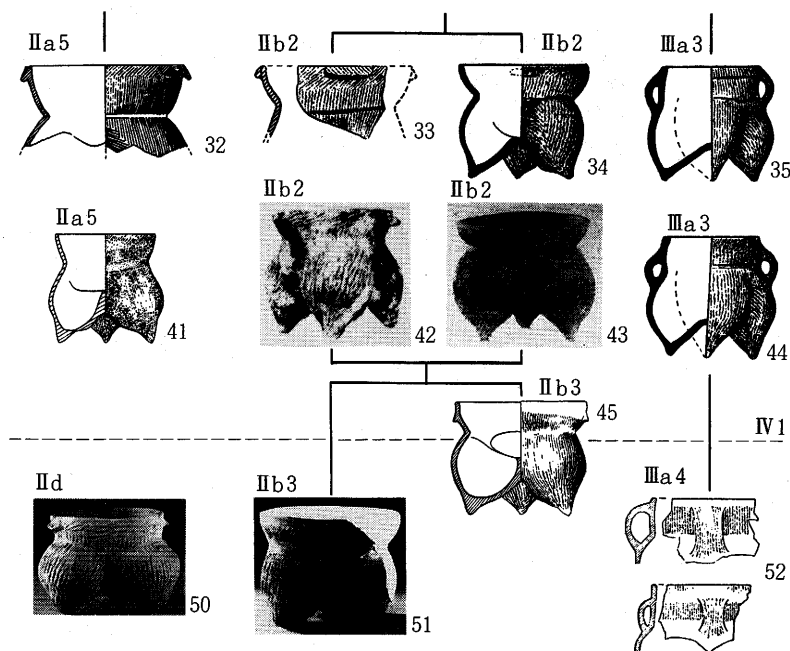


図 8(1) B類鬲の変遷(1)



西周式土器成立の背景(上)





1-4, 7, 9, 11, 23, 50, 55.

碾子坡 (H106, M660, M670, M662, H134, H151, H134, M109, M184, M1181)

5. 金河  
6. 石嘴頭  
8. 北馬坊

10. 鄜県  
12. 姬家店  
13. 鄭家坡H 14

14-22, 26, 27, 30.

劉家 (M 7, M11, M37, M37, M37, M7, M3, M4, M8, M27, M27, M49)

24. 83客M 1  
25. 紙坊頭4 B

28, 29, 38.

西村 (80M87, 80M148, 79M69)

31. 崇信M 6  
32. 旭光

33. 馬王村H 11

34-37, 43, 44, 53.

賀家村 (小墓、小墓、M23、小墓、M7、小墓、M11)

39, 46, 47, 54.

晁峪

40. 83澧毛M 1

41. 宝鷄市博物館949・ICI・130

42, 56. 鬪鷄台 (K 4, 15)

45. 67張89

48, 49, 51.

黃家河 (H3, H3, 表採)

52. 茹家莊H 2

IV 2

西周式土器成立の背景 (上)

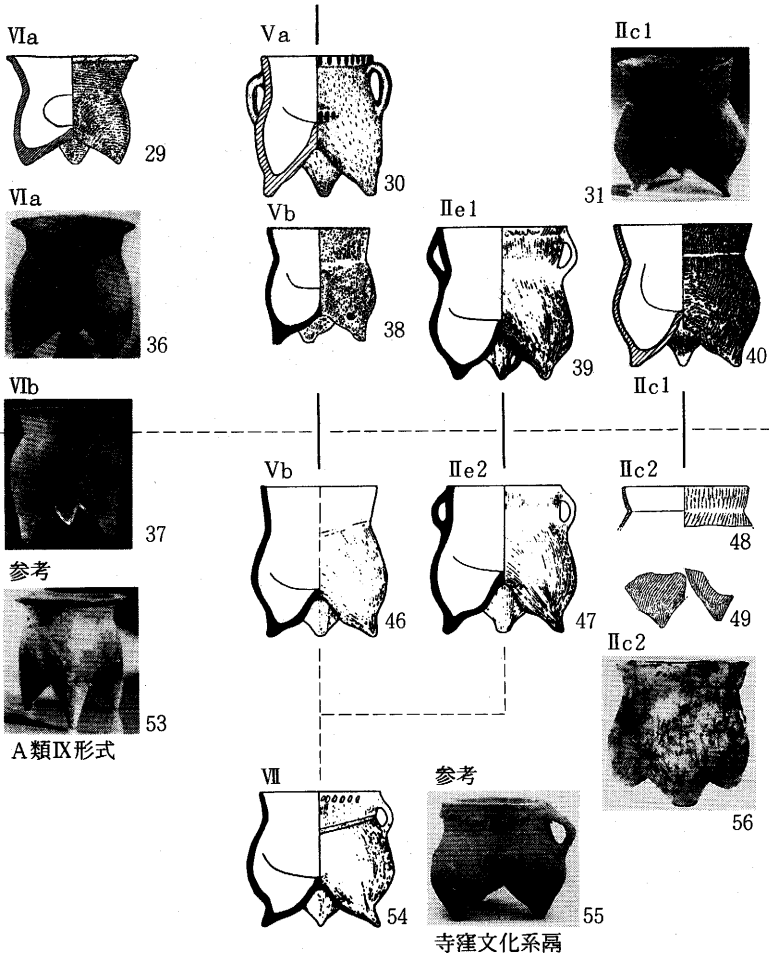
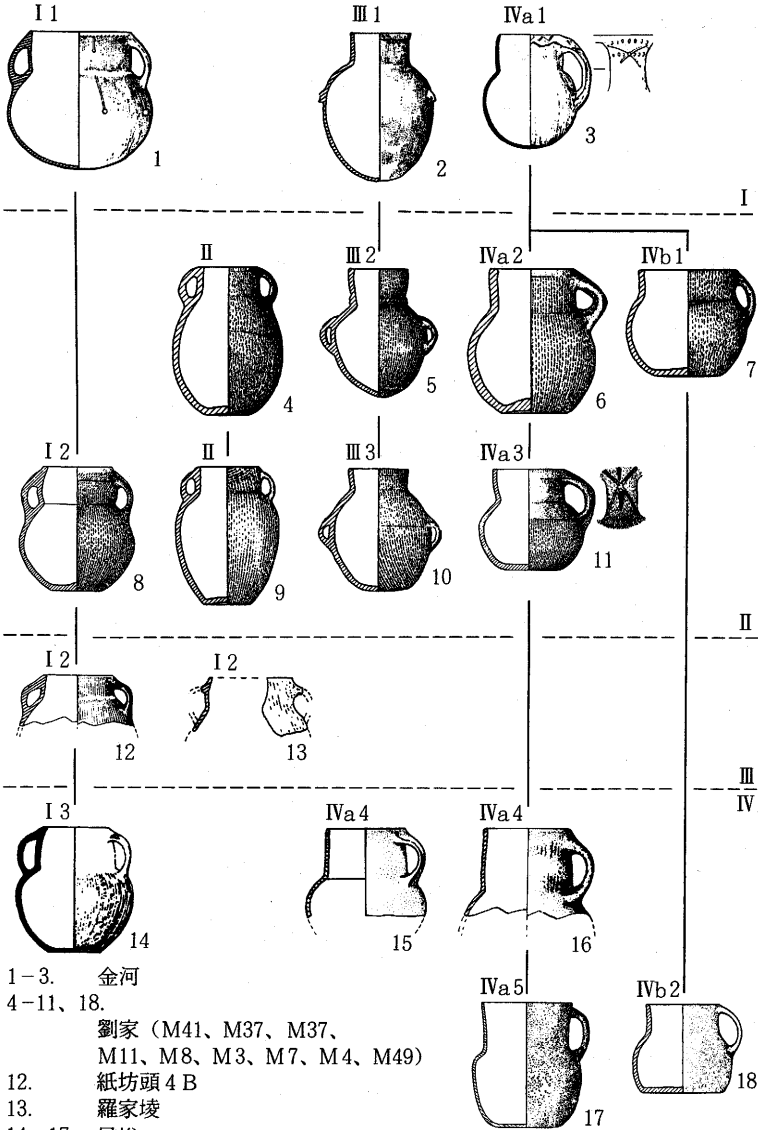


図8(2) B類隔の変遷(2) (5、11、17、21、22、25、26、



- 1-3. 金河  
 4-11, 18. 劉家 (M41, M37, M37, M11, M8, M3, M7, M4, M49)  
 12. 紙坊頭 4 B  
 13. 羅家埭  
 14, 17. 晁峪  
 15, 16. 紙坊頭 4 A

圖 9 有耳罐の変遷 [ 3、6、7、8、13、15-18は 1/8、1、2、4、9、  
 11、12は 1/12、5、10は 1/16、14は不詳 ]

方に展開した甘肅東部の寺窪文化の影響が見られる。すなわち、B類鬲中の単耳の鬲(図8-54)は寺窪文化に盛行する単耳の鬲(図8-55を参照)と関係することは疑いなく、また、器面の縄紋を擦り消し処理した単耳罐は、やはり寺窪文化の土器と関係する。<sup>16)</sup>

●その他の遺跡

晁峪に近い宝鶏市西部の2遺跡が知られる。《宝鶏林家村墓》<sup>17)</sup>1墓出土の土器と青銅器が発見された。B類鬲2、罐2、青銅簋1、青銅鼎1がある。共伴した青銅簋は方座がつくタイプで、青銅鼎とともに西周Ia頃の例とみることができる。《宝鶏羅家塚》<sup>18)</sup>B類鬲、双耳罐が知られる。《石嘴頭II》石嘴頭Iのそれとは形態が大きく相違する林家村の例に近いB類鬲1点が知られる。

(B) 劉家グループ

ここではグループと称するが、劉家遺跡以外に確実に知られた遺跡はなく、地域的グループとして捉えられるかどうかは、今後の調査に待つべきものである。しかし、劉家遺跡の土器の様相や、墓の性格は、金河・晁峪グループや、後述の碾子坡グループと比較して時期差としては解釈できない顕著な特色を示している。器種の構成は、B類鬲と、各種の有耳罐の他、折肩罐や、外来的に少数の土器群Aの土器も含まれる。

●扶風劉家遺跡<sup>19)</sup>

【遺跡】

劉家遺跡は、扶風県と岐山県の境界地帯に広がるいわゆる周原遺跡の範囲内にあり、周原遺跡を東西に二分する齊家溝(劉家溝)の東側(扶風県側)台地の縁辺に所在する墓地遺跡である。劉家遺跡の第3層は西周後期の遺物包含

層とされ、西周中期、前期の墓と、報告者の言う「姜戎」墓は、いずれもこの第3層の下面から確認されている。報告者が「姜戎」墓と呼ぶ、内容的に西周墓とは明確に分離される一群の特徴的な墓が土器群Bを出土した墓である。以下、劉家遺跡とはいわゆる「姜戎」墓をさす。

土器群Bをともなう墓は20基発掘されているが、稠密な分布を示しながらも相互に切り合い関係はない。そのことが、比較的短時間のうちに形成された墓地であることを示唆するかもしれない。ただし、西周中期墓(M42)が土器群BのM40を、また西周前期墓(出土した甔は西周I相当)が土器群BのM7の上に重なる層位関係が見られる。このことから、土器群Bをともなう墓は、基本的に西周前期より遡ると推定される。

#### 【分期と土器】

報告者は、伴出した土器の形態から20基の墓を6期に細分し、その年代を「二里頭文化晩期」から西周直前の「文武の際」までの長期の幅で捉える。しかし、報告者の編年にはいくつかの問題点がある、①報告の第一期(M3のみ)の土器は、報告者が言うように劉家遺跡全体の中でやや異質な面がある。しかしそれを齊家文化や二里頭の土器と比較したのはやや飛躍で、出土した2点の甔(図8-20)は、むしろ口縁外面と、胴部と襠部のそれぞれに波状の貼付紋突起を付している点などは、後述の碾子坡IIの1点(図8-23)と類似しており、さらに劉家遺跡中のM49(図8-30)(報告者が第六期とする墓。これも異質な墓で、年代は西周式に近い罐が複数ともなうことから西周Iに下がる)にも類似点がある。M3を突出して古く考えることには疑問があり、土器の異質性は、劉家遺跡最晩期のM49とともに時期の差によるのではなく、外来的な要素に原因があると考えられる。②第二期はM27のみで、やはり大半の劉家のB類甔とは異なる形式の甔1を伴出する。しかしその甔(図8-26・27)の異質な特徴は、碾子坡IIなど

他の遺跡出土のB類鬲の遅い段階に類似例を見ることができ、むしろ劉家の鬲の中でも遅い段階に属することを示す。③報告者は一期から五期までのB類鬲の足尖の変化を、円錐状↓偏平気味という流れで説明するが、これは後述する紙坊頭4B↓4A層の關係からみて、むしろ逆に流れたことが知られている。第二期と第三〜五期の先後の逆転はこの点でも確かである。④報告の第三〜五期の間、同一の墓に一括出土する土器相互間の形態差が顕著である。例えば図8-16〜18は同じM37出土の鬲である。これは「形式」の異なるB類鬲が同時に並行していた現象であり、このような形式の差は時期の違いを反映するとは言えない。後述するようにB類鬲全体の流れを見たとき、時間差をよく反映する属性は足尖と口縁端部外面の処理であるが、これらの点で、第三期〜五期のB類鬲は相互にむしろ類似性が高く、比較的短い時間内の一群の土器であると結論できる。

以上のことから、本稿では報告の三、四、五期を時間差の少ない一時期の土器として捉え、これを劉家Iとする<sup>(20)</sup>。劉家遺跡の大部分の墓がここに入る。そして報告第二期のM27は、前記した理由からむしろこれにやや遅れる時期とみなされ、これを劉家IIとする。報告の一期のM3は、この劉家のIないしIIの時期に並行する可能性が高いと考え、今は保留にしたい。さらに報告第六期のM49を、劉家IIIとする。劉家I、II、IIIの設定に層位的根拠はないが、土器相の不連続な変化は明らかである。

劉家I 原報告者の第三、四、五期の15基の墓がこの時期のものである。器種としてはB類鬲、双耳罐(平底)、单耳罐(平底)、腹耳罐(丸底、平底)、折肩罐などがある。土器は灰褐色ないし灰色を呈し、器面にしばしば褐色の焼成のむらが生じている。折肩罐の多くは土器群Aのものに比べてやや長胴で、肩部がやや丸く盛り上がる感じがあり、また肩部以下は縄紋であるが胴上部に数条の平行沈線紋をめぐらせる特徴がある。これは後述の碾子坡遺跡の折

肩罐にも通じる特徴であり、前節に述べた土器群Aに盛行する折肩罐とは相違し、土器群Bに特徴的な折肩罐（図10）である。

劉家II 報告第二期のM27。B類鬲3、折肩罐6が出土している。折肩罐のうち5点は劉家Iの一般例と同様の特徴をもち、残り1点には土器群Aの折肩罐の特色が見られる。

劉家III 報告の第六期のM49。B類鬲1、単耳罐1（図9—18）、円肩罐8、小型の折肩罐2がある。円肩罐、折肩罐は明らかに土器群Aないし西周式土器の範疇に入る。単耳罐は、劉家Iのそれが縄紋を付しているのに対して、無紋で磨研されており、この特徴は寺窪文化の単耳罐に通じる。

### 【年代】

伴出したB類鬲と、有耳罐の変遷の段階については後述するが、それ以外で知られる劉家遺跡の年代観について述べておく。劉家IIIのM49から出土した円肩罐は、肩部の周回紋など西周Iaの黒色磨研罐に似る。また、小型の折肩罐の方は西周IIに近づいた例とみられる。無紋の単耳罐は、西周Iaないしその直前段階の後述の紙坊頭4Aの無紋単耳罐に近く、また宝鶏竹園溝の西周Iの墓でも類似土器が出土している<sup>21</sup>。以上から同墓の年代をおおよそ西周Ia、Ibに並行すると考える。劉家IIのM27出土の肩部に平方沈線紋をめぐらした折肩罐は、劉家Iと西周Ia前後とみられる後述の甘肅崇信于家灣M9の例（図10）の中間段階ともみなされ、年代は西周Iaの直前と見当がつく。劉家遺跡の主要な内容である劉家Iの年代に関しては、近隣の扶風益家堡遺跡の層位が重要である。鄒衡氏の紹介によれば、益家堡の下層は殷系土器の包含層で殷墟I、II相当、中層はB類鬲を主体とする土器群で、これが「劉家中期」に相当するとし、その年代は殷の祖甲期より遡らないとする<sup>22</sup>。また、上層はA類鬲主体の土器群とB類鬲主体の土器



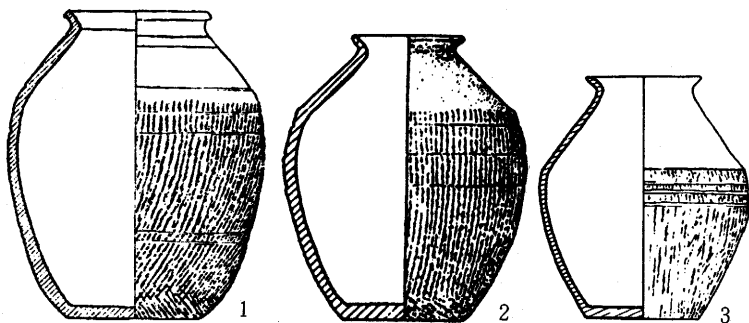


図10 土器群Bの折肩罐

1. 碾子坡H503 2. 劉家M27 3. 崇信M9  
〔1、2は1/8, 3は1/4〕

群が共存すると言う。そして、中層のB類鬲は「偏足根(足尖)」、上層は「円錐足根」という変化のあることを指摘している。益家堡の中層と上層はB類鬲の特徴などが、それぞれ劉家Iと劉家IIの内容に対応すると考えられ、したがって、劉家Iの年代は殷墟I、II以降、ほぼ殷墟III前後とみなされ、劉家IIは先述のことと併せて殷墟IV前半前後と推定できよう。

【その他】

劉家遺跡は、土器群Bの遺跡としてその墓制が知られる希少な例である。劉家遺跡の墓20基のうち墓壙形態のわかるものが16基あり、うち15基が洞室墓、1基が竪穴墓(劉家IIIのM49)であった。すなわち劉家I、II期の墓は基本的にすべて洞室墓である。また棺の周囲に礫石を置く習慣が見られ、さらに副葬された土器のほとんどが平たい礫石で蓋をしていた。

●その他の遺跡

《扶風益家堡II、III(中層、上層)<sup>23)</sup>》益家堡Iは土器群Cを主体とする単位であり、後節で述べる。遺跡は主として生活址が知られる。鄒衡氏の紹介以外に内容の正式な報告はない。同遺跡を劉家グループに入れる根拠は、劉家遺跡と距離的に近く、年代的に近いという状況的な判断による。益家堡IIは劉家I、益家堡IIIは劉家IIにほぼ相当すると考えられる。《岐山廟王村》<sup>24)</sup>

墓とおもわれる遺構からB類扁1、銅鼎1が出土。廟王村では、近年ほかにも劉家遺跡類似の遺物が出土していると伝えられる。

(C) 碾子坡グループ

碾子坡遺跡を代表として、涇河中、上流の陝西、甘肅境界地帯に分布すると考えられる。本格的な調査は碾子坡遺跡に限られ、それも簡報が出されている段階であり、土器の全体的様相は明らかではない。墓のほか、生活址の土器が知られる。墓はB類扁のみを出土し、生活址はB類扁の他、多様な器種が含まれる。金河・晁峪、劉家グループとは器種の構成に相違を示す。

●長武碾子坡遺跡<sup>(25)</sup>

【遺跡】

遺跡は涇河上流の支流黒水北岸の、長武県碾子坡に所在する。西周以前と考えられる文化層は、比較的豊富な遺物を包含する生活址と、その生活址とは扁の類似性などから同時期と考えられる墓域が、生活址北側の傾斜地に存在する。一方、生活址に重なりそれを切っている第二の墓域がある。第二の墓域はしたがって生活址やそれと同時期の第一の墓域より年代が下がると言える。第二の墓域と同時期の生活址は土砂の流出などで失われているらしい。生活址では多数の灰坑が、また第一の墓域で墓七六基、第二の墓域で墓一三〇基余が発掘されている。なお、第一の墓域のうち少なくとも例挙されている3基はすべて頭位方向が北であるのに対して、第二の墓域の報告されている5基はいずれも東である。報告者の指摘はないが、この頭位方向の傾向差は、両地点の墓域の年代差にかかわる現象とも解釈される。以上の遺跡と同地点に一部重なって、西周期に下がる灰坑と墓が多く発見されている。墓の多くは出土遺物

より西周前期に属するとされる。一部公表されている西周墓出土の土器 (M 107) は、筆者の西周 I a のものを含む。<sup>(26)</sup>  
【分期と土器】

碾子坡遺跡の生活址と、同時期の第一の墓域を碾子坡 I、第二の墓域を碾子坡 II とする。

碾子坡 I (生活址) 器種は、B 類鬲、弧裆鬲、甗、甗、豆、罐、甗、甗、盆、尊、瓮、器蓋などが知られる (二二三頁、図 15 参照)。鬲は B 類鬲が大半で (図 8-1・7・9・11)、色調はほとんどが紅褐色の傾向を示し、いわゆる灰陶はない。簡報にいう弧裆鬲は、A 類鬲の一種とも考えられるがやや特殊で、ごく少数出土している。簡報に紹介された 2 点はいずれも器高が 1 一から 2 一 cm と、生活址出土の鬲としては B 類鬲や、漆水河流域の A 類鬲に比べていかにも小型である。外観上これらの鬲は A 類鬲にも近いが、A 類鬲の影響を受けたものであったとしても、これらの鬲が碾子坡遺跡ではあくまで少数の客体的な土器であることを強調しておく。

簡報に、小口罐と称される土器は、<sup>(27)</sup> 肩部と胴部が明確な稜線をなして折れずにくらか丸みを帯び、かつ肩部の下部と胴部の上部に、数本の平行沈線紋がめぐると特徴は、劉家遺跡出土の折肩罐にも見られた特徴で、土器群 B に特徴的な折肩罐 (図 10) である。罐、盆などの一部に底が内側に凹になった (上げ底) 例が含まれる。これまた劉家の土器にも見られる特徴である。

盆、簋、瓮、甗、尊、器蓋など生活址の土器の中には、土器群 C の要素、すなわち殷系土器の要素が含まれている。碾子坡生活址の土器のこの重要な側面については後に詳述する。

碾子坡 I (墓) M 660、670、662。採集品 01、02。副葬品は各墓とも陶鬲 1 点に限られ、すべて B 類鬲である (図 8-2、3、4)。碾子坡 I の墓出土の鬲はおおむね生活址出土の B 類鬲と類似した形態的特徴を示す。ただし、鬲の大

きさは、生活址出土の例が器高二・五〜一五 cm であるのに対し、墓の鬲は器高一三・五〜一一 cm とやや小振りである。色調は紅褐色の傾向がある。鬲は生活址の鬲とともに、金河・晁峪グループの早い段階に近く、一方のちの検討から判明するように、劉家遺跡のそれよりやや古い段階にあると推定される。

碾子坡 II (墓) M 171、109、1181、163、184。副葬品はいずれも鬲 I のみで、すべて B 類鬲である (図 8-23、50)。このうち M 109 の 1 点は、口縁外部面に波状の貼付紋をめぐらし、口頸部正面と襜上部に波状の突起を付す特徴が、寺窪文化系の鬲と一定の関係を示唆する。これら鬲は、金河・晁峪グループの遅い段階と時期的に重なると考えられる。

碾子坡 I との間に器形上、属性上多くの差が生じている。碾子坡 I と II の間に、劉家 I、II の段階に相当する空白の時期がある。同遺跡の形成が不連続であるのかどうかは今後の調査に待たなければならない。いずれにしても、碾子坡 I ↓ II 間の B 類鬲の変化の方向は、B 類鬲の変遷を考える上で基本的認識となる。

#### ●その他の遺跡

《長武下孟村》<sup>28</sup> 多くは生活址の土器と推定できる。器種の確認される土器片は、B 類鬲、折肩罐、盆、簋などである。B 類鬲は碾子坡 II の段階に近い。伴出した折肩罐は土器群 A の要素である。盆の胴上部に、平行沈線紋を数条施す例が多いが、このような盆は碾子坡グループの土器の特徴と考えられる。《彬県龍高鎮土陵》<sup>29</sup> B 類鬲 2、円肩罐 1 が知られる。鬲は碾子坡 II に近い。《甘肅崇信于家灣》<sup>30</sup> 涇河上流、碾子坡から七〇 km ばかり西の甘肅境内に位置する墓地遺跡。副葬土器は A 類鬲、B 類鬲、折肩罐である。A 類鬲は西周 Ia の A 類鬲に近い特徴をもつ。B 類鬲も遺跡の状況から同じ時期と考えられる。折肩罐 1 (M 9) (図 10) は、碾子坡生活址、劉家遺跡の折肩罐に通じる土器群

Bの特徴である。この折肩罐に西周I aの典型的な青銅器である方格乳釘紋簋、方格乳釘紋鼎が共伴している。《彬  
県史家河》<sup>21</sup>細身の尖足状の袋足をもつB類鬲が出土している。碾子坡IIのM155のそれに近い。《麟游北馬坊》<sup>22</sup>出土  
したB類鬲は、碾子坡IのB類鬲と、器形、口縁外面の凸帯、鶏冠耳などの特徴が類似する。

(D) 茹家荘グループ

宝鶏市街南郊の遺跡で、B類鬲に四川系の土器が共存し、かつ寺窪文化系の土器が隣接地点で出土する状況がある。  
この土器群Bを茹家荘グループとする。

●宝鶏茹家荘生活址<sup>23</sup>

宝鶏市の南、清姜河東岸の傾斜地に、竹園溝、茹家荘両地点の西周前期の強国の墓地とされる遺跡、および蒙峪溝  
の寺窪文化の墓地遺跡が隣接する。この付近の茹家荘西北で、一九八一年灰坑3基が発掘された。3基の灰坑(H1  
〜3)の土器の組成はほぼ同じで、年代は近い。器種は、B類鬲、平底円腹罐、尖底罐、鉢形尖底器の4種にほぼ限  
られる。B類鬲は、金河・晁峪グループの遅い段階に近い。

年代の近さと土器の共通性から、茹家荘の灰坑は、茹家荘、竹園溝墓群に関連する生活址と考えられる。B類鬲は  
これら墓群に見られないが、平底円腹罐、尖底罐、鉢形尖底土器は墓群中にも出土する。尖底土器(図11)は、茹家  
荘、竹園溝の発掘報告者も詳しく述べているように<sup>24</sup>、四川省成都周辺の殷、周時期の土器と確実に同系統の土器であ  
る。この系統の土器がはつきりと確認できる遺跡は、関中地方では宝鶏市南郊のこの竹園溝、茹家荘の両墓群と、茹  
家荘の灰坑に限られる。茹家荘生活址と隣接するもう一つの墓群である蒙峪溝の様相は、竹園溝、茹家荘の墓群とは  
まったく異なる。土器の主体は双耳罐と、帯状に肥厚した口縁をもつ壺形の罐で、これらは明らかに甘肅東部の寺窪

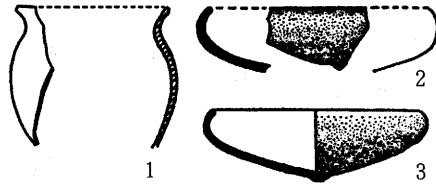


図 11 茹家荘生活址出土の四川系土器

1、2、H 1 3、H 2 (1は1/3、2、3は1/4)

文化系統の土器である。寺窪系の土器は、竹園溝墓群の1号墓にも含まれるが、竹園溝、茹家荘墓群では顕著ではない。蒙峪溝は竹園溝、茹家荘より年代的にやや早いという意見もあるが、一部は重なることが考えられる。

(E) 土器群A、B共存遺跡

土器群AはそのIII期前後に、漆水河流域ないしその近傍からまず関中西部に、そしてやがて関中地方全域に急速に拡散する。この過程で、土器群Bを主体とする遺跡が分布していた広い地域に土器群Aが入り込み、多くの遺跡で、土器群A、B共存遺跡を形成する。宝鶏近郊で特に発見例の多いこのような遺跡は、土器群Bの中でもともとこの地域に分布していた金河・晁峪グループの多くの部分が、土器群Aとの共存的な遺跡に変化したことを意味する。鬪鷄台I↓鬪鷄台IIの変化がその典型例である。ただし、土器群Aが宝鶏周辺に浸潤した時期に、宝鶏の西部にあつてその影響を直接受けず、比較的純粹に金河・晁峪グループの流れを保持したものが、先述した晁峪遺跡に代表される金河・晁峪グループの遅い段階のものと理解される。

A、B共存遺跡では、むしろ外来的であるべき土器群Aの要素が主要な位置を占めている場合が多く、土器群Bは、ただB類属の系譜を残すだけという状況が見られる。一般に土器群Bの自立的な組成は土器群Aの浸潤後、短時間に失われていくようである。

●宝鶏紙坊頭遺跡<sup>35)</sup>

宝鶏市市街地の西部、渭河との合流点に近い玉潤河の東岸に所在する。一九八五年に同遺跡範囲の東縁部で、三五

m<sup>2</sup>の小規模な試掘が行われ、先周時期の文化層が確認された。5層に分層され、第3層は西周期、第4層は先周時期の包含層である。4層はまた、下層の4B層と、上層の4A層に分層された。4A層と4B層は、土器群Bに土器群Aの要素が加わった共存的な土器組成を示すが、この4A、4B両層の間で器種の構成と、B類鬲の形態に一定の変化があり、特にB類鬲の変遷を考える上で貴重な材料を提供している。

紙坊頭Ⅰ 紙坊頭4B層。B類鬲、双耳罐、单耳罐（丸底）、甗（袋足）、盆、折肩罐などが知られる。B類鬲の形態は、44点発見された袋足足尖のうち、10点は偏平な円錐状、その他は円錐状であった。折肩罐、盆は土器群Aに属する土器である。ただし、この層にはA類鬲がまったく見られない。

紙坊頭Ⅱ 紙坊頭4A層。B類鬲、A類鬲、单耳罐、折肩罐、円肩罐、尊、盆（報告の孟）、鉢など。鬲片三五〇片のうち、B類鬲三三〇片、A類鬲二〇片であった。B類鬲の足尖三一点は、すべて円錐状であった。<sup>36</sup> 罐に、土器群Aの特徴である重菱紋、重菱乳釘紋、方格紋等の印紋が見られる。紙坊頭Ⅰより土器群Aの要素が大幅に増大していることがうかがわれる。報告者の張天恩氏は、紙坊頭ⅠとⅡの間におけるB類鬲の足尖の偏平円錐状→円錐状という変化に大きな注意を向けている。この変化は、B類鬲の変遷上重要な意義をもつ。

紙坊頭Ⅲ 紙坊頭第3層出土の土器。鬲、甗、罐が出土している。紹介されている鬲はいずれも西周式土器に入るA類鬲で、B類鬲はない。

紙坊頭Ⅱは、共存する土器群Aの要素のうち、印紋の種類、あるいは屈曲口縁の盆や尊の存在など、いずれも土器群AのⅢ2（西周Ⅰa相当）前後に相当する。一方、紙坊頭Ⅰは、折肩罐と丸く張りのある胴部をもつ盆の形態が、土器群AのⅢ1前後に相当する。

●宝鷄鬪鷄台遺跡<sup>37</sup>

【遺跡】

宝鷄市東郊、渭河北岸に高台のように広がるいわゆる「原」の南端の傾斜地に所在する。一九三三、三四、三七年の三次にわたって北平研究院の手で発掘された。主たる発掘対象となった墓群は、「原」を南北に切る載家溝の東側（溝東区）で発見された。発掘された遺構は、墓に限られる。発掘は、ほぼ載家溝に沿うように南北一五〇mばかりの範囲にA坑からN坑まで9坑のトレンチを入れて進められた。墓の切り合いなど、層位的な証拠は得られていないが、大部分の墓を含む墓墳分布図が知られており、時期の近い墓は墓域内でも比較的集中するであろうという一般的予想が立てられる。

同遺跡は一九八三年にも発掘され、B類鬲5点が出土している。報告はないが、張天恩氏の説明では、B類鬲のうち1点は従来知られる鬪鷄台遺跡の他の土器とは明らかに時期の連続しない、古い段階のもので、先述の金河・晁峪グループの早い段階の土器に属するようである。<sup>38</sup>これを鬪鷄台I（先述）とする。

【分期と土器】

報告者の蘇秉琦氏は、鬪鷄台遺跡の墓を瓦鬲墓時期、屈肢葬墓時期、洞室墓時期の三期に大別し、瓦鬲墓時期についてはこれをさらに初期、中期、晩期に三分する。西周時期、西周前期に当たるのはこの蘇氏の瓦鬲墓初期、中期である。初期は、B類鬲（蘇氏の錐形脚袋足鬲）を副葬した墓がこれに相当し、青銅器がともなわないことから時期が早いとされた。中期はA類鬲（蘇氏の折足鬲）を副葬した墓で、鬲の形態からさらに一、二期に二分された。鄒衡氏の研究以来、蘇氏の編年案に求められた最も重要な変更点は、A類鬲がすべてB類鬲より遅いものではなく、



A類鬲のうち早い段階のものはB類鬲の時期に並行しているということである。これは、鄭家坡遺跡の発掘などを通じてA類鬲の開始年代が上がるということが知られてさらに確かなものになってきた。A類鬲とB類鬲の直接の同伴関係が1例もないことに編年の難しさがあつたといえる。

筆者はまず、鬪鷄台のB類鬲が、先述の層位的根拠をもつ紙坊頭Ⅰ、Ⅱの段階に対応して、前後2段階に区分されたが、蘇氏の初期墓が2段階に分けられると考える。一方、蘇氏の中期（特に中期一期）の中に、A類鬲の形態などから見て、前節の土器群Aの編年に照らして、初期墓の2段階に遡って並行するものが含まれていると考える。

このような鬪鷄台の最初の2段階は、それ自体に層位的根拠はなく、また内容的に断絶のある2段階でもないが、紙坊頭の層位などを参照して、便宜的に鬪鷄台遺跡内の分期単位として鬪鷄台Ⅱ、Ⅲを考える。その他の蘇氏の中期墓は、西周期の土器そのものをもなっており、西周期の土器編年に対応させて、鬪鷄台Ⅳ（西周Ⅰb前後）、Ⅴ（西周Ⅱ）、Ⅵ（西周Ⅲ）と分期することができる。

鬪鷄台Ⅰ 金河・晁峪グループの早い段階。前出。

鬪鷄台Ⅱ ①B類鬲を出土した墓（N4、N5、N7）、およびK坑採集のB類鬲1点。これらの副葬土器は、B類鬲、折肩罐、円肩罐である。B類鬲は紙坊頭Ⅰに器形的に近い。折肩罐は土器群AのⅢ期のそれである。②土器群Aのみを出土した墓（C1、D3、E6、E9、F8、K1、N9）。副葬土器は、A類鬲、折肩罐、彩色有蓋折肩罐、円肩罐（黒色磨研）などである。A類鬲、折肩罐、円肩罐などは土器群AのⅢ期相当である。なお、墓E6出土の銅戈は殷墟Ⅳ相当であろう。

鬪鷄台Ⅲ ①B類鬲を出土した墓（B1、I5、K4、N11）、購入されたB類鬲1（資料4089）。器種は、B類

鬲、折肩罐（胴上部方格乳釘紋）、円肩罐（黒色磨研）、長頸罐などである。B類鬲は紙坊頭IIないし、金河・晁峪グループの遅い段階の特徴をもつ。折肩罐、円肩罐はいずれも土器群Aに属する土器で、西周Ia相当。長頸罐は紙坊頭IIに類例がある。②土器群Aのみを出土した墓（B3、D6、E2、E7、K3、N1、N6）、E坑採集のA類鬲1点（資料50023）。器種は、A類鬲、円肩罐（黒色磨研）、彩色円肩罐など。鬲は、ほぼ西周Iaの特徴を備える。円肩罐（黒色磨研）は肩部に2条の平行沈線をめぐらすこれまた西周Iaに最も流行するそれである。

鬪鷄台IV 西周Ib前後相当の墓（B3、E4、E5、H4）と、採集土器として、H坑（資料70311）、B坑（資料10302）の各1。B類鬲ないし土器群B類の土器は見られない。西周式土器の組成に近づく。

鬪鷄台V 西周II相当の墓（C3、G6、H6、H13、H18、K7）と、載家溝坡崖採集のA類鬲がある。

鬪鷄台VI 西周III相当の墓（A6、G2）。

【年代】

分期された墓の分布に注目すると、鬪鷄台IIでは、B類鬲出土の墓は発掘区南端のN、K坑に集中する。鬪鷄台IIの土器群Aのみ出土の墓はN、K坑でB類鬲の墓群と近接するほか、発掘区中段のD、E坑にも分布する。鬪鷄台IIIでもほぼ似た分布状況であるが、B類鬲の墓には、N、K坑のほか、中段のB坑などでA類鬲の墓と並存する例が現われる。鬪鷄台IVの墓は、発掘区中段のB、E坑辺りから北部のH坑へと広がり、V、VI期になると北部のH坑、G坑辺りに墓域の中心が移るようである。以上のように、分期と墓の分布には相関関係が見いだし、遺跡内の分期単位の前後関係がある程度傍証している。

●鳳翔西村遺跡<sup>3)</sup>

鳳翔県城南六kmの三時原上に所在する墓地遺跡。一九七九年、八〇年に二一〇墓の先周時期、西周期の墓が発掘された。墓の分布はきわめて稠密であるが、切り合い関係は一切見られず、西村の墓を分期する層位的根拠は知られていない。簡報中で公表されている土器は報告者の分類する各式の代表例に限られ、資料の利用に大きな制約がある。先周時期の時間幅は鬮鶏台に近いと見られるが、ここでは細分しない。

西村 I ① B類鬲を出土した墓 (79 M 35、44、45、69、80 M 87、148 など)。器種は、B類鬲 (簡報の鬲 A I・II・III、B I・II)、折肩罐 (簡報の罐 B II)、簋 (黒色磨研)、甗 (黒色磨研)、盆など。鬲以外の折肩罐、円肩罐、簋、甗、盆は土器群 A に属する。② 土器群 A のみを出土した墓 (鬲のみ) 79 M 5、24、62、78、80 M 9、20、64、112、149 など。〈罐などが共伴〉 79 M 9、27、42、44、59、71、80 M 22、25、80、82、134 など。器種は、A類鬲 (簡報の C I、D I・II・III、E I・II・III、F I・II など)、折肩罐 (簡報の B I・II・III、C I・II など)、円肩罐 (主として黒色磨研。簡報の A I・II・III など)、簋など。青銅器として年代の指標になる鼎、簋のほか、武器の戈 1 点をともなう墓が多く、また戈を出土する墓にはしばしば銅泡が伴出する。

西村 II 土器群 B をともなう墓はない。基本的に西周式土器の範疇に入る。墓 (79 M 21、46、89、80 M 1、12、33、103、106、141 など)。

西村 III 墓 (80 M 8、96 など)。

西村 I の B 類鬲を出土したグループは、その B 類鬲が、紙坊頭 I から II に近いことがわかる。一方、土器群 A のみを出土したグループでは、鬲はほぼ西周 I a およびその直前の土器群 A の III 期相当と言える。また西村 I にともなう鼎、簋などの青銅器は、いずれも殷墟 IV ないし西周 I a に位置づけられるものである。とくに簋はいずれも西周 I a

の代表的な方格乳釘紋簋である。西村IIは西周I bないし西周II前後、西村IIIは西周IIIの特徴をもつ西周式土器に属する。

●岐山賀家村

【遺跡】

周原遺跡の中央部を南北に切る斉家溝の西側、王家溝の東側にあたる東西、南北各1 km前後の範囲（礼村、賀家村、董家村を含む）で、一九五〇年代以来たびたび小規模な発掘が行われ、先周時期から西周後期に至る各時期の墓や、灰坑などの生活址が発見されている。<sup>(4)</sup>このうち賀家村の西北地点（一九七六—七八年発掘の第一地点周辺）で先周時期に遡る土器が多く出土していることが知られる。この賀家村西北地点では、土器群Cに属し、かつ明らかにその年代の上がる一群が含まれ、これは賀家村Iとし、第五節で取り上げる。ここでは賀家村Iとは不連続な内容をもつ時期の遅れる土器群をあつかう。

【分期と土器】

一九六三年賀家村西北の墓地を発掘した徐錫台氏は、墓を2期に分け、第一期を「先周晩期」、第二期を西周成王期より遅くないとした。この認識は基本的に正確なものとおもわれるが、その第一期は、さらに2期に細分できそうである。ここでは徐氏のいう第一期の前段を賀家村II、後段を賀家村IIIとする。ただしこのIIとIIIの分期は、資料の制約もあって必ずしも厳密ではない。

賀家村I 土器群C主体の墓。第五節に述べる。

賀家村II ①B類高ないし土器群Bの土器を出土した墓（M7、27など）。器種は、B類高、平底罐など。平底罐

は、土器群Aにないタイプで、土器群Bの有耳罐の流れをくむようである。②土器群Aを出土した墓(M38など)。器種としてはA類鬲以外はつきりしない。

賀家村III ①B類鬲を出土した墓(M23、39、49、一九七三年発掘「小墓群」)。土器はB類鬲以外に知られない。一九七三年発掘の小墓では、青銅器の戈(明器)や銅泡が共伴している。②土器群Aを出土した墓(M1、11、18、23、32、48、76QHML13など)。A類鬲と円肩罐が知られる。円肩罐は黒色磨研のものを含む。

賀家村IV 土器群Bを出土した墓は知られず、土器は基本的に西周式土器の範疇に入る。墓(M25、53、78QHML43、45、76QHML8、76QHML13)。

#### 【年代】

賀家村IIは、土器群Bが紙坊頭I、鬪鶏台IIに近く、土器群Aが、そのIII1期前後である。賀家村IIIの土器群Bは紙坊頭IIないし金河・晁峪グループの遅い段階に近く、土器群Aは西周Ia前後、賀家村IVはおおよそ西周Ibないしやや遅い西周式土器に属する。

#### 【その他】

土器群A、B共存遺跡である鬪鶏台、西村、賀家村の墓地に共通する様相として次の3点を指摘しておく。①先周時期(土器群AのIII1、土器群Bの紙坊頭I並行段階)に、土器群Aを副葬土器の主体とする墓と、B類鬲を副葬する墓の並存状態が始まり、墓地はそのまま西周Ia、Ibに継続され、ほぼ西周Ib並行期以降B類鬲は基本的に姿を消し、豊鍔遺跡と一致する西周式土器の組成に移行する。②少数の圈足付黒色磨研甗、有蓋の彩色紋罐など他の遺跡に少ない器種がこれらの遺跡で共通して出土する。③墓は大部分が小型の竪穴土壇墓で、その中に、銅戈1、銅泡

1、陶鬲1を副葬し、武器をもつところから戦士的性格をもつとも考えられる墓が多く含まれる。土器群Aがその擴張の時期にあたって、在地的な土器群Bとの共存遺跡を形成し、その中に戦士的性格をもつような墓が多く含まれる傾向があるとすれば、その時代的背景を考えると、注意すべき現象である。

●その他の遺跡

宝鷄賈村。<sup>(41)</sup>《賈村I》B類鬲、A類鬲、甗、折肩罐、円肩罐、盆など。B類鬲以外は、基本的に土器群AのIII2(西周Ia相当)に属する。張天恩氏はそのB類鬲を紙坊頭IIに並行するとみる。<sup>(42)</sup>《賈村II》西周I、II前後の西周式土器に属する。宝鷄趙家坡。<sup>(43)</sup>《趙家坡I》器種は、B類鬲、甗、折肩罐。張天恩氏によれば、紙坊頭I、IIの兩段階に並行するB類鬲がある。<sup>(44)</sup>《趙家坡II》西周期の土器群。《宝鷄旭光》<sup>(45)</sup>一九八四年発掘のM1からは、B類鬲2、円肩罐1、および青銅器の簋と甗が共伴(二二頁、図3-10・12)。M1に近接するM2から円肩罐1(図3-11)が出土。B類鬲は紙坊頭IIに近い。M1、2の円肩罐は、ともに肩部に2条の平行沈線紋をめぐらす土器群Aの西周Ia相当のものである。青銅器の簋は方格乳釘紋をもつ西周Iaの典型的な例、甗は殷墟IV相当とみられる。

(F) 豊鎬地区の土器群B

宝鷄地区や周原遺跡より東においてB類鬲が出土した数少ない地点として、先周時期の豊鎬地区があげられる。先周時期から西周期初葉にかけての時期、すなわちこの地域で土器群Aが展開を始める直前から、それを基礎に西周式土器が成立しようとするその時期の、少数の墓と生活址で、B類鬲が出土している。

●客省莊83SCKM1(83客M1)<sup>(46)</sup>

B類鬲1に、青銅武器や玉器が共伴した。B類鬲は、劉家I、ないしやや下る紙坊頭Iに近い。青銅器に鳳鳥紋に

よる裝飾的な内をもつ殷墟出土例に近い戈が2点、同じく殷墟に多い弓形青銅器1点、鏃4点が出土している。2点の戈を殷墟四盤磨SPM8のそれと、また弓形器を大司空村M51のそれと比較して、同墓の年代を殷墟III並行と考える飯島氏の考証は妥当であるが、出土した鬲は、B類鬲の段階からみてあるいは殷墟IV前半頃に下がる可能性もあるかと考えられる。

●83 澧毛 M1<sup>(48)</sup>

B類鬲1、円肩罐1、青銅器の鼎1、簋1が出土。B類鬲は紙坊頭II相当。円肩罐は西周Iaの例である。青銅鼎は殷墟IV相当。簋は西周Iaの方格乳釘紋簋である(二二頁、図3)。

●張家坡67 M89 (67張 M89<sup>(48)</sup>)

B類鬲1、円肩罐1が出土(二二頁、図3)。B類鬲は紙坊頭IIないしそれより遅いものである。円肩罐は黒色磨研で、肩部に2条の平行沈線紋をめぐらす、西周Iaに見られるものである。

●豊鎬生活址早期

85張・東H3、85張・東T2、長安馬王村H11、「澧西」生活址早期など。「澧西」生活址早期が西周Ia、Ibにまたがるほかは、ほぼ西周Iaに相当する。これらの生活址で土器群A主体の土器に混在して若干のB類鬲が含まれる。

以上の3墓と豊鎬生活址早期は、年代的に殷墟III(ないしIV前半)から、西周Iまでの範囲にある。ただし、土器群Bと言っても、出土したのはB類鬲に限られ、土器群Bの伝統がこの地に定着であったかどうかは疑問である。

ただ、現有の資料からみて、豊鎬地区に土器群Aが本格的に出現する直前から、たとえ少数であっても83客M1の例

のように、B類鬲が波及していたことが考えられ、今後には注意すべき問題である。

最も早い83客M1は、共伴の青銅器がきわめて殷文化中心地域のそれに直結する要素の強いものである。しかもこの墓は、この時期の土器群AやBの墓にはまったく見られない、犬を殉葬した腰坑や、二層台上の2体の殉葬をともなっている。このような墓制は、同時期の関中地方では、この遺跡から東に遠くない土器群Cの老牛坡遺跡のそれに近いと言える。老牛坡は殷系文化の関中地方に在地の遺跡である。「一周」の政治的勢力範囲に入る直前、近隣の老牛坡の集団と同じ集団ないし文化的に密接な関係にある集団がこの豊鎬地区に居住していたことが十分考えられるのである。B類鬲はあるいはこうした性格の集団に西方から一時的に波及した外来的土器とも考えられる。

次に、83豊毛M1は、共伴した円肩罐や青銅簋から見て、土器群Aあるいは周に直接つながる要素をもつ。67張M89についても同様のことが言える。この時期は、豊鎬地区に土器群Aが波及し、土器群Aを基本に西周式土器が成立してくる時期である。豊鎬生活址早期もこの時期に重なる。

西周Ib以降、豊鎬地区では土器群Bに属する土器は基本的に発見されていない。しかし別の問題になるが、すでに西周式土器が成立した西周前期の豊鎬遺跡にあつて、墓制の上で興味深い現象がある。それは当該遺跡で西周期の墓の中に少数ではあるが、洞室墓が含まれることである。報告されているものに、張家坡M183<sup>20</sup>（西周IIb）、太原村M309<sup>21</sup>（年代不詳）の2墓があり、その他、張家坡で近年発見された洞室墓は二十基余に達し、その多くが集中した墓群を形成しているという報告がある。<sup>22</sup> 洞室墓は、先周時期において土器群Bの劉家遺跡にきわめて支配的な墓制であった。豊鎬地区の西周期における洞室墓群の存在は、西周王朝の中心地に、かつて先周時期に土器群Bと緊密にかかわった墓制の系譜を長く温存した集団が活動していたことを示唆している。



(G) 甘肅東部の土器群B

●甘肅慶陽巴家嘴<sup>(33)</sup>

墓出土の一括遺物。B類鬲1、A類鬲2が出土。B類鬲は口縁外面に鋸齒状に縄目が加えられ、頸部と襜上部に波状の突起を付す、劉家III (M 49) 及び碾子坡II (M 109) に見られたB類鬲と同形式で、これらは寺窪文化の鬲と一定の関係がある。A類鬲は西周I相当である。

●甘肅合水兔兒溝<sup>(34)</sup>

2墓の出土土器が紹介されている。M 5から、B類鬲1、折肩罐1が出土。B類鬲は単耳の鬲で、晁峪出土の1点に近い、これまた寺窪文化の鬲と一定の関係がある鬲である。折肩罐は有蓋で、西村、鬪鷄台で出土例のある彩色紋を施した土器群Aの例。折肩罐は西周I相当である。

(2) 土器群Bの変遷

土器群Bの器種の中で、漸移的な形態の変遷が追跡できるのはB類鬲と、有耳罐である。ここではまずこの2器種を形式・型式に分類し、その変遷に段階を設定する。この段階を、前項に述べてきた土器の共時的単位である遺跡および遺跡内の分期単位に拡張して、土器群全体の時期区分を設定する。

(A) B類鬲の分類と段階

B類鬲の編年は、遺跡の項で述べた次の2つの層位的根拠が、その形態変遷の方向を示す。①碾子坡IとIIの土器相の相違、②紙坊頭I (4 B層) と紙坊頭II (4 A層) の土器相の相違。この方向性を軸に細部の形態を比較するこ

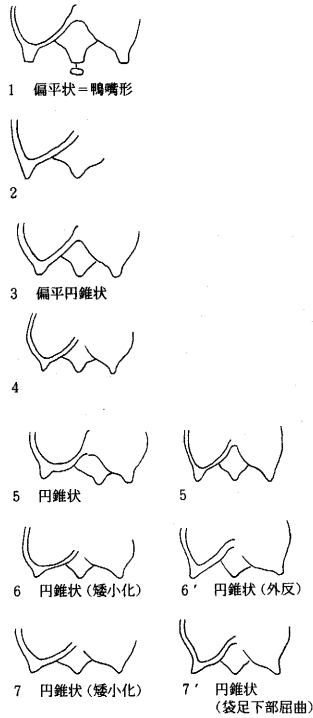


図 12 B類鬲足尖の変化

とでB類鬲を分類する。また、B類鬲にともなう土器群Aなど他系統の土器や、若干の青銅器のうち、既成の編年的位置づけが安定的であるものに注目して、これを補助的にB類鬲変遷の先後関係を知る参考にし、かつB類鬲を殷文  
化中心地域の編年枠に関連させる作業にも用いる。

なお土器の分類は、鬲、有耳罐とも、形態的特徴の持続的な一群を形式(形式I、II・・・、小形式a、b・・・)、形式内での時系列的な差とみられる形態の変化を型式(1、2・・・)として分類する。

### 1. B類鬲の分類

最初に、B類鬲の変遷の中で、全体を通じて見られる比較的明確な属性の時系列的な変化をあげて、形式・型式の先後関係を考える一つの目安とする。

【足尖】全体として、足尖ははだいに低く、矮小化する傾向を示す。その形状は、偏平・直立↓偏平・外開き気味↓偏平気味の円錐状↓円錐状↓矮小化した円錐状の順に連続変化する(図12)。これを時間的流れと捉え、1〜7の

表5 足尖を中心としたB類鬚の属性の相関関係(○は資料少数)

足尖	袋足				口縁外部処理						
	紡錘形 断面円形	紡錘形 断面楕円形	球状	屈曲外反	凸線	凸帯	刻み	縦縄文	斜行紋重ね	擦り消し	
足尖1	●				●	●					
足尖2	●	●				●	●				
足尖3	●	●				○	●	●			
足尖4	●	●					○	●	●		
足尖5	●							○	●		
足尖6	●		●					○	●	○	
足尖6'				●				○	●	○	
足尖7			●					○	●	●	
足尖7'				●				○	○	●	

西周式土器成立の背景(上)

段階に区別する。また、その6、7段前後に並行して別の流れが現われる。すなわち足尖自体は円錐状を呈しながら、袋足下部の形状変化に呼応して、足尖がひねりだされるように強く外反するものがある。これを6'、7'とする。

なお、紙坊頭Ⅰ↓紙坊頭Ⅱの層位的関係の中で、足尖3・4↓5・6の前後関係を確認することができる。

【袋足の形状】ほぼ足尖の1〜4段階の間、袋足は紡錘形を呈するが、袋足を長軸に垂直に切った断面形は、円形↓下辺が潰れた楕円形という変化の傾向がある。そして足尖5〜7段の間、袋足が短くなり全体が球状に近づく流れと、足尖6'、7'に呼応して袋足下部がひねりだされるように屈曲外反するものが現われる。

【口縁外面の処理】口縁外面の処理は、足尖のように連続的ではないが、明確に新旧を分離する

一、二の指標を提供する。すなわち、波状の凸線紋をめぐらせる（足尖1相当）（図8—3・5・6）あるいは貼付の凸帯をめぐらせる（足尖1〜3）（図8—2・7・8）↓口縁端部に刻み目を入れる（足尖2〜4相当）（図8—17）あるいは口縁端部に特別な処理をせず口頸部全体に均一の縦縄紋を施す（主として3〜4相当）（図8—15・16）↓口縁直下に右上がりの斜行紋（足尖4〜7相当）を重ねる（図8—25・26・32）↓口縁端部外面を擦り消す（足尖6〜7相当）（図8—45・50・52）という順に連続的に変化する。

以上の属性変化の相関関係を表5にまとめる。これをB類鬚の時間的流れの基準としつつ、以下に形式・型式に分類する。

ここで、1基に複数のB類鬚を共伴した劉家遺跡のB類鬚を見ると、鬚の袋足部に大きな差はないが、口頸部が直立したり、外反したりと異なる形態のものが共伴することに気づかれる（図8—16〜18のM37の例でも明らか）。すなわち、このような口頸部の相違が時間差によるものではないことを示唆する。もし口頸部の異なるこれらの鬚を劉家以外の鬚とのつながりで見れば、口頸部の相違がB類鬚中に比較的長期間継続した異なる諸形式の並行現象であることが理解できる。そこで、B類鬚の分類に当たっては主として、口頸部の形態から形式を設定し、一方、諸形式に共通する足尖、袋足、口縁外面処理の変化を基準に新旧の型式変化を見いだしていく。以下、七二頁、図8参照。

I形式 円筒状の口頸部が、直立ないし若干内傾する形式。大部分の鬚に、一对の環状把手が付く。器身全体の最大幅は常に袋足部の中段から上段に位置する。口頸部の形態からIa、Ib二つの小形式に分ける。

Ia形式は、口頸部が明確に内傾する形式でいずれも一对の環状把手を有する。足尖1〜3の各段階に対応するIa1〜Ia3の時系列的な型式に分けられる。Ia1〜Ia3の間、袋足の上部が強く張り出し、三足が広く開脚す

る形態から、袋足上部がなで肩で、かつ三足の開きがややせばまる傾向へと変化する。I a 1の口縁外面は波状の凸線紋を貼付ける。I a 2、I a 3の口頸部は内への湾曲が強まって有段状になり、口縁端部外面には刻み目をもつ貼付け紋を付す。

I b形式は、口頸部が直立する形式。すべての例で一对の環状把手が付く。足尖1〜5に対応する例があり、I b 1（足尖1）、I b 2（足尖2）、I b 3（足尖3、4）、I b 4（足尖5）の型式に分ける。I b 1の口縁端部外面には波状の凸線紋を貼付けるか、または凸帯をめぐらせる。この特徴はI b 2からI b 3の一部に残る。袋足部の形態変化は、I a形式に対応する。なお、I b 1では口頸部から袋足部にかけて、口縁端部と同じ凸線紋を用いて、縦方向に装飾を加えた例がある。I b 4では、袋足が短い球状に近づく。

II形式 口頸部が外開きになった形式。大部分の例で、口縁端部の左右に一对の板状把手（鶏冠耳）を付す。

II a形式は、口頸部が斜直に外反する形式で、その継続した期間は長く、資料数もB類中最も多い。足尖1〜6に相当する変化を内包しており、II a 1（足尖1）、II a 2（足尖2）、II a 3（足尖3、4）、II a 4（足尖4、5）、II a 5（足尖5、6）の各型式に分ける。II a 1〜II a 3の袋足部の変化はほぼI b 1〜I b 3に一致する。口縁端部の処理が重要である。II a 1、II a 2では口縁端部外面に各種の凸帯を貼付ける。II a 3ではその凸帯の見られないものが普通で、口頸部全体に連続する縦縄紋を施す。また板状把手は、小型化する。II a 4、II a 5では口縁端部外面に右上がりの斜行紋（一般に縄紋）を施すことが大きな変化である。また、II a 4から口頸部と袋足部の接合部の外面に沈線をめぐらすことが普遍的になる。それはII a 4では三足の接合部に沿って湾曲した線で描かれるが、II a 5では単に口頸部下部をめぐる平行沈線に近くなり、かつ沈線が装飾として強調されるものが出てくる。こ

の沈線は、第一節で述べたように、もともと袋足部と口頸部の接合部分の外面処理としてあったのであるが、しだいに装飾的性格を強めたものと考えられる。II a 5では口頸部が斜直からやや傾斜が弱くなりかつ内に湾曲気味になることも注意される。また環状把手がある場合、把手が口縁端部のやや下に付き、かつやや小型化する。なお、このII a 4↓II a 5の型式区分は、紙坊頭I↓II間の層位的区分に対応している。

II b 形式は、口頸部が比較的強く内に湾曲し、上部が直立に近くなる形式である。II a から分岐した形式であることは明らかである。II b 1 (足尖5)、II b 2 (足尖6、6')、II b 3 (足尖7)の型式に分ける。II b 形式を通じての大きな特徴はその縄紋にある。多くがこれまでにない間隔の粗い(太い)縄紋を施している。袋足には、B類鬲の遅い段階に特有の短い球状に近づく傾向と、外に屈曲する傾向が並行するようである。口縁端部は、II b 1、II b 2が右上がり斜行紋を施し、II b 3では擦り消しを行なうことが普通になる。

II c 形式は、直立に近い口頸部がのる形式で、多くは把手が付かない。口頸部下部の平行沈線が顕著で、袋足部の上に短い円筒がのった器形の印象を受ける。II c 1 (足尖5、6、6')、II c 2 (足尖7)に分けられる。II c 1↓II c 2で、口頸部が低くなる。II c 1の口縁端部外面は斜行紋、II c 2では擦り消しが見られる。

II d 形式は、II c 形式から分岐したとみられる、直立した短い円筒状の口頸部がのる形式。足尖7の例が知られ、口縁端部には斜行紋を施して、その上を擦り消す。袋足は球状の特徴をもつ。その縄紋は、II b 形式に顕著であった粗い縄紋を施す。

II e 形式は、II 形式中、器高が高く、襜が低い形式で、あたかも長胴の印象を受ける。足尖5く7までの例が含まれ、知られる資料をII e 1とII e 2に分ける。この形式は、出土地が宝鷄市西部の遺跡に限られ、B類鬲の遅い段階

における地域色を示すグループとみなせる。

III形式　口頸部の外径が大きく、したがって袋足部と口頸部の段差がI、II形式に比べて曖昧な形態のものを一括する。その形式の認識はやや不安定で、資料も少なく、将来的には右のIないしII形式内の小形式として再整理する必要も考えられる。

III a形式は、口頸部が直立ないしやや内傾する形式で、一对の環状把手が付く。既知の資料をIII a 1（足尖1ないし2）、III a 2（足尖3）、III a 3（6、6'）、III a 4（足尖不明）の各型式に分ける。III a 1、III a 2では口縁端部外面に幅広の凸帯を貼付ける。III a 3では斜行紋が施され、口頸部下部の沈線は、II a 5に共通する平行沈線に近づいている。III a 4の口縁端部外面は擦り消しが見られる。また、III a 3、III a 4の環状把手は、明らかに小型化したものである。

III b形式は、口頸部がやや外反する形式で、資料数が少なく細分はしない。口縁端部にIII a 1、III a 2に共通する凸帯をめぐらせ、さらに刻みを入れる例が見られる。また、図8-1では、口縁端部に折り返し状に波状の凸帯を貼付ける。この顕著な口縁の特徴は、次節の土器群Cとの関係を示唆する。

IV形式　袋足が細目で長く、襜部の高い形式。資料数が少なく細分しない。

V形式　I、IV形式に比して、器高が高い細身の印象を与える器形をもち、弱く外反する高い口頸部をもつ。口頸部と袋足部が一体的に滑らかにつながりる点がりる点か他の形式と異なる。その変遷は明確ではないが、Va形式では、口縁直下に波状の貼付紋や刻み目を入れており、襜の上部には波状の突起を貼付ける特徴がある。劉家M49出土の例（図8-30）は、同墓に寺窪系の特色をもつ単耳罐が共伴していることから、寺窪文化の土器と関連するいわば外来的

な要素をもつB類鬲として位置づけるべきである。足尖は円柱状のものが含まれ、B類鬲の一般的な流れから逸脱する。一方、Vb形式は、Va形式の影響を受けた鬲であるが、袋足、足尖部の形態はB類鬲一般と一致する。その足尖は、7'の例を含む。

VI形式 三足の製作法がB類鬲の範疇にあるが、形態的にかなり孤立的な形式で、三足が牛角状の特徴をもつVia形式と、高い直立する三袋足をもつVib形式がある。ViaとVibの一部の例に、高い円筒状の口頸部と水平近くに屈曲する口縁の特徴、そして袋足部に他のB類鬲に例のない横方向の縄紋が共通して見られる。この二つの特徴は、さきに述べたA類鬲中のIX形式と共通することが注意される。A類鬲とB類鬲の接点がこの両形式の間にある。

VII形式 わずかに1点知られるだけであるが、一形式を設定しておく。太く張りのある袋足と、短い口頸部、そして他のB類鬲の形式に見られない環状把手を片側にもつ単耳の鬲である。足尖7'の特徴を受け継いでいる。この鬲は碾子坡IIにもなった図8—55のような完全な寺窪系の鬲がB類鬲の系列に影響したいわば折衷的な例と考えられる。VII形式を出土した晁峪遺跡からは、寺窪系の特色をもつ単耳罐（後述する有耳罐IVa5）が出土していることもこうした鬲が生じた背景を示唆する。

## 2. B類鬲の段階

形式・型式全体の比較的顕著な変化を把握して段階に分ける。足尖1〜2が主体で、口縁端部に凸帯、凸線紋、刻みなどをもつ段階をI1とI2段階、足尖3が主体で、口縁端部と口頸部全体が均一な縦縄紋を施すものが一般化する段階をII段階、足尖4〜5が主体で、大部分の口縁直下に斜行紋が出現する段階をIII段階、足尖6が主体で、口縁直下に斜行紋、口頸部下に顕著な沈線紋をめぐらすことが一般化する段階をIV1、足尖7が主体で口縁端部外面を



擦り消す例が多い段階をIV 2段階とする。これ以降、B類扁の消息が切れる。このように各段階は、新形式の出現や、屬性上の顕著な動向にそつて設定されるものである。

諸形式に共通してみられる各段階の特徴を再度まとめると。

I 段階 豊満な袋足をもち、三本の袋足は大きく開いて、かつ襠は高い。この度合は、I 1→I 2で弱まる。口縁端部に凸帯を付したり、そこに波状の裝飾を施す例は、同時期のA類扁、C類扁の一部と共通する特徴と考えられる。また、口縁端部、胴部、袋足外面に見られる波状の凸線紋は、後述するように内蒙古中部の遺跡に見られる北方系の外来要素として注意される。環状把手がつく場合、把手の肩の上に、X字形の刻紋やそれと組み合わせた楔形の刺突紋で飾るものが多い。土器の色調は、紅褐色傾向のものが多く、かつその色調に焼成に起因するらしいむらがある。

II 段階 形式の構成は、I期のそれを基本的に継承する。代表的な劉家遺跡の大部分の墓で複数の形式が共存している。袋足の開きはI期よりせばまる。襠部外面の袋足を接合した箇所に、粘土を重ね、その上から先端の円い棒状の工具で刺突した麻点紋を施す例が現われる。口縁端部は、I期の継承で薄く凸帯状の裝飾をめぐらすものがあるが、多くは口頸部全体が均一の縦縄紋で覆われる。環状把手をもつ場合、その肩部にI期のような楔形刺突紋を施すことはあるが、X字形の刻紋は例が見られなくなる（同時期の有耳罐には残る）。

土器の色調は紅褐色傾向にかわり灰褐色、灰色傾向が主体になる。色調に焼成に起因するむらはやはり頻見される。III 段階 形式の構成ではII b形式が現われる。口縁直下の斜行紋の出現が重要な変化である。口頸部下部和袋足の接合部に顕著な一条の擦り消し紋ないし沈線紋をめぐらすものが急増する。また、II b形式に見られるような器身の縄紋の粗いものが出現することも大きな変化である。土器の色調は、灰褐色ないし灰色系が主体である。

IV 段階 II c、II d、II e、VI 形式などが出現する。IV 1 段階は、III 段階に現われた諸属性がさらに顕著に見られる。器身の縄紋は粗いものが多く、また、口頸部下には III 段階より引続き裝飾的に強調された沈線（一部に凸線）が普遍的になる。III 段階↓IV 1 段階のこのような変化は足尖の変化とともに、紙坊頭 I↓II の層序に対応する。各形式に共通して、口頸部が若干内に湾曲する傾向を見せる点も注意される。IV 2 段階では、II 形式、III 形式など B 類鬲の中心的な形式では、器高が低くなる変化が顕著で、一方、II e、V 形式の流れは器高が高い特徴を継続するという 2 つの対照的な流れが並行する。後者は宝鷄西部の遺跡に見られる小地域の特色とみなされる。

土器の色調は灰褐色ないし灰色系が主体である。

#### (B) 有耳罐の分類と段階

器身の両側ないし片側に把手をもつ罐を有耳罐として一括する。その資料数は少ないが、口縁部外面の処理などいくつかの属性変化が前述の B 類鬲の変遷と一致し、また B 類鬲と共伴する例が多いことから、B 類鬲を補佐して土器群 B の段階の設定をより確かにする材料となる。

#### 1. 形式・型式分類

有耳罐には大きく分けて 4 形式がある（七六頁、図 9）。

I 形式 丸く大きく張りのある胴部に広口の口頸部がつき、一对の環状把手をもつ双耳罐。3 型式に分ける。I 1 は丸底で口頸部が直立し、I 2、I 3 は平底で、口頸部がやや内に湾曲する。I 3 では胴部の最大幅の位置が高くなる傾向がみられる。I 1 の金河の例では口縁端部に波状の凸帯をめぐらし、口縁直下、胴上部に小円と凸線の貼付紋がある。これは、B 類鬲 I 1 段階にも見られた特徴である。I 2 で口縁端部に擦り消しの端緒が見られるが、I 3 で

は口頸部全体を擦り消している。また、I 1の環状把手肩部にはX字形紋と楔形刺突紋が見られるが、I 2以降X字形刻紋は見られない。

II形式 長胴形の一对の環状把手をもつ双耳罐。知られる資料は劉家遺跡の例に限られる。

III形式 細頸壺形の双耳罐。金河遺跡出土の1例が知られるIII 1は、鶏冠耳がつき、III 2〜3は一对の環状把手をもつ。III 1、III 2は丸底で最大幅の位置は胴部上段にある。一方、III 3は平底で、最大幅の位置は胴部中段に下がる。

III 2〜3はいずれも劉家遺跡にともなう。

IV形式 器の片側に環状把手をもつ水差し形の単耳罐。資料数は少ないが細高の器身をもつIV a形式と、低いIV b形式に分ける。IV aをさらに5型式に分ける。IV a 1は丸底で、口縁端部に凸帯をめぐらし、凸帯の上に波状の凸線を裝飾する。IV a 2〜IV a 5は平底で、IV a 2は口縁端部を擦り消し、IV a 3は口頸部全体が、さらにIV a 4、IV a 5では器身全体が擦り消される。IV a 5の胴部は直に近く変化している。なお、IV a 1〜IV a 3まで環状把手の肩部にX字形刻紋や楔形刺突紋の裝飾が見られるが、IV a 4以降なくなる。IV b形式には、器身全体に縄紋のあるIV b 1と、器身全体を擦り消したIV b 2がある。

## 2. 有耳罐の段階

① I 1、III 1、IV a 1は、口縁端部の凸帯に共通性が見られ、かつ同じ金河遺跡の出土であり、共時的な関係にある。② I 2、II、III 2〜3、IV a 2〜3などはいずれも平底で、口頸部全体に縄紋を施すか一部分を擦り消す点で共通性がみられ、知られる資料の多くが劉家遺跡に集中する。さらに、③ I 3、IV a 4、IV a 5などは口頸部ないし器身全体を擦り消す。形式は違うが、I 2がIV a 4に先行することは、紙坊頭I→IIの層位関係で確かめることができ

る。

以上、有耳罐自身の変遷の①～③の共時的な段階のうち、①の口縁端部の凸帯や、貼付けの凸線紋などは、明らかにB類鬲I～IV段階の特徴であり、②の口縁の処理はB類鬲II段階と共通し、③の口頸部以下を擦り消す手法は、B類鬲のIII～IV段階に顕著な特徴で、また環状把手にX字形刻紋が見られない点もB類鬲III～IV段階に共通する。

図9に示した段階は、有耳罐の変遷が以上のようにB類鬲の変遷と対応することを確認した上で、遺跡、遺構におけるB類鬲諸形式との共伴、共存の関係から有耳罐の段階をB類鬲の段階に対応させたものである。

### (3) 土器群Bの時期の設定と年代

#### (A) 時期の設定

以上にB類鬲と有耳罐で示した段階を土器群全体に拡張して、土器群Bの時期を設定する。その場合、B類鬲、有耳罐のI～IV段階を、土器群BのI～IV期とする。この時期は、B類鬲、有耳罐の段階を基本に、遺跡の項で確認しておいた各段階のB類鬲・有耳罐との共伴ないし共時的関係をもつ遺構、遺跡、あるいは遺跡内での分期単位を一括するものである。

以下に、各時期の単位を列挙する。●印の遺跡は、土器群A、Bの共存の遺跡。▲印の遺跡は、土器群A主体の遺跡に少数のB類鬲が存在する遺跡。△印は土器群C主体の遺跡に少数のB類鬲がともなう遺跡。\*印は土器資料が公表されておらず、張天恩氏の記述<sup>(54)</sup>、その他現地での情報<sup>(57)</sup>などを手がかりに位置づけた単位である<sup>(58)</sup>。

I 期  
I 1 宝鶏金河、石嘴頭 I、長武碾子坡 I、甘肅平涼翟家溝

I 2 宝鶏姬家店、石嘴頭 I、郿県採集資料、麟游北馬坊、長武碾子坡 I

I (I 1、I 2 のいずれかに相当ないし両期にまたがるが、現状で分期できないもの) 宝鶏涼泉\*、興隆

\*、鬪鷄台 I\*、鳳翔范家寨\*、△扶風益家堡 I\*、△武功柴家嘴、▲鄭家坡 H 35\*

II 期  
扶風劉家 I、益家堡 II\*、▲武功鄭家坡 H 14、宝鶏市博物館収蔵採集資料<sup>39)</sup>

III 期  
扶風劉家 II、●益家堡 III\*、岐山廟王村、●賀家村 II、●鳳翔西村 I、宝鶏晁峪、●紙坊頭 I、●鬪鷄台 II、●趙家坡 I、83 客 M 1、宝鶏市博物館収蔵採集資料<sup>40)</sup>

IV 期  
IV 1 ●岐山賀家村 III、●鳳翔西村 I、宝鶏旭光、晁峪、林家村、茹家莊生活址、●紙坊頭 II、●鬪鷄台 III、●賈村 I、●長武碾子坡 II、●甘肅崇信于家灣、▲扶風北呂 M 21、▲武功南廟、▲83 澧毛 M 1、▲67 張

M 89、▲豐鎬生活址早期

IV 2 ●鳳翔西村 I、宝鶏晁峪、茹家莊生活址、●長武碾子坡 II、▲武功黃家河、▲豐鎬生活址早期

IV (IV 1、IV 2 のいずれかに相当ないし両期にまたがるが、現状で分期できないもの) 武功黃家南窯\*、

●扶風劉家 M 49、●岐山礼村\*、●宝鶏石嘴頭 II、固川\*、上官莊\*、長寿山\*、羅家塋、●趙家坡、

●西崖\*、●潘家灣\*、彬県土陵、史家河、●長武下孟村、●甘肅慶陽巴家嘴、●合水兔兒溝、宝鶏市

博物館収蔵採集資料<sup>41)</sup>

(B) 土器群 B 各時期の年代 (殷文化中心地域編年との対応)

西周式土器成立の背景 (上)

土器群Bには、殷文化中心地域の土器と直接年代が比較できる殷系の要素や、共伴した殷系土器それ自体はなく、したがってその年代は、①西周期にまたがる遺跡で、西周IaないしIbなどとの共時的な段階を確認し、②土器群A、B共存遺跡での土器群Aの時期を参照し、さらに、③土器群Bの早い段階で、相互に類似した土器が存在する辛店文化の年代観を利用する。その他、④共伴した青銅器（土器群Bにともなった青銅器はいずれも西周IaないしIb）を参照する。個々に検討を要する年代観についてはすでに遺跡の項であらまし述べたので、ここでは総括的に述べる。

第I期 有耳罐のうちI1時期を代表するI1形式と、III1形式が、辛店文化の類似する土器と比較することができる。辛店文化の編年的研究は、最近の青海楽都柳灣<sup>(62)</sup>、民和山家頭、民和核桃莊、甘肅臨夏蓮花台<sup>(63)</sup>などの発掘により新しい展開を始めている。これらの資料を踏まえた南玉泉氏の土器の型式学的研究では、辛店文化全体を7期に分期し、従来から言われてきたいわゆる姫家川類型、張家嘴類型の土器は実は主として辛店文化の比較的遅い時期に属することを示し、その始源については齊家文化から山家頭第一類の段階を経て辛店文化の早期に至る変遷を推定するという成果を得ている。<sup>(64)</sup>

この南氏の編年案に依拠すれば、土器群B、I1期の有耳罐I1形式とIII1形式はその器形が、それぞれ丸底で、口頸部が直立に近く、かつ口縁端部に波状を呈するなどした凸帯をめぐらせる点で明らかに辛店文化の有耳罐と共通する。それは南氏の編年の辛店文化第一期から第三期の間の例（図13）に関連づけられ、土器群BのI期の年代もほぼこれに並行するとみられる。<sup>(65)</sup>南氏は辛店文化の始まりを、<sup>14</sup>C年代などを参照して前15世紀頃と考え、第一期から第三期を「商代中期前後」とする。

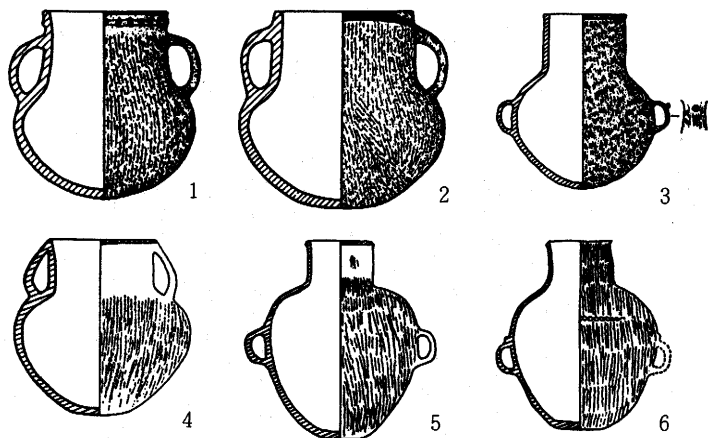


図 13 辛店文化(南玉泉編年一~三期相当)の有耳罐

1. 蓮花台 LL 008    2. 蓮花台 M13    3. 蓮花台 M15  
4-6. 柳湾 M1196 (1、4 は 1/6, その他 1/12)

一方、II期の標準的単位である劉家Iは、遺跡の項でふれたように、同じ扶風県内の益家堡遺跡の層位的根拠から、殷墟III前後と考える鄒衡、孫華氏らの有力な意見がある。これにしたがえば、土器群BのI期は殷墟IIIより遡ると考えられよう。以上から、筆者は、土器群BのI期の年代を、確実に殷墟I、II並行期に重なり、かつI I期の上限は二里岡期に遡る可能性があると考える。

I期のB類属に広く見られる口縁端部外面の凸帯、特にIII b形式に見られる波状の凸帯は、次節に述べる土器群CのII期のそれに関係することが考えられ、その年代は殷墟I、II相当と考えられる。

さらに、I期のB類属に見られる凸線紋(蛇紋)は、後述するようにな内蒙古中南部を中心とした龍山文化期以降殷墟I、IIまで継続される朱開溝遺跡などに顕著な特徴であり、I期のB類属の年代が殷墟I、IIないしそれ以前に遡ることを示唆する。

なお、土器群AのI期の標準的単位である鄭家坡IのH35から、土器群BのI期相当のB類属片が出土していると言われる。土器群AのI期は、先述したように殷墟I、IIに並行する時期と推定した。これは土器群BのI期の年代観に合致するものであり、土器群Bの

I期と土器群AのI期の間に重なる時期のあることを示している。

第二期 この時期の標準的単位は劉家Iである。その年代は、先述したように殷墟I、II相当の殷系土器主体の益家堡Iに層位的に後続する益家堡IIの内容に並行するものである。他方、劉家IIIは西周I期に並行し、劉家IIにはその直前の土器群Aの要素が見られ、殷墟IV前半頃と考えられる。従つて消去法的に劉家Iすなわち第二期の年代は殷墟III前後と推定される。

第三期 劉家II、紙坊頭I、鬪鷄台IIなどが標準的な単位で、土器群Aの土器が同じ遺構に共存ないし遺跡内で共存する。その時期はおよそ土器群AのIII1期前後とみられ、西周Iaの直前、殷墟IV前半頃とみられる。

第四期 IV1期の標準的単位である紙坊頭II、鬪鷄台III、賀家村III、賈村I、旭光、83澧毛M1、67張M89、崇信于家灣などでは、土器群AのIII2あるいは西周Ia相当の土器が共存、ないし共存である。また方格乳釘紋簋や方格乳釘紋鼎をはじめとする西周Iaの標準的な青銅器が、林家村、旭光(M1)、83澧毛M1で土器群Bの土器に共存し、崇信などで遺跡内に共存である。IV1は西周Iaに並行と考えられる。

IV2期の良好な標準的単位は設定できない。この時期は、西村I、晁峪、茹家庄生活址、碾子坡II、豊鎬生活址早期などが、西周Ia並行期のIV1期の土器に加え、若干年代の下がる土器を含むと判断され、それを試みに分離した時期である。これらの単位で共時的と考えられる土器群Aの土器や、青銅器などから、IV2の年代は西周Ib前後と推定される。

なお、IV期に入れている晁峪出土の足尖の形状が7以降とみられるB類鬲VII形式は、IV2の時期よりもさらに下がる可能性も考えられる。



(4) 土器群Bの性格——周囲の土器群との関係

(A) 土器群Bの地域的グループ

土器群Aや土器群Cでは、遺跡ごとの土器の組成が比較的均一で、したがって現状では地域差を設定せず、全体を一つの流れて把握すべきである。ところが土器群Bにおいては、主体となるB類属以外の土器の組成が遺跡ごとに大きくずれを見せ、その差が時期の差と言えない場合、土器群B内に地域的なグループを設定する必要が出てくる。

土器群Bは、すでに遺跡の項でその分類にしたがって記述したように、①〈B類属十有耳罐〉(主として墓出土と考えられる)を器種構成の基本とする金河・晁峪グループ、②〈B類属十有耳罐十折肩罐〉(墓)を基本とする劉家グループ、③〈B類属のみ〉(墓)・〈B類属十折肩罐十甗十豆十簋十盆十瓮十尊など〉(生活址)を基本とする碾子坡グループの、主要な3つのグループに分けられる。

①では、確実な遺構は知られず、②では生活址の土器はまったく知られていない。しかし、もし①が、大部分墓の出土であるとした推定が正しければ、墓の副葬土器だけを比較しても3者にははつきりと相違が見られる。すなわち、金河・晁峪グループで見られる有耳罐は、劉家グループの墓でも見られるが、碾子坡グループでは、墓、生活址ともに見られない。一方、碾子坡の生活址に見られる折肩罐は、劉家グループの墓にもともなうが、金河・晁峪グループには見られない。したがって、特に金河・晁峪グループと碾子坡グループの間ではB類属以外にはつきりと共通する土器がないことになり、両者を別の系統の土器群としてまとめることも考えられる。しかし、両者において主体的土器であるB類属の変遷は、I期〜IV期の長期にわたって両グループ間で強く連携した関係にあることは明らかである。

金河・晁峪グループ、劉家グループにおいて碾子坡グループと比較できる良好な生活址が調査されることが今後の課題であるが、現状ではこれら3つのグループを同じ土器群Bに属する3つの地域グループと考えることが妥当であろう。

この他に、金河・晁峪グループの遅い段階に並行して、同じ宝鷄周辺では四川系、寺窪系の土器と共存する茹家庄グループが存在した。その器種の構成は、④〈B類鬲+尖底罐+鉢形尖底器+円腹罐〉（生活址）で、この生活址と同じ集団の土器とは断定できないが、ほぼ同時期のすぐ隣接する墓地遺跡では寺窪系の双耳罐が多く出土している。一方、関中地方東部の豊鎬地区でも同地区の西周I a以前からB類鬲をとまなう墓が現われているが、これは土器群Bの一部の土器が、外来的要素として関中西部の劉家グループないし金河・晁峪グループから豊邑の造営以前と考えられるこの時期の関中東部に移入された現象であり、この地区にもともと土器群Bの伝統が存在していた可能性は大きくないと考えられる。

金河・晁峪グループは、宝鷄市周辺の地域でI期からIV期まで確認されるが、III期前後から東方より波及した土器群Aが、生活址、墓いずれにおいても優勢な位置を占めるA、B共存遺跡に変化する。しかもこれら共存遺跡は、IV期以降、すなわち西周前期に入ると、土器群Aの伝統を主体に成立する西周式土器をもつ遺跡に移行していく。この段階では、わずかにB類鬲の最終段階のものが西周式土器に伴出して、土器群Bの残存を示す。しかし一方、このグループの一部は、晁峪遺跡など宝鷄市西部の比較的狭い地域の遺跡で、IV期前後、したがって西周前期に入っても引き続き比較的純粋なI期以来のこのグループの土器組成を継続した。ただし、この地域の土器には寺窪系土器との関連が現われている。これと同じIV期前後、宝鷄市南部の茹家庄グループは、やはり土器群Aの直接の影響を受けず、

むしろ四川系の土器や寺窪系の土器と共存的な関係を形成していたのである。

涇河上流の碾子坡グループはI期〜IV期まで継続するが、IV期には西周式土器主体の遺跡に変わるようである。ただし、金河・晁峪グループと同じく、B類属の最終段階のものがこの中に残存する。なお、この碾子坡グループには、その早い段階（碾子坡I）で、殷系の土器が多数含まれ、遅い段階（碾子坡）では寺窪系の土器が現われる。これらは碾子坡グループの地域的性格の重要な側面となっている。

土器群BのIII期前後に広く出現する同一遺跡内での土器群Bと、Aの共存現象については、両者が融合に向うよりも両者が遺跡中で分離的に存在したようである。その証拠に、鬪鶏台などで墓域内での土器群B出土墓の集中的分布が認められた。またB類属VI形式のように土器群A、B各系統の要素の折衷的な土器も出現したが、限定的な存在でしかなく、そのような土器が後の時期にあたえた影響は大きくはない。さらに、土器群A、B共存という現象自体が長くは続かず、IV期以降、土器群Bの流れそのものが、関中地方で衰退し、かわって豊鎬など西周王朝の中心地で土器群Aを主体として成立する「西周式土器」が、関中地方のほぼ全域を覆うことになるのである。

#### (B) 土器群Bと周囲の土器群

土器群B各グループの土器は、B類属を中心とする在地独自の土器と、周囲の他の土器群と連携する土器形式との共存的關係の上に組成している。すなわち以下の状況が認められる。①I期からII期前後、金河・晁峪、劉家岡グループと辛店文化の間に共有される土器形式が存在する。②II期からIV期の前後、金河・晁峪、劉家、碾子坡、茹家荘の各グループに寺窪文化の特徴をもつ若干の土器が混入する。③IV期前後、茹家荘グループで四川系土器が共存する。④I、II期前後、碾子坡グループ生活址の土器に、土器群C（殷系土器）から移入された土器が比較的大きな位置を

占める。⑤I期の金河・晁峪グループの土器に、内蒙古中南部と関連する紋様の要素（凸線紋）が見られる。

1. 辛店文化、寺窪文化との関係

土器群Bは関中地方在来の土器群として西周式土器の成立に一つの重要な位置を占めたのであるが、一方でこの土器群自体の系譜や、渭河流域、黄河上流域全体の中での位置づけを考えると、その西方に並行した卡約文化、辛店文化、寺窪文化と一定の連携をもつことはもう一つの基本的な側面である。

四者は、図14のように、西から卡約文化、辛店文化、寺窪文化、土器群Bの順に分布する。辛店文化は洮河・大夏河の中下流域、湟水・莊浪河の下流域など青海東部から甘肅中部に分布し、寺窪文化は渭河上流、洮河上流を中心に、六盤山とその支脈隴山の東西の甘肅東部慶陽、平涼、天水の各地区に広く分布する。また、卡約文化はこの二者のさらに西方の、青海省西寧周辺に分布する。このうち、辛店文化と寺窪文化の相互排斥的と言える分布関係は顕著である。<sup>(66)</sup>

辛店文化の年代は、先述したように、南玉泉氏の研究によれば、7期に分期され、前一五世紀から前六世紀、「殷代中期」前後から「春秋初年」に至る千年近くに及ぶとされる。南氏の編年によれば、いわゆる姬家川類型はその四、五期（殷後期〜西周前期頃）、張家嘴類型は七期（西周後期から春秋初年頃）に相当すると考えられる。一方、寺窪文化の編年の整理は良好な発掘資料が少なく、なお十分な議論の対象とはなっていないが、最近の趙化成氏の研究が注目される。趙氏は既知の寺窪文化の内容は、寺窪山遺存、甘肅東部の欄橋——徐家碾遺存、九站遺存という少なくとも3つの地域的類型に分けられるとし、年代については、王占奎氏が九站遺跡を、一期（殷後期帝乙、帝辛期）、二期（殷末周初期）、三期（西周中、晩期から春秋初年）と分期したことを支持し、欄橋——徐家碾遺存の年代は九

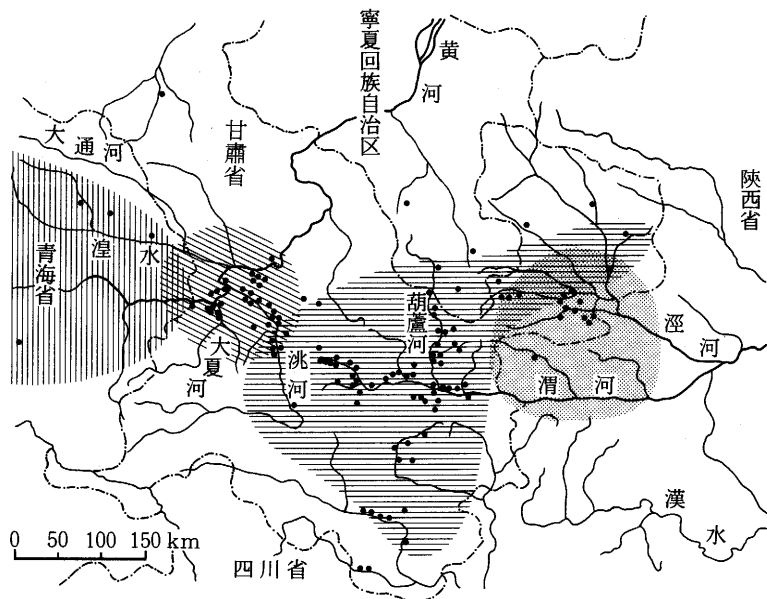


図14 辛店、寺窪、土器群Bの分布

図中の網目掛部分は、推定土器群B分布域。横線は寺窪文化、斜線は辛店文化、縦線は卡約文化の分布域を示す。・印は齊家文化関係遺跡。(倉林氏註66論文、図8に加筆)

站の一、二期に相当するとする。他方、寺窪山遺存は、九站遺存、欄橋——徐家碾遺存よりやや遡ると認識し、その年代観を考える材料として、寺窪山の墓で、辛店文化姫家川類型の大口双耳罐が共伴した例をあげ、それが南玉泉氏の辛店文化第四期（ほぼ殷墟期相当）に当たることを指摘する。すなわち趙氏は明言を避けてはいるが、既知の寺窪文化の継続した年代として、およそ殷後期から春秋初年を想定していると言える。さらに、趙氏はこの寺窪文化を継承し、東周期の秦文化と並行したものととして、「鏝形足根」（偏平状足尖の一種）をもつ一種の袋足鬲を大きな特徴とする「毛家坪B組遺存」を設定する。その年代は趙氏自身の調査した甘肅甘谷毛家坪遺跡の層位的根拠や秦國関連の墓に共伴した鏝形足根袋足鬲などからみて春秋期から戦国後期に及ぶことが知られる。

以上のような辛店、寺窪、土器群Bの三者の時間

的空間的關係の中で、いままじ具体的な土器の相互關係について述べておく。

①金河・晁峪グループ、劉家グループと辛店文化の關係。年代の項で述べたように、金河・晁峪と劉家の両グループにおいてB類鬲とともに主要な器種である有耳罐のうち、I形式とIII形式は辛店文化の早い段階の繩紋有耳罐と明らかに關係がある。しかも、その場合、有耳罐I形式とIII形式は、I期↓II期の間で丸底↓平底に変化するが、この変化は、並行期の辛店文化中の類似土器の変化に対応している。すなわち、南玉泉氏の辛店文化の土器編年では、I形式に類似する土器を「繩紋双耳罐」と呼び、辛店文化の一期から三ないし四期まで続くと考えているが、その間、丸底↓凹底（平底に近い）の変化があると指摘する。このことは、土器群BのIからII期と、辛店文化の一期から四期の間で、一部の土器の変化が連携していたことを示す。

これとは別に、土器群BのB類鬲や有耳罐の環状把手の肩部に見られるX字形の刻紋は、辛店文化では彩陶有耳罐の環状把手のX字形彩紋として、辛店文化の一期から七期まで常見される。

一方、B類鬲に類似する袋足鬲が、いわゆる辛店文化姫家川類型の中に少数含まれることが以前から指摘されている。しかしそれは辛店文化においてあくまで外来的な少数の客体的土器にすぎない。その姫家川類型は、南氏の編年では辛店文化の四期、五期相当で、これは土器群BのII期↓IV期に相当し、けっしてI期には遡らない。すなわちB類鬲はあくまで土器群Bに出自し、終始その主要な指標的土器なのであり、辛店文化中に外来的要素として波及した現象が姫家川類型にともなう若干の類似した鬲の存在であると考えられる。

②土器群Bと寺窪文化の關係。まず、右記した辛店文化姫家川類型にともなったB類鬲類似の袋足鬲に非常によく似た形態の鬲が、寺窪文化の寺窪山遺跡でも出土したことがある。しかし、辛店文化との關係同様、B類鬲類似の鬲

は、寺窪文化中にけつして一般的な鬲ではなく、やはり土器群Bからの外来的かつ一時的な寺窪文化へ波及と見るべきであろう。

しかし、その鬲とは別に、逆に寺窪文化に一般的な鬲が土器群Bに影響している。その一つはB類鬲V形式で、これは金河・晁峪、劉家、碾子坡の各グループにもなう。その袋足部と口頸部が外観上一体的で器高が高く、檔の上部に突起した波状の貼付紋を付した特徴は、寺窪系の鬲との関係を示す。<sup>68</sup>V形式のうち、劉家M49出土のVa形式の一例は、後述する寺窪文化と関連する有耳罐が共伴している。そのVa形式はほかに、碾子坡IIと、甘肅慶陽巴家嘴で出土している。後者の慶陽県周辺は寺窪文化分布域の東北部に入っており、寺窪文化の合水九站遺跡が近隣に所在し、この形式が寺窪文化と関連することを示唆する。

もう一つは、B類鬲VII形式である。これは片側に小型の環状把手をもつ単耳鬲というB類鬲中特異なものであるが、単耳鬲は甘肅東部の寺窪文化に広く見られる土器であり、明らかにそれと関係している。VII形式を出土した晁峪遺跡は寺窪文化分布域の東端に近い地点にあるだけでなく、同遺跡では寺窪文化関連の有耳罐が別に出土している。また碾子坡IIの中には外来的土器として寺窪文化の単耳鬲そのものが少なくとも1例混入している。

土器群B I期のB類鬲諸形式に顕著に見られた扁平状の足尖（鴨嘴状足尖）は、B類鬲の中ではその後しだいに円錐状のものに変化し、やがてB類鬲自体が関中地方から消える。一方、B類鬲が失われて以降、西周期の寺窪文化の鬲においてもそのような足尖の袋足鬲は欠如するか少なくとも顕著に見られることはない。ところが扁平状足尖をもつ袋足鬲（錐脚袋足鬲）はやがて春秋、戦国期に至って、寺窪文化のあとに甘肅東部に現われる毛家坪B組遺存の典型的土器として再び盛行するのである。毛家坪B組のこのような鬲は、寺窪文化分布地域であつた甘肅東部で春秋期

から見られるほか、戦国期に入ると宝鶏鬮鶏台「屈肢葬墓早期」など関中地方の秦国関連の墓からもたびたび出土している。<sup>(69)</sup> 毛家坪B組の偏平状足尖をもつ袋足鬮とB類鬮の早い段階に盛行したその類似が単なる偶然でないとするれば、この間の空白を埋める未確認の系譜、偏平状足尖の袋足鬮を長らく温存した系譜が存在すると予想される。

金河・晁峪グループと、劉家グループに見られる有耳罐のうち、IV形式のいわゆる単耳罐は、寺窪文化の単耳罐の類と関係があると考えられる。特に、IV a 4、IV a 5、IV b 2形式など、土器群B IV期の器面の縄紋を擦り消したタイプは、その器形とともに寺窪文化の単耳罐と明らかに密接な関連をもつ。しかし、IV a 1、IV a 3、IV b 1などI期、II期のそれは器面に縄紋を施し、環状把手肩部にX字形刻紋が見られる点など、同時期の有耳罐I、III形式と共通しており、このような特徴をもつ単耳罐は寺窪文化に知られていない。あるいは寺窪文化に見られる単耳罐は、もとは土器群Bに出自し、のちに土器群Bと寺窪文化の間で共有されるようになった土器かもしれない。

このほか、茹家庄グループでは、直接土器群Bと共存していないが、同時期の近接する墓地遺跡でいわゆる馬鞍形口縁の双耳罐が出土しており、同グループが寺窪文化ときわめて接近した状況におかれていたことを示している。

以上の、土器に見られる土器群Bと、辛店文化、寺窪文化の相互関係とは別に、墓制、葬制上に見られる西北地域の諸文化の関係について補足しておく。金河・晁峪グループの遺跡では墓の良好な資料はない。碾子坡遺跡の墓は、大半が豎穴土壙墓で、いわゆる「口小底大」の覆斗状をなし、二層台を有し、腰坑に似た小坑を設けるなどの点で、一般の西周墓につながると発掘者の胡謙盈氏は述べる。しかしよく類似した豎穴墓は寺窪文化でも広く行われており、その系譜関係は簡単ではなさそうである。<sup>(70)</sup>

その碾子坡遺跡では、1例であるが洞室墓が紹介されている。劉家遺跡では、遺跡の項で述べたように、墓制の確



認められた16基中、15基が洞室墓であった。洞室墓は、その形態に差異はあるが、早くは馬家窯文化半山類型、馬廠類型に見られ、ついで齊家文化、火燒溝類型、辛店文化、卡約文化、沙井文化などに例のある西北地域に長い伝統をもつ墓制である。<sup>(7)</sup>ただし、土器群Bと時期の重なる辛店文化のそれはむしろごく少数に限られ、寺窪文化にいたっては明確な洞室墓の例が知られていないことは注意される。洞室墓は、西周期の墓の中でも先述したように、豊鎬遺跡の西周前期に少数が存在している。ただその場合、洞室墓出土の土器は劉家につながる土器群Bではない。洞室墓は、さらにのちに関中地方の戦国中期頃から秦国関連の墓に広く普及することは周知のことに属する。馬家窯文化期から戦国期に連続とつづく西北地区の洞室墓の系譜の中で、劉家遺跡に代表される土器群Bのそれがどこに位置づけられるかは複雑な問題をはらんだ今後の検討課題である。

この他、劉家遺跡の墓では、墓壇内に礫石を埋置する習慣が認められるが、類似する現象は、碾子坡遺跡でも知られ、さらに寺窪文化の中にも見られる。<sup>(8)</sup>これも洞室墓と同じく、早くは馬家窯文化半山類型あたりから一部で行われた<sup>(9)</sup>西北地域の伝統であつたらしい。さらに、同じく劉家遺跡において副葬土器の多くが礫石で蓋をするという現象が認められるが、この現象も碾子坡の一部に見られ、寺窪文化でもかなり広く見られる。<sup>(10)</sup>また、碾子坡遺跡の墓に見られる、副葬土器をその中に置いた壁龕を有する墓は、寺窪文化の中で比較的広く見られる。<sup>(11)</sup>

## 2. 茹家荘グループに共存する四川系土器

宝鶏市南部の茹家荘の生活址や茹家荘、竹園溝の西周前期墓にもなう尖底の鉢や尖底の罐などの土器は、四川成都周辺の殷、周時代並行の「蜀」関連の遺跡で常見される土器と明らかに共通する。この両地の関係については、土器とは別に宝鶏南部で茹家荘、竹園溝の墓にもなう劍、戈、矛、斧などの青銅武器類が、のちの戦国期四川の巴蜀

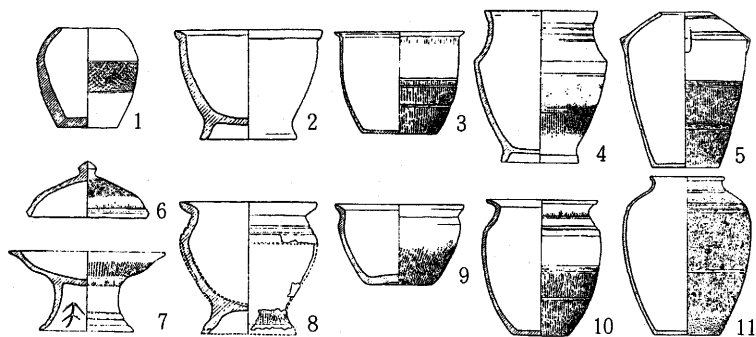


図15 碾子坡I(生活址)の土器の一部

1, 2. H134 3. H116 4-7, 9, 11. H507 8. H813 10. H118  
〔2, 7, 8は1/8, 1, 9は1/12, 3, 4, 6, 10は1/16, 5, 11は1/24〕

式青銅器の祖形となった可能性が指摘でき、殷末、西周前期頃に土器、青銅器において相互に交流する状況が存在していたとみられる。<sup>16)</sup>

### 3. 碾子坡グループ生活址の土器における殷系土器の要素

碾子坡生活址の器種の構成は、一二七頁の表6、7からも読み取れるように、寺窪文化、辛店文化などよりも殷系の土器群Cや殷墟の土器、あるいは土器群Aと類似する側面がある。碾子坡グループ生活址の土器のうち、圈足尊、斂口瓮、器蓋、圈足甗、円肩の瓮(図15-4、6、8、11)は、土器群Cまたは殷墟の土器に類似例が知られる。圈足尊、圈足甗など圈足付の容器は殷墟出土土器に一般的であるし、その口頸部に複数の平行沈線を施すことも殷系土器の容器に見られる大きな特徴である。斂口瓮は殷墟では一般的でないが、殷前期の二里岡遺跡や台西村遺跡ないしこれらに並行する関中地方の土器群Cの北村遺跡で見られる類似例を襲った器形と言える。円肩の瓮は、多様な形態が存在する殷墟出土の瓮の中に類似例を指摘することは容易である。

一方、碾子坡の甗や、簋、甑、豆、盆、平底尊(図15-2、3、7、9、10)などは器種としては土器群Cや殷墟の土器と、土器群Aの土器の双方と共通している。しかしそれぞれの形態を仔細に比較すると、甗、甑、豆

についてはその系譜関係は不明であるが、盆、篋はいずれも土器群Aのそれよりも土器群Cないし殷墟の土器により近い特徴をもつ。すなわち、碾子坡の盆は、口縁部の内外が複数の折稜をなし、胴部に縄紋と沈線を施すが、これは口縁部が単純に外反するか単折稜をなし、胴部に多く印紋帯を施す土器群Aの盆とは相違し、土器群Cないし殷墟の盆に近いと言える。篋は、そもそも土器群Aに一般的ではなく、その形態は殷墟出土の中に類似例を指摘することができる。

斂口鉢（図15-1）は、その器形と胴部の方格印紋帯が土器群Aの斂口鉢と関連があることを示している。この斂口鉢以外に土器群Aと直結する土器は見いだせない。

以上のように、碾子坡遺跡生活址出土の土器に殷系土器の流れを汲むものが多く存在していることが知られる。その場合、隣接する殷系の土器群である土器群Cに類似例が知られておらず、むしろ遠い殷墟のそれと比較できる例があるのは、あくまで土器群Cの内容が現在まで断片的にしかられていない（特に殷墟後期の生活址）ことに原因があると予想され、碾子坡グループに見られる殷系土器の要素はあくまで隣接する在地的な殷系土器である土器群Cを媒介として移入されたものと理解すべきであろう。

注目すべきは、こうした殷系土器の要素が、土器群B碾子坡グループと前節に述べた土器群Aの双方に見られることである。この現象は、関中地方東部ないし陝西中部に広がっていた可能性のある土器群Cを媒介として、殷系土器の要素が涇河流域の碾子坡グループと漆水河流域から関中中部の北側に展開していた可能性のある土器群Aの双方に並行して流れた結果ではないだろうか。土器群Aと碾子坡グループの間で、器種の構成などに一定の類似した側面が認められるのは両者間の直接の関係よりも、同じ殷系土器群から並行して影響を受けたことに原因があったと考えら

れる。

4. 内蒙古中南部との関係

I期のB類鬲や一部の有耳罐に見られる口縁端部や袋足部に貼付けた特徴的な凸線紋は、朱開溝遺跡に代表される内蒙古中南部で特徴的に見られるいわゆる「蛇紋」鬲の紋様との関係が指摘できる。朱開溝遺跡は第一段（龍山文化期後期並行）から第五段（二里岡上層）殷墟I、II並行）に分期され、「蛇紋」鬲は、第三段（二里頭期並行）から現われるが、第五段でその量が増加し、かつその「蛇紋」と呼ばれる細線状の凸線紋は、甗など他の器種にも用いられ、この時期を特徴づける土器の装飾となる。一方、関中の土器群Bに見られる凸線紋では、さらにその凸線の末端に小円餅を付加する例が知られるが、類似する装飾は内蒙古寨子上遺跡出土の鬲片にも見られる。<sup>(78)</sup> この鬲片は共伴遺物が不明ではあるが、口縁部に見られる平行線状の付加堆紋は、朱開溝遺跡第五段の「蛇紋」鬲に共通する特徴をもつ。

このように長城地帯の「朱開溝文化」に発達したいわゆる「蛇紋」鬲の装飾が、関中地方のB類鬲に密接な関係があることは明らかである。ところで「蛇紋」鬲は、一方では長城地帯の東部を代表する夏家店下層文化の中にも若干の類似要素が知られ、さらに、同様の著しい特徴をもつ一群の鬲が、はるか北方のバイカル湖東南ウランウデ周辺でも出土している。<sup>(79)</sup>

B類鬲の早期に認められる特徴の一つから、B類鬲が単に関中地方で孤立した発展の系譜をもつ土器なのではなく、長城地帯を含む龍山文化期以降の華北西北部の広い「関係圏」のなかで出現した背景のあることが知られるのである。

\*

土器群Bの始源については現在のところ十分な手がかりはない。この事情は関係の深い辛店、寺窪両文化についても同様である。しかし少なくとも次のことは言える。第一に、辛店文化、寺窪文化は、甘肅省を中心に分布する龍山文化後期並行の齊家文化とほぼ同じ分布域に現われてくる。第二に、土器群Bの分布域は、近年知られた客省莊第二期文化双庵類型<sup>(9)</sup>の分布域と一定の関係がある。双庵類型は、ほぼ漆水河（武功県）以西の宝鷄地区など関中西部を中心に分布し、その西縁は甘肅東部で齊家文化の分布域と交錯する。双庵類型の概念は、客省莊遺跡や臨潼康家遺跡など、関中地方中、東部の客省莊第二期文化との対比において設定されたもので、後者を、鞏啓明氏の呼称にしたがつて康家類型と呼ぶことにする。

双庵類型の土器は、東方の康家類型の土器が大部分灰色系であるのに対して、紅褐色系が80パーセント前後を占める点で顕著な特徴がある。この特徴は、むしろ西方の齊家文化の土器相に接近していると言える。客省莊第二期文化が齊家文化と密接な関係にあることは従来から認識されてきたが、特に双庵類型は、関中地方中、東部の康家類型に比べ、土器の色調のほか、器形から見ても、齊家文化との関係がいつそう密接であることが指摘できる。

このように龍山文化期末葉において、齊家文化と客省莊第二期文化双庵類型が、東西に並行する構図が、その後の辛店文化、寺窪文化と土器群Bが並行する構図に重なる関係にあることが注目される。そのことは、分布上の対応関係とともに、土器群Bが鬲を主体とし大部分の土器に縄紋が施されるのに対し、辛店文化、寺窪文化では、三足器が少数で、かつ環状把手をもつ土器が多く、また器面が磨研されて縄紋をもたないものが多くを占めるなどの点から、大局的に見て、前者が客省莊第二期文化、後者が齊家文化の流れを汲む関係にあることが推定される。同時に、土器群Bと辛店文化、寺窪文化の間には、型式変化の連携した土器や、相互に移入された土器が存在する点で、相互依存

の関係が存在しているのである。このようにみるならば、齊家文化―双庵類型の間に存在した地域の相互関係が、次の段階で辛店文化、寺窪文化―土器群Bの相互関係へと移行したものと捉えることができよう。

ところで辛店文化の起源について、南玉泉氏は新発見の山家頭一類遺存を齊家文化と辛店文化の間に介在させて、齊家文化↓山家頭一類↓辛店文化の漸移的推移をある程度説明している。その山家頭一類の中には辛店文化と土器群Bとに共有される有耳罐の早期の形態が含まれている。この現象は、土器群Bの有耳罐の出自についても、辛店文化同様山家頭一類に求められるか、ないしはそれと並行し、近似した形式の有耳罐をともなう、齊家文化に遅れる未知の土器群に求められる可能性を示す。一方、土器群Bの中で最も主要な位置をしめるB類鬲については、基本的に鬲をともなわない山家頭一類や、鬲が少数の客体的な器種でしかない齊家文化中にその源流を求めることはできず、やはり鬲の発達した客省莊第二期文化、とりわけ関中西部の双庵類型と、それに後続したであろう未知の土器群に手がかりを求めていくのが今後の課題となる。

土器群Bは、このように辛店文化、寺窪文化が齊家文化の後を襲った土器群であるのに対して、客省莊第二期文化双庵類型のあとに現われた土器群である。しかし、三者は、齊家文化と双庵類型が相互に連携していた状況に対応するように、やはり相互に土器形式の連携した関係を有する3つの土器群であった。これが土器群Bの形成に関する第一の側面である。土器群Bはまた、その内部で金河・晁峪、劉家、碾子坡の3つ主要な地域的グループにわかれる。このうち涇河上流の碾子坡グループは、その生活址の土器に土器群Cを媒介したとみられる一定の殷系土器の要素を含んでいる。土器群Cから殷系土器の波及を受けた現象は、土器群Aにも共通した現象であり、それが故に、碾子坡グループと土器群Aの土器組成に類似点が生じていた。これが土器群Bの形成の第二の側面である。

表6 生活址出土土器の器種構成

	A類扁	B類扁	C類扁	その他扁	罍	甗	甑	鼎	盆	簋・孟	豆	仮腹豆	杯	鉢	平底盤	斂口鉢	
土器群 A 遺跡	◎	△				○	○			◎	○	○		△	○	○	◎
土器群 B(碾子坡)	△	◎				○	○			○	○	○			○		△
土器群 C 遺跡			◎		△	○		△		◎	○	○	◎		△		
西周式(西周 I・II)	◎	△				○	△	△		◎	△						○
殷墟			◎	△	△	○	○	△		◎	◎	◎	◎	△	○		
寺窪文化				○		○				△		○			△		
辛店文化				△			○	△		△		○		○	○		

	圈足盤	单耳罐	圈足瓶	器蓋	釜形器	平底尊	圈足尊	花辺罐	斂口瓮	その他瓮	圈足壺	腹耳壺	その他壺	円肩罐	折肩罐 A	折肩罐 B
土器群 A 遺跡						○								◎	◎	
土器群 B(碾子坡)			○	○		○	○		○	○	○					○
土器群 C 遺跡				○				◎	○	◎						
西周式(西周 I・II)			○			○			△	◎				◎	◎	
殷墟	△		○	◎	○		○			○	○					
寺窪文化		◎								△			○			
辛店文化	△	△		○						○		◎				

	双耳罐	その他罐	罍	大口尊	缸
土器群 A 遺跡					
土器群 B(碾子坡)					
土器群 C 遺跡		○	○	○	△
西周式(西周 I・II)		○			
殷墟		◎	○	○	○
寺窪文化	◎	△			
辛店文化	◎				

◎：比較的多い，○：一般的ないし量不明，△：少数。器種の分類は，もとより報告書ごとに差が大きい。「孟」は圈足をもつもの，平底のいわゆる孟は「鉢」にまとめた。円肩罐，折肩罐 A は土器群 A に顕著なタイプ。折肩罐 B は土器群 B に見られるタイプ。「その他罐」「その他瓮」のなかには多様なものが含まれる。またここにあげた各文化，各土器群はその年代が必ずしも並行しているわけではなく，違う時期の内容がまとめられている。二重線は，一応の目安として炊器，小型の容器，比較的大型の容器の区別である。

表7 墓の副葬土器の器種構成

	A類隔	B類隔	C類隔	その他隔	鼎	甗	簋・盃	豆	飯腹豆	盆	鉢	孟	腹耳壺	壺	円肩罐	平底尊	圈足尊
土器群 A 遺跡	◎	△					△	△	○	△				△	◎	○	
土器群 B(金河)		◎															
土器群 B(劉家)		◎															
土器群 B(碾子坡)		◎															
土器群 C 遺跡			◎			△	△	△								○	△
西周式(西周 I・II)	◎		◎				◎	△		△				○	◎		
殷墟			◎		△		◎	◎				△					
寺窪文化				○			○	○		△	△			○			
辛店文化										△	△		◎				

	折肩罐 A	折肩罐 B	花边罐	その他罐	双耳罐	单耳罐	罍	瓮	圈足盤	圈足甗	圈足罍	圈足卣	觚形尊	罍	觚	爵
土器群 A 遺跡	○															
土器群 B(金河)					◎	◎										
土器群 B(劉家)	△	◎			◎	◎										
土器群 B(碾子坡)																
土器群 C 遺跡			○	◎			△									
西周式(西周 I・II)	◎						○		○		△					
殷墟				○			○		○	△	△	△	△	△	◎	◎
寺窪文化				○	◎	◎	○	△		△		△				
辛店文化					◎											



土器群Bに後続する系譜について付言すれば、土器群Bの消息は西周前期で途絶えるが、土器群Bの典型的土器であるB類鬲の系譜は、西周中、後期の資料的な空白期間において、春秋、戦国期の毛家坪B組の袋足鬲の中に一部の要素が再現される。偏平状足尖はその顕著な要素である。この現象は、土器群Bの要素が、寺窪文化に並行し偏平状足尖の袋足鬲を継承した未確認の文化（ないし寺窪文化に属する未確認の土器群）を経由して毛家坪B組に連なることを示唆している。毛家坪B組の出自とも絡んで今後注目すべき問題である。

関中地方で周の文化が成立する過程で、土器群Bや間接的には寺窪文化がそれとかわりをもったが、同時に注目すべきは、後に秦の文化が展開するとき、土器群Bや寺窪文化の系譜を引く毛家坪B組が、今度は秦文化と一定の関係をもったことである。関中地方に台頭した周、秦という異なる時代の二つの政治的勢力の台頭に、関中地方の西部や甘肅東部の在来の文化が相似た文化史的構図の中でなんらかのかわりをもったことはきわめて興味深い。

- 1 前掲鄒衡「論先周文化」。
- 2 陝西周原考古隊「扶風劉家姜戎墓葬發掘簡報」『文物』一九八四年七期。
- 3 盧連成「扶風劉家先周墓地剖析——論先周文化」『考古與文物』一九八五年二期、四六頁。
- 4 飯島武次「先周文化陶器の研究——劉家遺跡出土陶器の検討」『考古学雑誌』七四—一。
- 5 張天恩「高領袋足鬲的研究」『文物』一九八九年六期。
- 6 劉宝愛「宝鷄發現辛店文化陶器」『考古』一九八五年九期。また、盧連成氏註3論文。
- 7 註6に同じ。また、同じ石嘴頭出土の時期の遅いB類鬲（石嘴頭II）は、王桂枝「宝鷄下馬營旭光西周墓清理簡報」

『文博』一九八五年二期、図四一八に見る。

8 喬今同「平涼県発現石器時代遺址」『文物參考資料』一九五六年二期。

9 考古研究所渭水調査発掘隊「陝西渭水流域調査簡報」『考古』一九五九年二期、図版一一一。

10 張天恩氏註5論文、三五頁、郿県文化館蔵03号隔。

11 ここにあげた出土地点は、いずれも註5張天恩論文の高領袋足隔第一期と第二期の出土地点である。范家寨の隔は、石嘴頭I出土の双耳の隔に近く、涼泉のそれは、石嘴頭I出土の鶏冠耳をもつ隔に類似するとされる。

12 註5張天恩論文。鬮鷄台Iのこの土器は、一九八三年に同遺跡が再調査されたときの資料で、未発表である。張氏によればこの標本Iと呼ばれる隔のみが、旧知の鬮鷄台の他のB類隔（いずれも本稿の鬮鷄台II、IIIに属する）とは形態が異なるという。

13 註6に同じ。

14 註5張天恩論文、三八頁。

15 寺窪文化の単耳の隔として甘肅莊浪徐家碾の寺窪文化の墓M12の例をあげておく。中国社会科学院考古研究所涇渭工作队「甘肅莊浪県徐家碾寺窪文化墓葬發掘紀要」『考古』一九八二年六期。

16 寺窪文化の単耳罐として、甘肅莊浪徐家碾M12の例をあげておく。註15報告。

17 閻宏斌「宝鷄林家村出土西周青銅器和陶器」『文物』一九八八年六期。

18 宝鷄市考古隊「宝鷄市附近古遺址調査」『文物』一九八九年六期。

19 註2報告。

20 註3盧連成論文で、氏もまた本稿の劉家Iにあたる墓を一時期にまとめるが、その根拠の一つとして土器の分析のほか、

同期の墓が集中して分布することなど原報告にはない墓地の構成にも言及している。

- 21 盧連成・胡智生『宝鷄強國墓地』文物出版社、一九八八年。ただし竹園溝のそれは、劉家M49のそれをふたつ合体させたようないわゆる双聯罐である。
- 22 前掲鄒衡「再論先周文化」、二六頁。
- 23 註22に同じ。
- 24 龐文龍・崔玫英「陝西岐山近年出土的青銅器」『考古與文物』一九九〇年一期。
- 25 中国社会科学院考古研究所涇渭工作隊「陝西長武碾子坡先周文化遺址發掘記略」『考古學集刊』第六集（中国社会科學出版社、一九八九年）。
- 26 註25報告、図二。
- 27 註25報告、図一〇—一六。
- 28 陝西考古所涇水隊「陝西郿県下孟村遺址發掘簡報」『考古』一九六〇年二期、徐錫台「早周文化的特点及其淵源的探索」『文物』一九七九年一〇期。
- 29 石璋如「閩中考古調查報告」『中央研究院歷史語言研究所集刊』二七本（台北、一九五六年）、図版二—二二、付図二—四。
- 30 甘肅省文物工作隊「甘肅崇信于家灣周墓發掘簡報」『考古與文物』一九八六年一期。中国考古学会編『中国考古学年鑒一九八七』文物出版社、一九八八年、二七三頁。
- 31 陝西省社会科学院考古研究所涇水隊「陝西涇水上游調查」『考古』一九六二年六期。
- 32 註18。
- 33 註21報告、六一—二頁。
- 34 註21報告、「結語」。
- 35 宝鷄市考古隊「宝鷄市紙坊頭遺址試掘簡報」『文物』一九八九年五期。

- 36 張天恩氏註5論文、三五頁。
- 37 蘇秉琦氏前掲「鬪鷄台溝東区墓葬」。
- 38 張天恩氏註5論文。
- 39 韓偉・吳鎮烽「鳳翔南指揮西村周墓的發掘」『考古與文物』一九八二年四期。
- 40 ①陝西周原考古隊「陝西岐山賀家村西周墓發掘報告」『文物資料叢刊』八。本稿で引用する76 QHM、76 QHZM、76 QHLM、78 QHMという墓の番号は、この報告のものである。②陝西省博物館・陝西省文物管理委員會「陝西岐山賀家村西周墓葬」『考古』一九七六年一期。本稿でこのとき發掘された一連の「小墓」の出土品にふれるが、これらの小墓に番号は与えられていない。③徐錫台「岐山賀家村周墓發掘簡報」『考古與文物』創刊号（一九八〇年）、および、同「早周文化的特点及其淵源的探索」『文物』一九七九年一〇期。本稿で引用しているMという墓の番号はこれらの報告中のものである。④陝西省博物館・文管会岐山工作队「陝西岐山礼村附近周遺址的調查和試掘」『文物資料叢刊』二。この報告にある、土取り作業中に賀家村付近で出土したとされる少数の土器に本稿でもふれる。
- 41 註18報告。
- 42 張天恩氏註5論文、三八頁。
- 43 註18報告。
- 44 張天恩氏註5論文、三八頁。
- 45 註7王桂枝報告、および註18報告。
- 46 中国社会科学院考古研究所豊鎬發掘隊「長安灃西早周墓葬發掘記略」『考古』一九八四年九期。
- 47 飯島氏註4論文。
- 48 註46に同じ。

- 49 中国社会科学院考古研究所澧西瓮掘隊「一九六七年長安張家坡西周墓葬的發掘」『考古學報』一九八〇年四期。
- 50 中国社会科学院考古研究所澧西瓮掘隊「長安張家坡M188西周洞室墓發掘簡報」『考古』一九八九年六期。
- 51 中国社会科学院考古研究所澧西瓮掘隊「一九八四年澧西大原村西周墓地發掘簡報」『考古』一九八六年一二期。
- 52 註50報告、五二八頁。
- 53 許俊臣・劉得禎「甘肅合水、慶陽県出土西周陶器」『考古』一九八七年七期。
- 54 註53に同じ。
- 55 紙坊頭Ⅱ(4A層)では沈線が凸線に置き換えられて、きわめて強調された例がある。
- 56 註5張天恩論文。
- 57 特に扶風益家堡遺跡については、発掘を担当した北京大学考古系孫華氏の見解を窺うことができた。
- 58 表中の遺跡のほか、時期は特定できないが次の地点でB類鬲が出土している。宝鶏搭梢、東崖、隴県鄭家溝(以上、註5張天恩論文三四頁、および註18宝鶏市考古隊報告)。
- 59 劉宝愛・嘯鳴「宝鶏市博物館収蔵的陶器」『文物』一九八九年五期。ここに紹介された鬲のうち、4311・ICI・631' 955・ICI・136' 3634・ICI・151' 3635・ICI・52' 452'。
- 60 註59文献の' 3636・ICI・53' 3666・ICI・83' 3630・ICI・47' 452'。
- 61 註59文献の' 4835・ICI・650' 4832・ICI・647' 3665・ICI・82' 3633・ICI・50' 452'。
- 62 青海省文物管理処考古隊・中国社会科学院考古研究所「青海柳灣」文物出版社、一九八四年。
- 63 甘肅省文物工作隊・北京大学考古系甘肅實習組「甘肅臨夏蓮花台辛店文化墓葬發掘報告」『文物』一九八八年三期。
- 64 南玉泉「辛店文化序列及其與卡約、寺窪文化的關係」(俞偉超主編「考古類型學的理論與實踐」文物出版社、一九八九年所収)。

65 註5張天恩論文は、本稿以前に筆者の土器群BⅠ期相当の有耳罐を柳灣遺跡の辛店文化に並行するという認識を示している。

66 註64南玉泉論文、一〇五頁参照。なお、これら諸文化の関係や起源については、倉林眞砂斗「齊家文化周辺の土器群」『日本中国考古学会会報』第二号を参照。

67 趙化成「甘肅東部秦和姜戎文化的考古学探索」(俞偉超主編『考古類型学的理論與實踐』文物出版社、一九八九年所収)。

68 一例として、甘肅莊浪賀子溝出土の高をあげる。ただし、これに類する寺窪文化の高は、土器群BのV形式より年代が下がる可能性がある。丁広学「甘肅莊浪県出土的寺窪陶器」『考古與文物』一九八一年二期、図二一。

69 この種の鬲は、宝鷄鬪鷄台の「屈肢葬」A3、C4、H7、K10の4墓出土の高のほか、西安半坡のM88…1、10…1(金学山「西安半坡的戦国墓葬」『考古学報』一九五七年三期)、鳳翔高莊M9…6(呉鎮烽・尚志儒「陝西鳳翔西村戦国秦墓發掘簡報」『地発掘簡報』『考古與文物』一九八一年一期)、鳳翔西村79M66…2(李自智・尚志儒「陝西鳳翔西村戦国秦墓發掘簡報」『考古與文物』一九八六年一期)、銅川棗廟(陝西省考古研究所「陝西銅川棗廟秦墓發掘簡報」『考古與文物』一九八六年二期)、宝鷄李家崖(何欣雲「宝鷄李家崖秦墓清理簡報」『文博』一九八六年四期)などの例が知られる。いずれも戦国期に入る秦國関係の墓で、春秋期に遡る例は知られていない。なお、この種の鬲をめぐるのは、俞偉超「古代「西戎」和「羌」、胡」文化帰属問題的探討」『青海省考古学会会刊』一期、韓偉「關於「秦文化是西戎文化」的質疑——兼談秦文化的族属」『青海考古学会会刊』二期にも指摘がある。

70 胡謙盈「試論寺窪文化」『文物集刊』二。寺窪山遺跡や、九站遺跡などで知られる。

71 趙建龍「試論黄河流域的洞室墓」『西北史地』一九八八年三期、謝端琿「試論我国早期土洞墓」『考古』一九八七年二期参照。謝氏によれば、洞室墓(土洞墓)には「凸」字形と「日」字形の2種があり、劉家遺跡の洞室墓はすべて「日」

字形である。馬家窯文化では2種が並行して行われているが、齐家文化では「凸」字形に限られ、その後続の諸文化では「日」字形に限られるという変遷を見せる。

72 例えば、欄橋遺跡では、9基の竪穴土壙墓のうち5基の墳土中から故意に埋めたとみなされる自然石が発見されている。

甘肃省文物工作队・北京大学考古系・西和县文化館「甘肅西和欄橋寺窪文化墓葬」『考古』一九八七年八期。

73 註62「青海柳灣」参照。

74 王占奎「試論九站寺窪文化遺址——兼論甘肅東部地区寺窪文化」北京大学碩士論文、油印本。

75 中国社会科学院考古研究所涇渭工作队「甘肅莊浪縣徐家碾寺窪文化墓葬發掘紀要」『考古』一九八二年六期。

76 この問題は、註21掲報告、「結語」、及び盧連成・胡智生「宝鷄茹家莊、竹園溝墓地有関問題的探討」『文物』一九八三年二期で詳しく論じられている。また、西江清高「巴蜀及び嶺南地方の青銅器文化をめぐる若干の問題」『東南アジア歴史と文化』一三を参照。

77 内蒙古文物考古研究所「内蒙古朱開溝遺址」『考古學報』一九八八年三期。従来、内蒙古中南部の早期の青銅器時代の文化を大口二期文化と沙坨圪旦遺存を軸にまとめることも試みられているが（崔璇・斯琴「内蒙古中南部新石器至青銅時代文化初探」『中国考古学会第四次年会論文集』文物出版社、一九八五年所収）、朱開溝遺跡の発掘者は、朱開溝文化の内容をもって複雑な諸相を示すこの地域の早期青銅器時代文化の全体をまとめる新しい案を提示している。本稿も朱開溝遺跡の成果を重視して、その分期内容を参照する。

78 註77崔璇・斯琴論文、図七。

79 劉觀民「試析夏家店下層文化的陶器」（『中国考古学研究』文物出版社、一九八六年所収）、同「蘇聯外貝加爾地区所出幾件陶器的分析」（田昌五・石興邦主編『中国原始文化論集』文物出版社、一九八九年所収）。

80 客省莊二期文化双庵類型は、一九七七年の岐山双庵遺跡の発掘で客省莊遺跡のそれとは差異のある土器群として認識

されたことに始まり（西安半坡博物館「陝西岐山双庵新石器時代遺址」『考古学集刊』三二、鞏啓明「關於客省莊文化的若干問題」（田昌五・石興邦主編『中國原始文化論集』文物出版社、一九八九年所収）において、康家類型、石峁類型と並ぶ客省莊文化の分類として理解されるようになった。しかし、双庵遺跡に代表される土器群の独自性を評価して、これを客省莊第二期文化から分離し、「双庵遺存」の名で理解する立場もある（籍和平「從双庵遺址的発掘看陝西龍山文化的有關問題」『史前研究』一九八六年一、二期）。